

四国縦貫自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

22

花 園 遺 跡
試 掘 調 査 総 括

2 0 0 1

徳 島 県 教 育 委 員 会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日 本 道 路 公 団



花園遺跡 遺構完掘状況

例 言

1. 本書は1994年度から1996年度にかけて調査を実施した四国縦貫自動車道に伴う埋蔵文化財試掘調査および発掘調査報告書である。
2. 本書には、三好郡三野町所在の花園遺跡の発掘調査および本調査に至らなかった同じく三野町の太刀野山遺跡（Ⅰ）・太刀野山遺跡（Ⅱ）と三好郡三好町の宮ノ岡遺跡（Ⅰ）・宮ノ岡遺跡（Ⅱ）・台遺跡の報告書を収録した。
3. 発掘調査は日本道路公団高松建設局（現日本道路公団四国支社）から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。

・発掘調査期間

花園遺跡	1995年6月5日～1995年6月7日（第一次試掘調査）
	1995年9月12日～1995年9月29日（第二次試掘調査）
	1996年4月3日～1996年9月30日（本調査）
太刀野山遺跡（Ⅰ）	1994年5月9日～1994年5月23日（試掘調査）
太刀野山遺跡（Ⅱ）	1994年10月4日～1994年10月7日（試掘調査）
	1995年10月9日～1995年10月11日（第二次試掘調査）
宮ノ岡遺跡（Ⅰ）	1996年4月15日～1996年5月8日（試掘調査）
宮ノ岡遺跡（Ⅱ）	1996年5月9日～1996年5月16日（試掘調査）
台遺跡	1996年5月17日～1996年5月31日（試掘調査）

・整理業務、報告書作成期間 2001年4月1日～2002年3月31日

5. 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

凡例

SA 掘立柱建物跡	SD 溝	SJ 水利施設
SK 土坑	SO 窯跡	SP 柱穴
SR 流路	ST 埋葬施設	SX 不明遺構

6. 方位は国土座標第Ⅳ座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T.P）を表す。
7. 本書で用いた土層及び土器の色調は小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』1989年版によった。
8. 遺物番号・挿図番号は、遺跡ごとに全て通し番号とした。
9. 第2図の地形図は建設省国土地理院発行の1/50,000の地形図「阿波池田」を縮小・転載使用した。
10. 本書の執筆はIを貞野保仁、その他を烏野美子が担当し、全体の編集は烏野が行った。写真は遺物を烏野美子、X線写真を植地岳彦、遺構はそれぞれの担当者が撮影した。

序 文

本報告書は、四国縦貫自動車道（美馬～池田）の建設に伴い、1994年度より1996年度にかけて調査を実施した三好郡三野町の花園遺跡および三好郡三野町から三好町に所在する本調査に至らなかった5遺跡の試掘調査の成果をまとめたものであります。

これらの遺跡は、いずれも吉野川上流北岸、阿讃山脈南側の緩やかな傾斜面や山麓に位置しており、主に弥生時代と中世から近世にかけての遺構・遺物が確認されました。特に花園遺跡では、室町時代の遺構・遺物が検出され、貴重な成果を上げることができました。

本書が調査研究の一資料として活用され、埋蔵文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施、報告書の作成にあたり、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元の皆様の多大な御援助、御協力をいただきましたことに深く感謝の意を表します。

平成14年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 松村 通治

本文目次

I 調査にいたる経緯	1
1 調査の経緯	2
II 花園遺跡	7
1 調査の経過	8
(1) 調査の経過	8
(2) 発掘調査の方法	8
(3) 調査日誌抄	9
2 遺跡の立地と環境	11
(1) 遺跡の地理的環境	11
(2) 遺跡の歴史的環境	11
3 花園遺跡調査成果	15
(1) 遺跡の基本層序	15
(2) 検出された遺構と遺物	22
A 区	22
暗渠 1 (SJ1001)	22
暗渠 2 (SJ1002)	26
暗渠 3 (SJ1003)	26
柱穴19 (SP1019)	26
自然流路 1 (SR1001)	27
火葬墓 1 (ST1001)	27
不明遺構 1 (SX1001)	27
不明遺構 2 (SX1002)	27
不明遺構 3 (SX1003)	30
不明遺構 4 (SX1004)	30
不明遺構 6 (SX1006)	30
不明遺構 7 (SX1007)	30
不明遺構 8 (SX1008)	30
不明遺構 9 (SX1009)	30
不明遺構10 (SX1010)	33
不明遺構11 (SX1011)	33
不明遺構13 (SX1013)	33

B 区	35
掘立柱建物跡 1 (SA1001)	35
掘立柱建物跡 2 (SA1002)	35
炉跡 1 (SH1001)	38
炉跡 2 (SH1002)	38
窯跡 1 (SO1001)	38
柱穴140 (SP1140)	38
柱穴161 (SP1161)	40
柱穴164 (SP1164)	40
柱穴192 (SP1192)	40
土坑 1 (SK1001)	42
不明遺構14 (SX1014)	42
不明遺構15 (SX1015)	42
不明遺構16 (SX1016)	43
不明遺構17 (SX1017)	43
不明遺構18 (SX1018)	43
不明遺構19 (SX1019)	43
不明遺構20 (SX1020)	43
不明遺構21 (SX1021)	43
不明遺構22 (SX1022)	43
不明遺構23 (SX1023)	47
C 区	49
掘立柱建物跡 3 (SA1003)	49
溝 1 (SD1001)	50
溝 2 (SD1002)	50
溝 3 (SD1003)	50
溝 4 (SD1004)	50
不明遺構24 (SX1024)	52
不明遺構25 (SX1025)	52
不明遺構26 (SX1026)	52
不明遺構27 (SX1027)	52
不明遺構28 (SX1028)	52
不明遺構29 (SX1029)	52
遺物包含層の出土遺物	56
(3) まとめ	74

Ⅲ 試掘調査総括	99
1 太刀野山遺跡 (Ⅰ)	100
(1) 遺跡の位置	100
(2) トレンチの設定	100
(3) 基本層序	100
(4) 出土遺物	102
(5) まとめ	102
2 太刀野山遺跡 (Ⅱ)	106
(1) 遺跡の位置	106
(2) トレンチの設定	106
(3) 基本層序	106
(4) まとめ	106
3 宮ノ岡遺跡 (Ⅰ)	109
(1) 遺跡の位置	109
(2) トレンチの設定	109
(3) 基本層序	109
(4) 出土遺物	111
(5) まとめ	111
4 宮ノ岡遺跡 (Ⅱ)	116
(1) 遺跡の位置	116
(2) トレンチの設定	116
(3) 基本層序	116
(4) 出土遺物	118
(5) まとめ	118
5 台遺跡	123
(1) 遺跡の位置	123
(2) トレンチの設定	123
(3) 基本層序	123
(4) 出土遺物	125
(5) まとめ	125

挿 図 目 次

II 花園遺跡	第47図 SX1015出土遺物実測図	44
第1図 花園遺跡グリッド配置図	第48図 SX1016実測図	44
第2図 花園遺跡周辺主要遺跡分布図	第49図 SX1017実測図	45
第3図 A区北壁基本土層図	第50図 SX1018実測図	45
第4図 B区西壁基本土層図	第51図 SX1019実測図	45
第5図 花園遺跡調査区位置図	第52図 SX1020実測図	45
第6図 花園遺跡遺構全体図	第53図 SX1021実測図	46
第7図 A区遺構配置図	第54図 SX1022実測図	46
第8図 SR1001・SJ1001・2・3実測図	第55図 SX1023実測図	46
第9図 SJ1001遺構断面図	第56図 C区遺構配置図	48
第10図 SJ1001出土遺物実測図	第57図 SA1003実測図	49
第11図 SJ1002遺構断面図	第58図 SD1001実測図	51
第12図 SJ1003遺構断面図	第59図 SD1002実測図	51
第13図 SJ1003出土遺物実測図	第60図 SD1003実測図	51
第14図 SP1019実測図	第61図 SD1004実測図	53
第15図 SP1019出土遺物実測図	第62図 SX1024実測図	53
第16図 ST1001実測図	第63図 SX1025実測図	54
第17図 ST1001出土遺物実測図	第64図 SX1026実測図	54
第18図 SX1001実測図	第65図 SX1027実測図	55
第19図 SX1002実測図	第66図 SX1028実測図	55
第20図 SX1003実測図	第67図 SX1029実測図	55
第21図 SX1004実測図	第68図 SX1029出土遺物実測図	56
第22図 SX1006実測図	第69図 包含層出土遺物実測図(1)	57
第23図 SX1008実測図	第70図 包含層出土遺物実測図(2)	58
第24図 SX1007実測図	第71図 包含層出土遺物実測図(3)	59
第25図 SX1013実測図	第72図 包含層出土遺物実測図(4)	60
第26図 SX1009実測図	第73図 包含層出土遺物実測図(5)	61
第27図 SX1010実測図	第74図 包含層出土遺物実測図(6)	62
第28図 SX1011実測図	第75図 包含層出土遺物実測図(7)	63
第29図 B区遺構配置図	第76図 包含層出土遺物実測図(8)	64
第30図 SA1001実測図	第77図 包含層出土遺物実測図(9)	65
第31図 SA1002実測図	第78図 包含層出土遺物実測図(10)	67
第32図 SH1001実測図	第79図 包含層出土遺物実測図(11)	68
第33図 SH1001出土遺物実測図	第80図 包含層出土遺物実測図(12)	69
第34図 SH1002実測図	第81図 包含層出土遺物実測図(13)	71
第35図 SO1001遺構・出土遺物実測図	第82図 包含層出土遺物実測図(14)	72
第36図 SP1140実測図	第83図 包含層出土遺物実測図(15)	73
第37図 SP1140出土遺物実測図		
第38図 SP1161実測図	III 試掘調査総括	
第39図 SP1161出土遺物実測図	1 太刀野山遺跡 (I)	
第40図 SP1164実測図	第1図 基本土層柱状図	100
第41図 SP1164出土遺物実測図	第2図 太刀野山遺跡 (I) 調査地位置図	101
第42図 SP1192実測図	第3図 出土遺物実測図	103
第43図 SP1192出土遺物実測図		
第44図 SK1001実測図	2 太刀野山遺跡 (II)	
第45図 SX1014実測図	第1図 基本土層柱状図	106
第46図 SX1015実測図	第2図 太刀野山遺跡 (II) 調査地位置図	107

3 宮ノ岡遺跡 (I)	
第1図 基本土層図	109
第2図 宮ノ岡遺跡 (I) 調査地位置図	110
第3図 出土遺物実測図	112
4 宮ノ岡遺跡 (II)	
第1図 基本土層柱状図	116
第2図 宮ノ岡遺跡 (II) 調査地位置図	117

第3図 出土遺物実測図	119
5 台遺跡	
第1図 基本土層柱状図	123
第2図 台遺跡調査地位置図	124
第3図 SQ1001実測図	125
第4図 SQ1001出土遺物実測図	125

目 次

I 調査の経緯

第1表 四国縦貫自動車道埋蔵文化財調査地一覧表	5
-------------------------	---

II 花園遺跡

第1表 花園遺跡検出遺構一覧表掘立柱建物跡	75
第2表 花園遺跡掘立柱建物柱穴観察表	75
第3表 花園遺跡検出遺構一覧表 (A区)	75
第4表 花園遺跡検出遺構一覧表 (B区)	76
第5表 花園遺跡検出遺構一覧表 (C区)	76
第6表 花園遺跡出土遺物観察表 (土器)	76
第7表 花園遺跡出土遺物観察表 (石器)	87
第8表 花園遺跡出土遺物観察表 (瓦)	87
第9表 花園遺跡出土遺物観察表 (金属製品)	87

III 試掘調査総括

太刀野山遺跡 (I)

第1表 太刀野山遺跡 (I) 出土遺物観察表 (土器)	104
-----------------------------	-----

宮ノ岡遺跡 (I)

第1表 宮ノ岡遺跡 (I) 出土遺物観察表 (土器)	113
第2表 宮ノ岡遺跡 (I) 出土遺物観察表 (金属製品)	114

宮ノ岡遺跡 (II)

第1表 宮ノ岡遺跡 (II) 出土遺物観察表 (土器)	120
第2表 宮ノ岡遺跡 (II) 出土遺物観察表 (金属製品)	121

図 版 目 次

巻頭図版 花園遺跡遺構完掘状況

II 花園遺跡

図版1 花園遺跡調査区全景 西より	89
花園遺跡B区西壁土層	89
図版2 SJ1001・1002・1003、SR1001 遺構検出状況 東より	90
SJ1001・1002・1003、SR1001 完掘状況 東より	90
図版3 ST1001土層断面 北より	91
ST1001完掘状況 北より	91
図版4 SA1001完掘状況 南より	92
SA1003完掘状況 西より	92
図版5 SH1001遺物出土状況 南より	93
SH1001・1002完掘状況 東より	93
図版6 SO1001完掘状況 南より	94
SK1001完掘状況 南より	94
図版7 遺構内・包含層出土遺物(1)	95
図版8 包含層出土遺物(2)	96
図版9 包含層出土遺物(3)	97

III 試掘調査総括

1 太刀野山遺跡 (I)

図版1 太刀野山遺跡 (I) 調査前風景	105
No.47トレンチ土層堆積状況	105
調査風景	105

2 太刀野山遺跡 (II)

図版1 太刀野山遺跡 (II) 調査前風景	108
No.1トレンチ土層堆積状況	108
No.10トレンチ土層堆積状況	108

3 宮ノ岡遺跡 (I)

図版1 宮ノ岡遺跡 (I) 調査前風景	115
No.1トレンチ土層堆積状況	115
No.12トレンチ土層堆積状況	115

4 宮ノ岡遺跡 (II)

図版1 宮ノ岡遺跡 (II) 調査前風景	122
No.29トレンチ土層堆積状況	122
溝No.5トレンチ遺物出土状況	122

5 台遺跡

図版1 台遺跡調査前風景	126
No.1トレンチ土層堆積状況	126
SQ1001完掘状況	126



I 調査にいたる経緯



1 調査の経緯

1 調査にいたる経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づいて、四国4県を結ぶ幹線道路として計画された。徳島自動車道においては、まず最初に徳島～脇間について昭和48（1973）年10月「道路整備特別法」に基づき、建設大臣から第7次の施工命令が出され、昭和55年実施計画の許可、昭和56年1月に路線発表がされた。

昭和61年4月には道路局長通達により暫定施工に変更され、昭和62年11月に徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月には、藍住I.C（追加I.C）の施工命令が出され、6月に実施計画が許可されている。

この区間は徳島市川内町の徳島I.Cを起点とし、吉野川に並行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇I.C（区間41.4km）を結ぶものである。

この間、徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係わる分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。また、県教委は供用が第10次5カ年計画に取り入れられ、平成5年が目標となっていることを受けて、昭和63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成5年4月、財団法人埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、発掘調査に対応することとなった。センターでは発掘調査に当たって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することで、調査の効率化、迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、工事請負として発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に応じた調査方法、調査工期について検討を行い調査を実施した。その結果、平成5年3月に徳島～脇間の埋蔵文化財調査を終了することとなった。

脇～美馬間の第10次区間（区間11.7km）については、昭和63年5月に施行命令が出され、6月に路線発表が行われた。この区間の遺跡に関しても、徳島～脇間で実施された調査等に関する基本的な事項については適用され、その成果に基づいて周知の遺跡等は予定路線から極力回避するような方向で話し合いが行われた。平成4年4月には埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が成立し、脇町分で10遺跡65,600㎡、美馬町分で5遺跡40,400㎡の合計15遺跡106,000㎡が調査の対象となった。発掘に際しては対象面積の規模やその立地状況等から調査効率の低下や進入路等の確保に関する問題点も多く、調査を進めるうえで困難を極める状況が想定された。また、当該区間の供用開始目標が平成9年度に設定されたことも受け、美馬～脇間においては、これまでの調査の経緯を踏まえ、より実態に即した調査基準の設定が図られ導入された。

平成4年度末に脇町内3カ所（佐城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、美馬町内1カ所（滝ノ宮遺跡）の試掘調査が実施され、当該区間の調査が開始されることとなった。それから3年後、脇～美馬間の10次区間における発掘はピークを迎えることになる。一方、10次区間における発掘調査がピークを迎える頃、美馬～川之

江間の第11次区間でも試掘・本調査が本格化し始め、県教委には各種団体からの要望書・質問書が提出された。これに先だって県教委では、センターの組織改正を行うとともに、より一層の調査体制の充実、強化を図り発掘調査に対応することとなった。センターとしても事業の一部変更などを実施して体制の充実を図り、当該区間の調査完了を目指して調査にあたった。そして、平成8年6月、田上Ⅱ、薬師遺跡芝坂地区の調査終了をもってすべて完了することとなった。

美馬～川之江間の第11次区間については、39遺跡323,195m²が調査対象面積となっており、平成10年度に供用目標が設定された。調査にあたっては、試掘調査が優先されたが、当初の実堀見込み面積を上回る結果が出された。さらに一部の遺跡において調査の遅延を生じたため、他事業を割いて調査班を投入したが効果はあまりあがらなかった。そこで、先にも述べたがこうした様々な要因を踏まえ県教委は不足人員を教員派遣で対応する等、さらなる調査体制の充実、強化を図ることとなったのである。

ところで、各調査現場においてはきびしい発掘調査が続く中、貴重な遺構、遺物等が確認されたことはきわめて注目される。一重の環濠を巡らせ、防衛的機能を具備した高地性集落の大谷尻遺跡、弥生時代前期末から後期後半の水田遺構が確認された吉野川上流域を代表する大柿遺跡、煙管状土器焼成窯1基・灰原が検出された土井遺跡等、当時の社会構造の研究を今後さらに深めていく上で貴重な資料となるだろう。尚、発掘調査のベースとなっていた西部事務所は平成10年3月31日をもって閉鎖されることになり、昭和60年度の分布調査から始まった一連の発掘調査は閉じることとなった。また、調査終了後の出土遺物の整理作業については、公団・県教委の協議により平成10年度から開始することとなり、基本年次計画案を作成し、現在整理作業が進行中である。

調査組織及び整理体制は以下である。

〈調査組織〉

所長	筒井豊祐 (平成7・8年度)	
事務局長	柴田 広 (平成6・7年度)	庄野徳保 (平成8年度)
事務局次長	谷 一郎 (平成8年度)	
総務課長	小林啓治 (平成6・7年度)	長江 仁 (平成8年度)
主事	三木和文 (平成6・7年度)	西木未香 (平成7・8年度)
	集堂正士 (平成8年度)	
調査課長	紀伊司郎 (平成6年度)	
調査第1課長	島巡賢二 (平成8年度)	
調査第2課長	菅原康夫 (平成8年度)	
調整係長	島巡賢二 (平成6年度)	
調査係長	菅原康夫 (平成6年度)	
課長兼調査第1係長	島巡賢二 (平成7年度)	
主査兼調査第2係長	逢坂俊男 (平成7・8年度主査兼調査係長)	
主査兼調査第1係長	南 信義 (平成8年度)	
主査兼調査第2係長	佐々木清克 (平成8年度)	
技術主任	酒井彰彦 (平成6年度)	
技師	青木雅和 (平成7・8年度)	笠井達雄 (平成8年度)

西部事務所 所長 谷 一郎 (平成8年度)
次長 菅原康夫 (平成8年度)
縦貫担当係長 南 信義 (平成8年度)

調査担当

花園遺跡

研究員 泊 強 (当時) 有月義明 (当時)

太刀野山遺跡 (I・II)

研究員 小泉信司 (当時) 谷 恒二 (当時)

宮ノ岡遺跡 (I・II)

研究員 近藤 理 (当時) 寒川芳裕 (当時)

台遺跡

研究員 近藤 理 (当時) 寒川芳裕 (当時)

〈整理組織〉

所長 本浄敏之 (平成13年度)
事務局長 伊丹康裕 (平成13年度)
総務課長 高野 明 (平成13年度)
主査兼係長 福本紀美子 (平成13年度)
主事 田所政儀 (平成13年度)
整理普及課長 島巡賢二 (平成13年度)
整理係長 貞野保仁 (平成13年度)
整理担当 報告書作成
研究員 烏野美子

第1表 四国縦貫自動車道（脇～美馬・美馬～川之江）埋蔵文化財調査地一覧表

番号	遺跡名	所在地	表 面 積 (m ²)								備 考	
			実掘面積	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度		
1	原(I)	美馬郡脇町北庄	380		380							
2	原(II)	美馬郡脇町北庄	1,560		1,560							
3	鶴射	美馬郡脇町北庄	1,544		240	1,304						
4	佐城(I)	美馬郡脇町脇町	565	165	400							
5	佐城(II)	美馬郡脇町脇町	779	89	70	620						
6	佐城(III)	美馬郡脇町脇町	146	146								
7	田上(I)	美馬郡脇町田上	891			873	18					報告書27集所収
8	田上(II)	美馬郡脇町西田上	9,258			4,610	4,478	170				報告書27集所収
9	田上(III)	美馬郡脇町西田上	6,062		150	1,822	4,090					報告書27集所収
10	井口	美馬郡脇町井口	150		150							
11	薬師(薬師)	美馬郡美馬町芝坂	9,335			330	9,005					報告書34集所収
12	薬師(芝坂)	美馬郡美馬町芝坂	6,937			41	4,613	2,283				報告書34集所収
13	坊僧(坊僧)	美馬郡美馬町坊僧	12,455		750	56	11,649					報告書34集所収
14	坊僧(中黒)	美馬郡美馬町坊僧	229			154	75					報告書34集所収
15	坊僧(東段)	美馬郡美馬町坊僧	5,850			116	5,734					報告書34集所収
16	坊僧(西段)	美馬郡美馬町坊僧	63			63						報告書34集所収
17	池ノ浦	美馬郡美馬町池ノ浦	26			26						
18	滝ノ宮	美馬郡美馬町滝ノ宮	2,563	350	500		1,713					
19	下突出	美馬郡美馬町中横尾	2,600				2,600					
	脇～美馬		61,393	750	4,200	10,015	43,975	2,453				
20	荒川	美馬郡美馬町荒川	17,782				202	15,530	2,050			
21	吉水	美馬郡美馬町吉水	3,820				120	3,700				報告書39集所収
22	西屋敷	美馬郡美馬町中西	288				288					
23	中山	美馬郡美馬町中山	172				172					
24	西大佐古	美馬郡美馬町突落	153				108	45				
25	清水	三好郡三野町清水	10,692			692		10,000				
26	塩塚	三好郡三野町清水	2,332			310	72	1,950				
27	加茂野宮(II)	三好郡三野町加茂野宮	300			300						
28	加茂野宮(I)	三好郡三野町加茂野宮	340			340						
29	大谷尻	三好郡三野町北原	4,595			95	4,500					
30	丸山	三好郡三野町勢力	14,760				11,110	3,650				
31	花園	三好郡三野町太刀野	3,456				356	3,100				本報告書所収
32	太刀野山(II)	三好郡三野町アミダ堂	157			103	54					本報告書所収
33	太刀野山(I)	三好郡三野町アミダ堂	450			450						本報告書所収
34	台	三好郡三好町足代	1,203					1,203				本報告書所収
35	宮ノ岡(II)	三好郡三好町足代	345					345				本報告書所収
36	宮ノ岡(I)	三好郡三好町足代	898					898				本報告書所収
37	東原	三好郡三好町足代	16,365			217	323	15,825				
38	西原	三好郡三好町足代	10,853			157	616	8,153	1,927			
39	円通寺	三好郡三好町足代	42,453				808	30,375	11,270			報告書28集所収
40	土井	三好郡三好町昼間	35,630			140	378	19,520	15,592			報告書38集所収
41	大柿	三好郡三好町昼間	53,012				1,562	22,960	28,490			
42	八幡	三好郡井川町八幡	1,250				20	1,230				報告書29集所収
43	井内	三好郡井川町西井川	277					277				報告書29集所収
44	井出上	三好郡井川町西井川	6,336				30	6,306				
45	相知	三好郡井川町西井川	15,500				120	15,380				
46	坊	三好郡井川町西井川	420					120	300			報告書29集所収
47	須賀	三好郡井川町西井川	3,869					689	3,180			報告書29集所収
48	末	三好郡井川町西井川	240					240				報告書29集所収
49	お塚	三好郡池田町トウゲ	5,314			354	1,238	3,722				
50	供養地	三好郡池田町クヤウジ	1,811			111	1,700					
51	山田(II)	三好郡池田町ヤマダ	1,515			285	1,230					
52	山田(I)	三好郡池田町ヤマダ	703			53		650				
53	馬路	三好郡池田町馬路	970						320	650		
54	源氏岡	三好郡池田町源氏岡	175							175		
55	林	三好郡池田町佐野	130							130		
56	和田	三好郡池田町佐野	1,220					1,220				
57	森常	三好郡池田町初草	90							90		
58	高毛	三好郡池田町高毛	25							25		
	美馬～川之江		259,901			3,607	25,007	167,088	63,374	825		
	計		321,294	750	4,200	13,622	68,982	169,541	63,374	825		



II 花 園 遺 跡



1 調査の経過

(1) 調査の経過

花園遺跡は阿讃山脈裾部に位置し、吉野川の支流である河内谷川によって形成された扇状地の西側に立地する。標高110m付近の北東から南東に傾斜して下る緩斜面上にある遺跡である。分布調査では、弥生式土器・中世以前の紡錘車が採取されており、中世以前の遺構が予想された。また、花園中365番地で中世の花園窯跡の存在が確認されていることもあり、その関連の遺構も予想された。そこで、1995年6月5日から6月7日に行われた一次試掘調査では、4,345㎡を対象面積とし、130㎡が調査された。しかし、この調査では耕作土下の土層は地形的な要因から河川の堆積の影響や山土の押し出しを受け遺構らしきものは検出されなかった。次の二次試掘調査は同年9月12日から9月29日に行われ、一次試掘調査時の西側25,255㎡を対象面積とし、226㎡が調査された。この結果、東の部分と西の高台及び斜面では、一次の試掘調査の時と同じように河川の堆積による影響や山土の押し出しとみられる層が広がり、共に遺構も残存せず、遺物の採取もできなかった。一方平野西部分は、サヌカイト製石鎌や中世の釜の脚の一部などの遺物数点が採取され、またしまりのよい地山からは遺構が検出され遺構構築面の広がりが認められたため、町道花園川又線に沿う段々畑

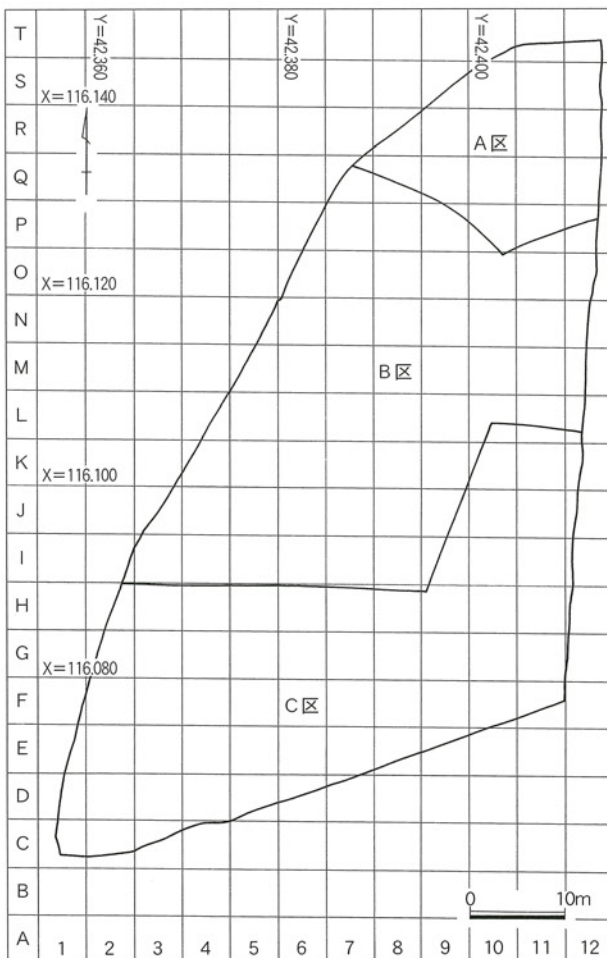
からなる3100㎡が本調査の対象となった。

調査は、1996年4月3日から開始し、同年9月30日に終了した。

(2) 発掘調査の方法

調査区の設定に際しては、第4系国土座標の座標軸、X軸、Y軸の線上に5m×5mをひとつのグリッドの大きさとしたメッシュを設定して調査の基準とし、南西の隅を基点にこれより北へはアルファベット(A～T)、東にはアラビア数字(1～12)を記号として順にふり、その組み合わせで各グリッドを表すこととした。また、調査区の設定は北よりA区、B区、C区と3調査区に区分し調査した。(第1図)

遺構番号は検出時に決定し、掘削後確実性の乏しいと判断されるものについては欠番とし、A区からC区の通し番号とした。



第1図 花園遺跡グリッド配置図

(3) 調査日誌抄

1995年（試掘調査）

- 6月5日 第一次試掘調査開始
- 6月7日 第一次試掘調査終了
- 9月12日 第二次試掘調査開始
- 9月29日 第二次試掘調査終了

1996年（本調査）

- 4月2日 入札
- 4月3日 調査準備
- 4月8日 業者との打ち合わせ
- 4月15日 現地調査、担当者挨拶回り
- 4月16日 草刈り、伐採
- 4月18日 測量開始
- 4月22日 現地盤立会、測量終了
調査区西側の壁写真撮影
- 4月23日 安全柵設置、機械掘削開始
- 5月9日 測量開始
- 5月10日 機械掘削終了、包含層掘削開始
- 5月13日 包含層人力掘削開始、溝掘削開始
- 5月16日 包含層北1/3人力掘削終了
- 5月24日 機械掘削
- 5月28日 A区溝掘削、B区機械掘削開始
- 5月29日 A区B区機械掘削
- 5月31日 C区機械掘削、
土層堆積状況 写真撮影



C区作業風景 西より

- 6月3日 B区C区機械掘削、
C区人力掘削開始
A区北壁土層断面図作成
- 6月5日 B区機械掘削
C区SX半裁
- 6月6日 北壁土層写真撮影
- 6月10日 A区機械掘削
- 6月19日 B区機械掘削、A区遺構面検出
- 6月25日 A区遺構面写真撮影
- 7月1日 A区平面図作成開始、
B区機械掘削高測量
C区精査、遺構面検出
- 7月8日 B区包含層掘り下げ
- 7月9日 A区平面図作成、遺構掘り下げ
B区遺構検出
- 7月11日 C区遺構検出状況写真撮影
- 7月12日 A区遺構掘削、B区包含層掘削
C区人力掘削高測量
- 7月15日 A区平・断面図作成、SP写真撮影
- 7月16日 A区SJ平面図作成、SP写真撮影
- 7月18日 台風接近のための準備
- 7月22日 A区遺構掘り下げ
- 7月25日 B区遺構検出
- 7月26日 A区SP遺構掘り下げ、
B区遺構検出、平面図作成
- 7月30日 A区遺構掘り下げ、
B区包含層人力掘削
- 8月5日 A区SJ平面図終了、
B区包含層人力掘削、
遺構掘り下げ、SP断面図作成
- 8月8日 A区SJ土層断面写真撮影、
B区包含層人力掘削終了、
SP土層断面写真撮影
- 8月9日 A区SJ土層断面図作成開始、
B区精査
- 8月19日 B区遺構検出、

SP1053～1120完掘

- 8月20日 A区SJ土層断面写真撮影、
B区遺構掘削C区遺構掘削、
平面図作成
- 8月22日 A区SJ土層断面図終了、
B区遺構精査、C区遺構掘り下げ



A区作業風景

- 8月26日 B区遺構面検出、平断面図作成
- 8月28日 B区平面図作成、
C区土層断面図作成
- 8月29日 B区SP平面図作成、SP半裁、
SH1001より土器出土、
C区SP土層断面図作成
- 8月30日 B区SH1001・2写真撮影
- 9月10日 B区遺構完掘状況写真撮影、
B区西壁断面図作成
基本土層図作成、写真撮影、
空撮準備
- 9月11日 空撮、遺構完掘状況写真撮影
- 9月12日 A区遺構掘削
- 9月17日 SJ1001～3遺構内掘削
- 9月18日 確認トレンチ掘削、引っ越し
- 9月19日 確認トレンチ立会、埋め戻し開始
- 9月25日 埋め戻し終了
- 9月26日 室内でのまとめ作業開始
- 9月30日 調査終了

2 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

花園遺跡は、徳島県三好町三野町大字太刀野字花園窪に所在する。三好郡は、徳島県の北西端部に位置し吉野川の上・中流域を占める。郡の面積の80%以上が山地で北部に讃岐山脈、南部に四国山地がある。この讃岐山脈と四国山地の間を四国最大の河川である吉野川が直線的に東流し、紀伊水道に注いでいる。三野町は、吉野川北岸中流域にあつて讃岐山脈の南斜面に開け、郡の東端に位置する。東は、美馬郡美馬町、西は三好町、南は吉野川の対岸にある三加茂町、北は讃岐山脈を挟み香川県仲多度郡琴南町、仲南町と接する。花園遺跡は、三野町の中央部を讃岐山脈を浸食して南流する吉野川の支流河内谷川によってできた扇状地の西側、南向きの緩斜面上にあり標高およそ110mの高台に位置する。南部を主要地方道である鳴門－池田線が東西に横断し、河内谷川に沿って讃岐山脈を越えて県道琴南－三野線が香川県へと通じている。

地質的には当該地区には、わが国最大の断層である中央構造線が吉野川に沿うように東西に貫き、三野町においてもその活動による大規模な破碎帯が東西40mに渡って見られる。中央構造線の南北では、地質にも違いが見られ、吉野川南岸は四国山地を形成する三波川編成岩類でおもに結晶片岩類（阿波の青石）が含まれるのに対し、北岸は白亜系和泉層群に属しおもに砂岩と頁岩との互層から構成されている。

(2) 歴史的環境

原始

旧石器時代の遺跡は、三野町東上野遺跡で小型のナイフ形石器が出土している。周辺の遺跡としては三好町土取遺跡、吉野川を挟んで南に位置する三加茂町丹田遺跡などがあり、土取遺跡からはサヌカイト製の横剥ぎナイフ形石器・宮田山型ナイフ形石器や剥片が、三加茂町丹田遺跡からは国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代では、芝生上の台地より土器片・サヌカイト製の石匙・石鎌が出土している。周辺の遺跡としては、三加茂町加茂谷川岩陰遺跡群や同町稲持遺跡がある。加茂谷川岩陰遺跡群では縄文時代早期の複合山形文土器・楕円形押型文土器・前期の爪形文土器・中期から後期にかけての土器が出土している。また稲持遺跡では縄文時代晩期後半の集落が確認され、蛇紋岩製およびサヌカイト製の磨製石斧・サヌカイト製の石鎌・石錘・石核が出土、出土遺物より石器製作集落と考えられる。

弥生時代の遺跡は、三野町勢力の大谷尻遺跡、その西に位置する丸山遺跡がある。大谷尻遺跡は、館山遺跡の別称であり、この地点は中世山城の屋形山城が存在したと伝承され、館山の呼称が定着しているが、弥生時代の高地性集落としても知られている。遺跡は中期末から後期初頭にかけて存在した環濠を伴う高地性集落で、標高135mから145mの段丘上に位置し、平地部との標高差は50mを測る。一重の環濠を巡らせ、環濠の内側から縦穴住居跡12軒、石器製作工房跡1軒、祭祀遺構などが確認された。また石鎌の他、石包丁・石斧・磨石などの農耕具・調理具や稲・豆などの炭化種子類が出土した。こうし

たことから防衛的機能と同時に生産的機能を持っていたことが想定される。また、丸山遺跡は大谷尻遺跡の西側に谷を一つ隔てた段丘上に位置している。大谷尻遺跡よりも若干先行する弥生時代中期中葉を中心とした遺跡で、出土した石器も農耕具の比率が高く、環濠を持たない高地性集落である。弥生中期から後期末の遺跡としては三野町加茂野宮遺跡がある。加茂野宮遺跡は加茂野宮・塩塚の滝谷川の扇状地に位置し、遺構については不明であるが、壺形土器など多数の土器片が出土した（三野町史記載）。また、河内谷川扇状地の東側段丘上に位置する芝生上からは弥生時代の石鎌が多数出土している（三野町史記載）。このころの周辺のおもな遺跡としては三好町の大柿遺跡、同町足代東原遺跡、三加茂町の稲持遺跡がある。大柿遺跡からは、中期初頭の灌漑用水路と棚田が検出されており、当時のシステムを検討するのに重要な遺跡である。足代東原遺跡は三好町の東端の吉野川の河岸段丘上、黒川原谷川によって形成された扇状地に位置し、砂岩礫を積み上げた前方後円形積石墓1基と36基以上の円形積石墓から構成される弥生時代終末期の集団墓地である。この積石墓のなかには副葬品として石鎌・石包丁・打製石斧が出土した。また土器溜まりからは猪形土製品と猿形土製品が出土している。この積石墓群を形成した集団は焼畑を含む畑作を中心とする生業を基盤としていたことが予想される。稲持遺跡は、この足代東原遺跡の対岸に位置し、四国で唯一の蛇紋岩を素材とした生産遺跡であり、多量の蛇紋岩製勾玉、および勾玉未製品・原石・筋砥石・叩石・台石が出土した。

古墳時代では、三野町芝生の大塚古墳、桶川古墳がある。大塚古墳は沖積層の水田の少し引きあがったところに位置する円墳で、古墳時代後期のものと思われる。また、桶川古墳は芝生の桶川池西側の丘陵斜面に位置していたが、芝生小学校校地に移転した。組合式箱形石棺で時代は特定できない（三野町史記載）。周辺の主な遺跡では、三加茂町丹田古墳がある。県西部唯一の前方後円墳とされ、全長35mを測り、合掌型竪穴式石室からは獣型鏡1・鉄剣2・袋状鉄斧1・刀子1などが出土している。

古代

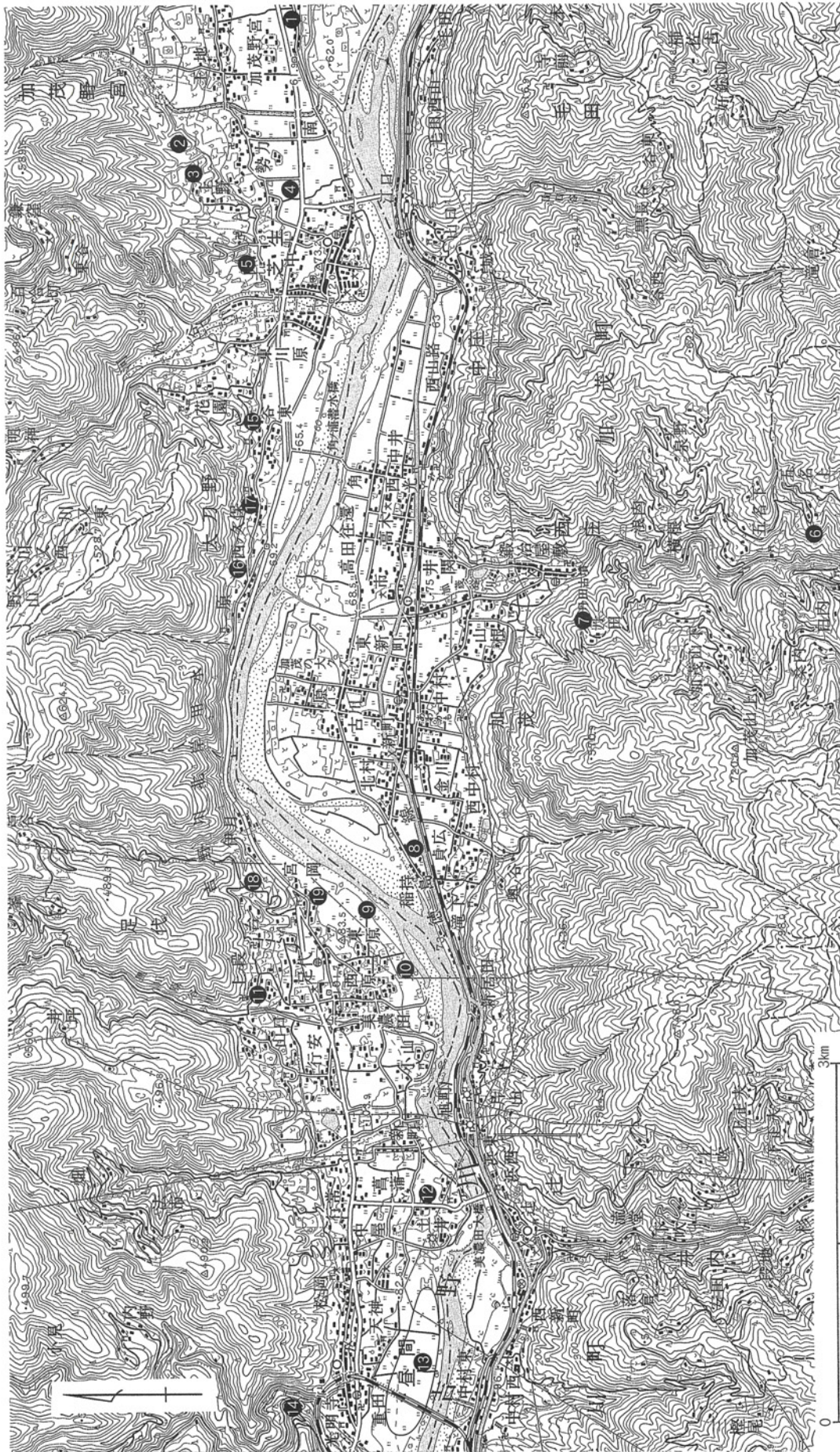
天平七～八年（735～736）頃のものとして推定される平城京二条大路出土木簡に「阿波国美馬郡三野郷戸主佐伯国麻呂米五斗」「阿波国美馬郡三野郷戸主佐伯国分米」とあり、八世紀前半の段階で佐伯氏がすでに有力な氏族として存在していたことがわかる。佐伯氏は讃岐国多度郡の国造積直氏の系譜を直接引くといわれ、讃岐との関連が注目される。七世紀中～後期の孝徳・天智天皇頃から当地域では讃岐からの影響を受けながら初期仏教寺院の建設が進んだ。代表例が現美馬郡域にある美馬町の郡里廃寺や現三好郡三加茂町の金丸廃寺（中庄廃寺）である。また、三野町でも弘法大師（空海）が天長年間に開いた、中世三好氏の菩提寺であった加茂野宮の滝寺などの寺院も見られる（寺伝、三野町史記載）。古代の遺跡・遺構では三野町加茂宮遺跡や三好町大柿遺跡、井川町相知遺跡において集落跡が確認された。加茂野宮遺跡からは印や鏡が、相知遺跡からは石帯や掘立柱建物跡が検出されており、両遺構とも官衙的性格をもつ遺跡と推定される。

中世

「阿波国郡村誌」・「阿波古城記」・「阿波志」などによると三野町の勢力には中世山城の屋形山城（館山）・芝生には三好氏（戦国期に阿波および畿内で活躍する三好氏は三好郡を出自とし、郡名を名乗ったとされる）が本拠としていたといわれる芝生城・また清水城・田中城・加茂野宮城などの存在が記載されている。また本調査地の近辺には、中世の窯跡である花園窯もあった。

近世

長宗我部元親が土佐に退くと、蜂須賀家政が入部し、本地域もその知行下となった。江戸時代には当



- | | | | |
|-----------|-----------|--------------|----------------|
| 1 加茂宮遺跡 | 9 東原遺跡 | 13 大柿遺跡 | 17 太刀野山遺跡(II) |
| 2 大谷尻遺跡 | 10 西原遺跡 | 14 土取遺跡 | 18 台遺跡 |
| 3 丸山遺跡 | 11 足代東原遺跡 | 15 花園遺跡 | 19 宮ノ岡遺跡(I・II) |
| 4 大塚遺跡 | 12 土井遺跡 | 16 太刀野山遺跡(I) | |
| 5 桶川遺跡 | | | |
| 6 加茂谷岩陰遺跡 | | | |
| 7 舟田古墳 | | | |
| 8 稲持遺跡 | | | |

第2図 花園遺跡周辺主要遺跡分布図

郡のほとんどが徳島藩の領地であったが現三野町の芝生・太刀野と現三加茂町の加茂村は延宝六年（1678）から享保十年（1725）に富田藩の家臣領であった。三野町には撫養街道のほか讃岐国への街道として撫養街道から分岐して讃岐の塩入村に至る太刀野山越え・真鈴峠越えの道、檜の休場峠越えなどの道があり、中世には武士の通路として利用され、近世以降は、金比羅参詣や塩や米の道となった。加茂野宮滝寺の麓に滝口番所が設けられ、切支丹信者の入国、庶民の出入国、密輸品などの取り締まりを行った。徳島藩は天明期以降山間部の煙草栽培を保護して特産品にしたてていったが美馬郡、三好郡は栽培の中心となった。これらの煙草は、先の讃岐街道が利用され、讃岐・伊予・大阪などへ運ばれていった。三野町の扇状地では、旱魃と洪水が繰り返され、河内谷川の治水に着手したのは、近世後期のことで、文化－文政期（1804－30）には三村用水・太刀野用水などが開削された。

近現代

明治22年（1899）の町村制施行により、三野町が成立し、大正13年（1924）町制を施行して現在に至る。近代以降も水との戦いは続き、ため池や用水路が整備された。また、近世以来の讃岐への街道は、明治以降三好郡の山間部一帯から借耕牛の出稼ぎなどのために通った。

主な参考文献

奥村清 西村宏 村田守 小澤大成 共著 自然の歴史シリーズ④ 『徳島 自然の歴史』

寺戸恒夫 編著 『徳島の地理』 徳島地理学会

湯浅良幸 『徳島県』

『徳島県の地名 日本歴史地名大系37』 平凡社

福井好行 『徳島県の歴史』

天羽利夫 岡山真知子 『徳島の遺跡散歩』

森浩一企画 菅原康夫 『日本の古代遺跡 37 徳島』

東 潮他 『川と人間—吉野川流域史—』

『三野町誌』

『三好町誌』

同志社大学文学部考古学調査報告 第4冊 『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』 1971年

『徳島県埋蔵文化財センター年報』 Vol. 7 1995年、Vol. 9 1997年

3 調査成果

(1) 遺跡の基本層序

本遺跡は、吉野川の支流河内谷川の扇状地の西側および吉野川により形成された河岸段丘上の南に向かった緩傾斜面に位置する。標高は約107.5m～112mを測り、北西方向から南東方向に向かって、A区、B区、C区とだんだん低くなる。調査地の標高は最も高い地点が、段丘上の上位面に位置するA区の北西端で約112m、南東にかけて低くなり南東端で約109mを測る。B区は北西端で約111mを測り、同じく南東にかけて低くなり南東端では約108mとなる。C区はさらに低くなり、北西端で109mを測り、南東端で約107mとなる。したがってA区からC区は約4.5mの高低差がある。

本調査地は、調査前は段々畑としてみかん畑や桑畑として利用されていたり、荒地となっていた土地である。そのためこうした段々畑の耕作に伴う削平や石垣の構築などによる盛り土、あるいは斜面にあるため大雨の鉄砲水による土砂崩れなどにより遺構の遺存状況は良好とはいえない。

A区北壁の基本層序は、次のとおりである。(第3図)

1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土 耕作土である。

みかん、桑、植材用の苗木の育成などに利用されている。調査区全体にわたり確認される。

2. 暗オリーブ色砂質土2.5Y3/3砂質土 0.2cm～3cmの礫を大量に含む。磁器、陶磁器片を含む。灰化物を少量含む。

3. 黄灰色2.5Y4/1砂質土 砂性強く灰化物・マンガン・0.2cm～0.5cmの礫を少量含む。

1～3層は北壁の東側で2度にわたる大雨による鉄砲水で流され、山土の押し出しを受けている。

4. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土 砂性強く、灰化物少量含む、0.2cm～1cmの礫を多量に含む。磁器・土器片少量含む。

近世の磁器が出土し、近世の遺構面と思われる。北壁の東側では、大雨によると思われる流出で見られない。

5. 灰黄褐色10YR4/2砂質土 砂性強く、磁器・陶器・灰化物少量含む。0.2cm～1cm大の礫を含む。近世の包含層。

6. 褐灰色10YR4/1砂礫層 黒い粘土状(牛糞)の塊をブロック状に多量に含む。0.5cm～3cmの礫を多量に含み、10cm大の礫・灰化物を少量含む。

7. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土 0.2cm～1cm大の礫を含む。マンガンを極少量含む。

8. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土 0.2cm～1cm大の礫を少量含む。中世の包含層。

9. 灰黄褐色10YR4/2砂質土 粘性ややあり、0.2cm～6cm大の礫を少量含む。中世の遺構面。

10. 灰黄褐色10YR4/2砂質土 砂性強く0.5cm～1cm大の礫を含む。

11. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土 粘性強く灰化物を少量含む、0.5cm～1cmの礫を少量含む。

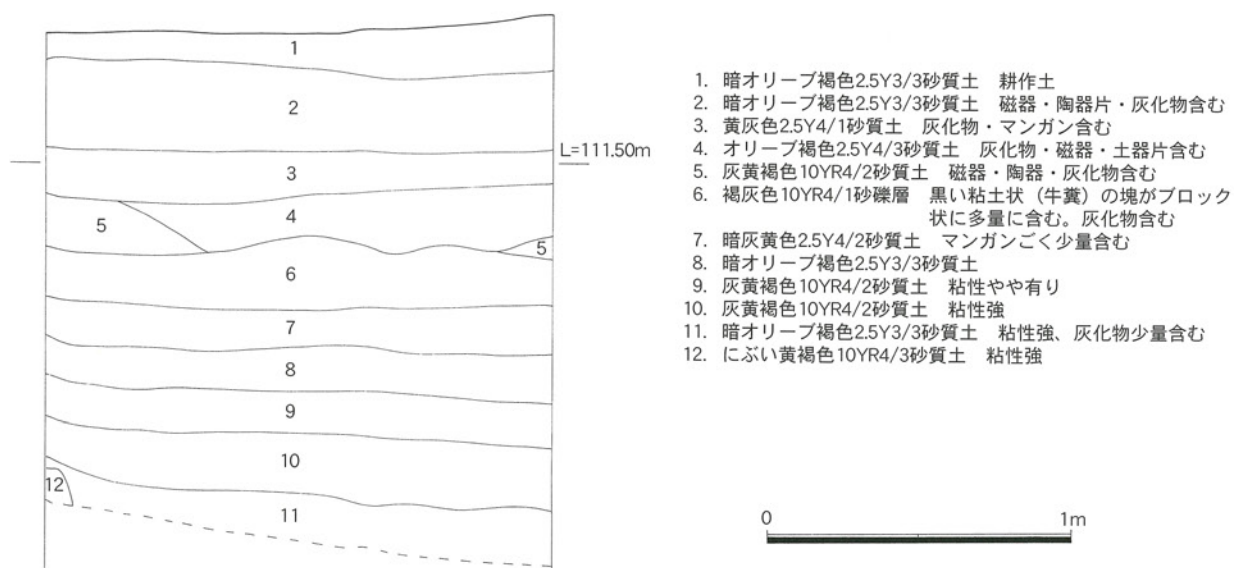
12. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土 粘性強く、0.5cm～2cm大の礫を少量含む。

B区西壁の基本層序は次の通りである。(第4図)

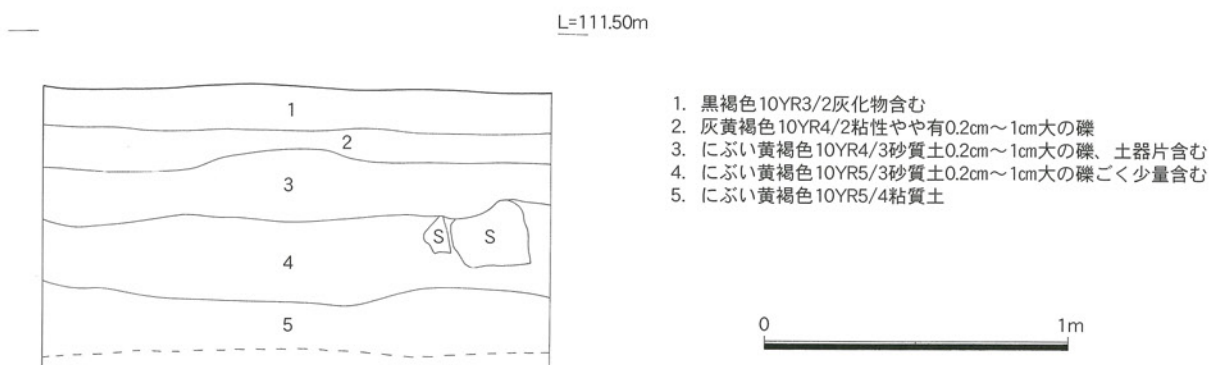
1. 黒褐色10YR3/2砂質土 灰化物を含む。耕作土である。
2. 灰黄褐色10YR4/2砂質土 粘性やや有り、0.2cm～1cm大の礫を含む。
3. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土 0.2cm～1cm大の礫・土器片を含む。遺物包含層。
4. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土 0.2cm～1cmの礫を極少量含む。この上の面が遺構面。
5. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

C区西壁の基本層序

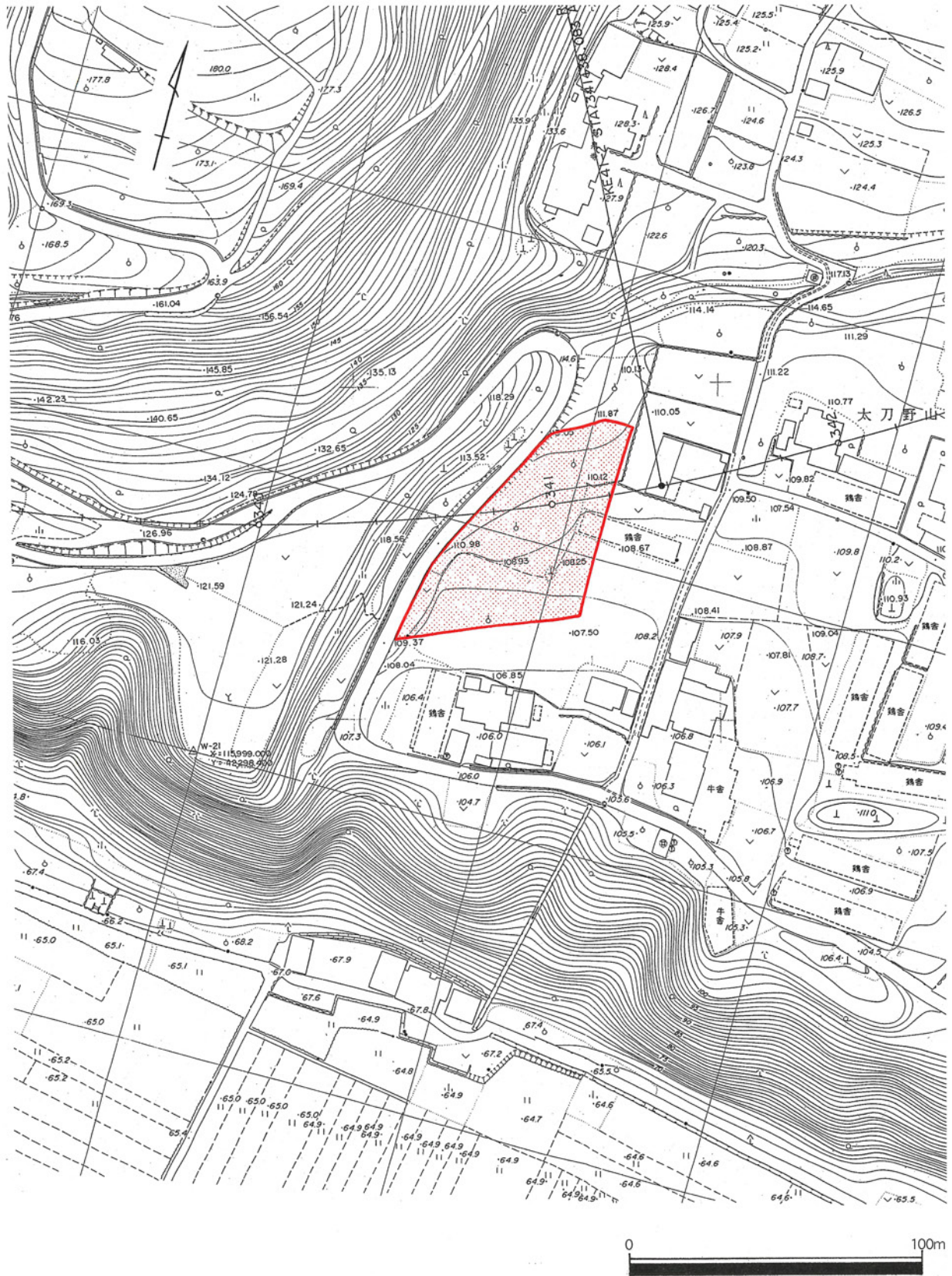
C区はA区、B区でみられた上層が剥ぎ取られ、表土直下に地山がみられる。近世のころに開墾され、耕作土を盛り土したと思われる。



第3図 A区北壁基本土層図



第4図 B区西壁基本土層図



第5図 花園遺跡調査地位置図



第6図 花園遺跡遺構全体図



第7図 A区遺構配置図

(2) 検出された遺構と遺物

A 区 (第7図)

調査区の中では最も北側に位置するA区からは、暗渠3条・柱穴52基・自然流路1条・火葬墓1基・不明遺構11基が検出された。遺構はA区とB区の北部に集中している。A調査区は標高約110.5mから109.1mに位置する緩斜面上で、南東方向に向かって低くなる。出土土器は全体に中世、室町時代のものが多く土鍋、土釜、播鉢が大半を占める。また土器類はいずれも小片となって出土しており、出土遺物で全体の器形が判明する個体は少ない。

A 区の遺構と遺物

暗渠1 (SJ1001) (第8・9図)

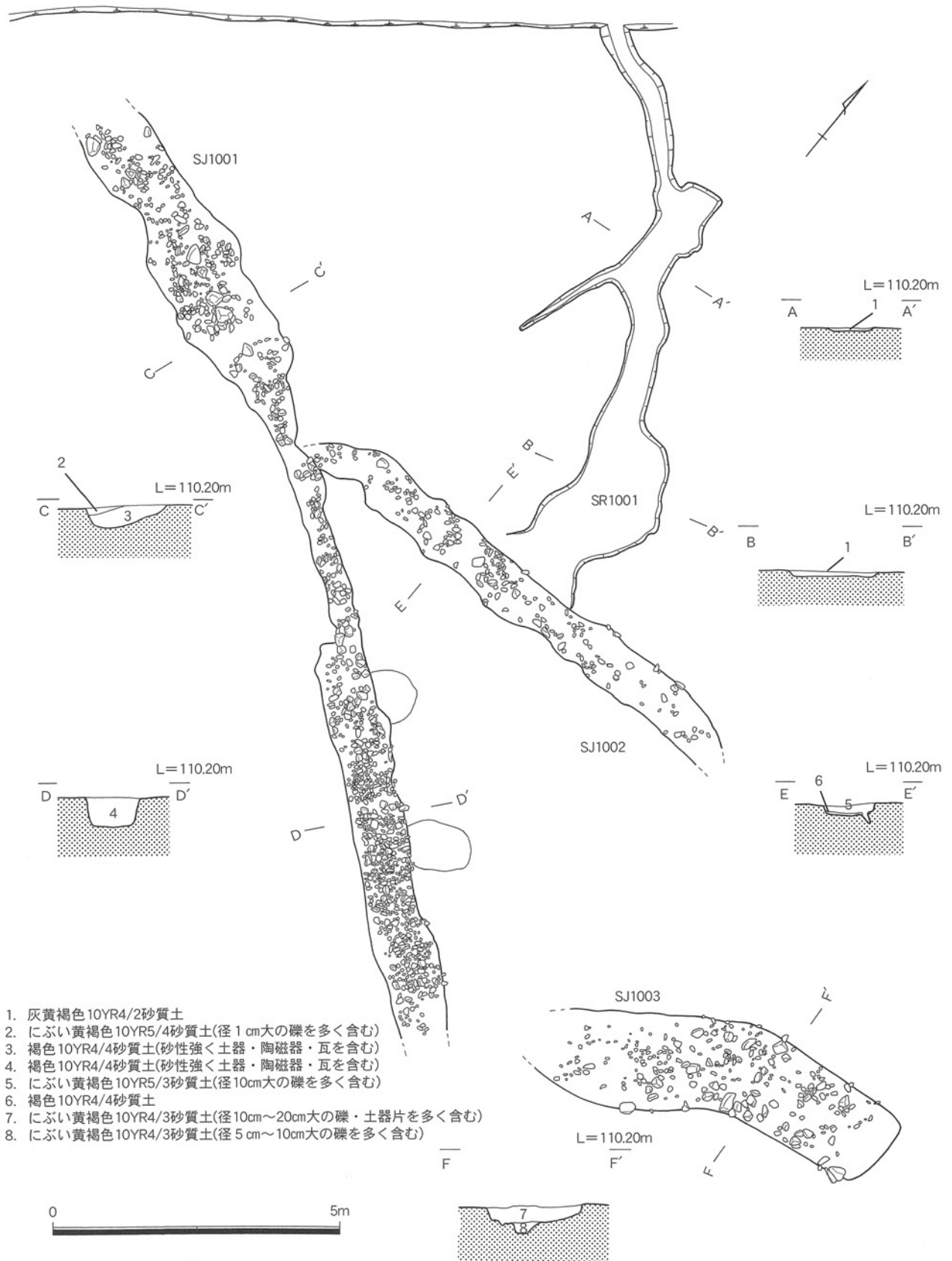
A区南部、Q-8・Q-9・P-9・P-10・O-10グリッドにかけて検出した暗渠である。標高約110.4mから109.3mに位置し緩傾斜面に対して垂直に北西方向から南東方向に伸びる暗渠であり、その途中で焼土墓1 (ST1001) と不明遺構13 (SX1013) の遺構と切り合っている。また、暗渠1 (SJ1001) は東西方向に構築された暗渠3条のうち最も長いものであり、北西から南東方向に長さ約17m、幅約0.8m～1.6m、最深部で約0.6mを測る。覆土はCC'地点では2層となっており、1層はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く0.2cm～1.0cm大の礫を多量に含む。2層は褐色砂質土で砂性が強く0.2cm～20.0cm大の礫を多量に含む、また土器、陶磁器、瓦も含む。一方DD'地点では覆土は1層となっており、褐色砂質土で砂性強く0.2cm～20.0cm大の円礫を多量に含むとともに、CC'地点と同じく土器、陶磁器、瓦を含む。この暗渠1 (SJ1001) からは底の部分から石鏝、上の部分からたくさんの瓦や陶磁器が出土した。また、円礫は砂岩でにぎり拳大(約10cm前後)のものが一番多く、無作為に並べられた感じで、割れた瓦も所々に入っていた。これらの遺物は大半が近世のもので、底の部分から出土した石鏝は水の流れ込みなどによるものと考えられる。室町時代と考えられる火葬墓1 (ST1001) を半分切るように構築されており、出土遺物等からも時期は近世のものと考えられる。

出土遺物 (第10図)

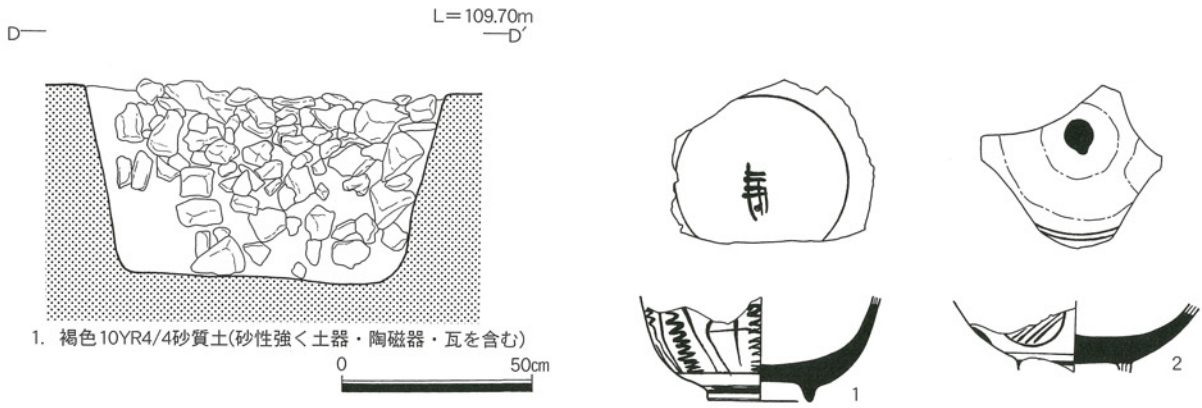
磁器碗、陶器、多量の平瓦および丸瓦、土師質の火鉢、土師質の釜、土師質の皿の細片、サヌカイト製の石鏝などが出土した。

1・2は、肥前系の磁器碗である。1は、畳付のみ無釉で砂が付着している。見込みに「寿」の字、外面に線描きの文様を染め付けている。2は、見込蛇ノ目釉剥ぎである。外面に丸文が描かれている。18世紀後半のものである。3・4は、大谷焼の陶器鉢である。内外面に暗いみのブラウンの鉄釉をかけている。高台および底面は無釉である。同一個体と考えられる。5は、土師質土器の椀である。底径は4.6cmで内外面はナデ調整、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり底部と体部との境は外方向へ突出する。底部は静止糸切りで、16世紀のものと考えられる。

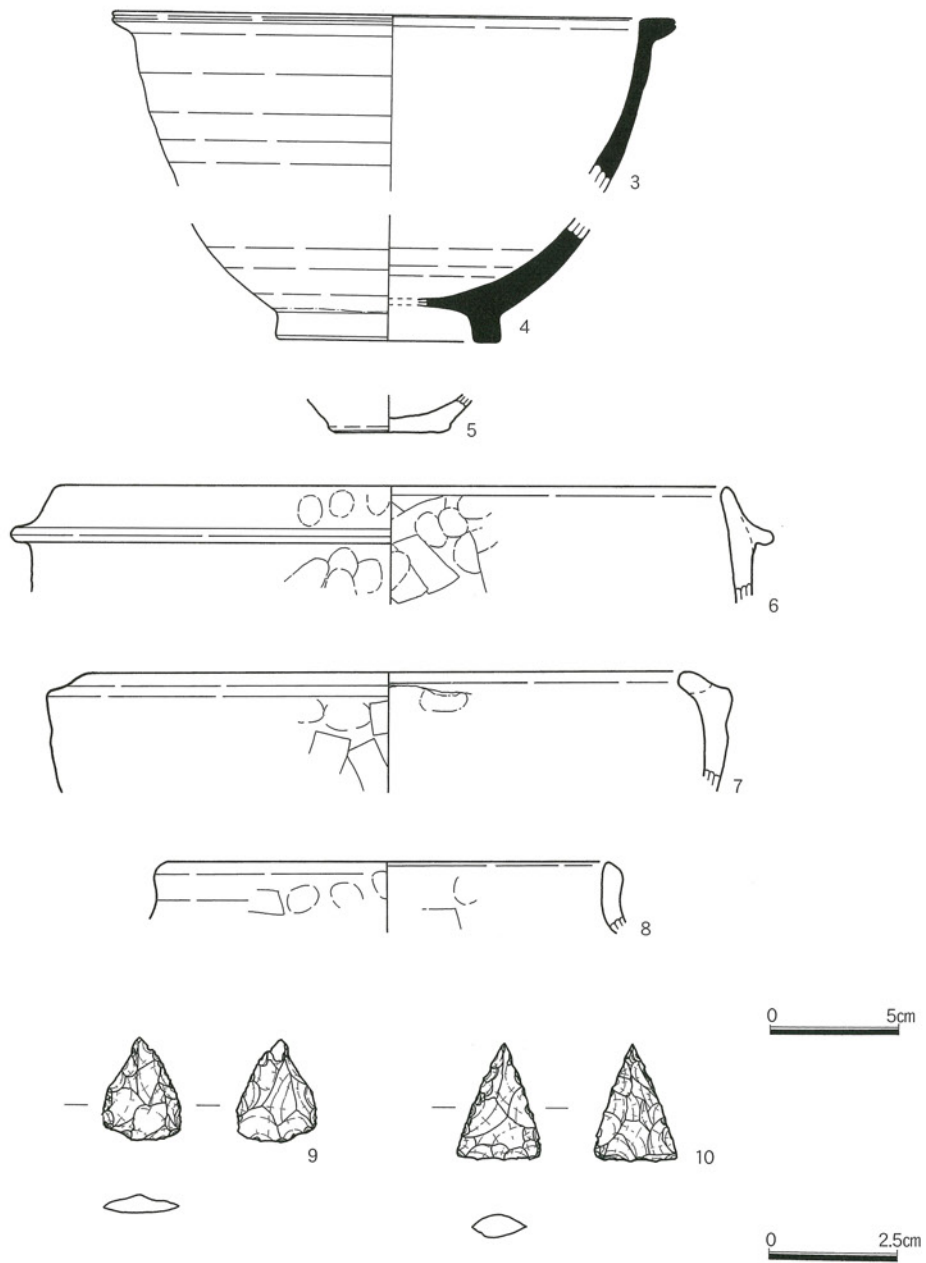
6・7・8は、土師質土器の釜である。6は、口径26cm、鏝径30.0cmで口縁部はやや内傾し、下方に断面楕円形の長めの鏝が水平につく。内外面ともユビオサエ後ナデ調整である。7は、口径23.4cmで口縁部が体部との境で内方向へ屈曲し肥厚、退化した鏝が口縁部と体部との境に突出するようにつく。内



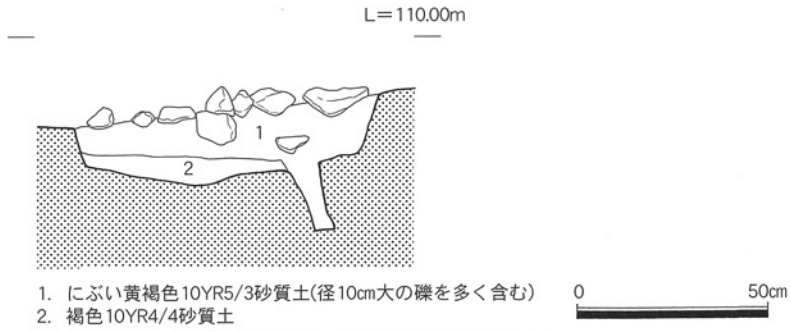
第8図 SR1001, SJ1001・1002・1003実測図



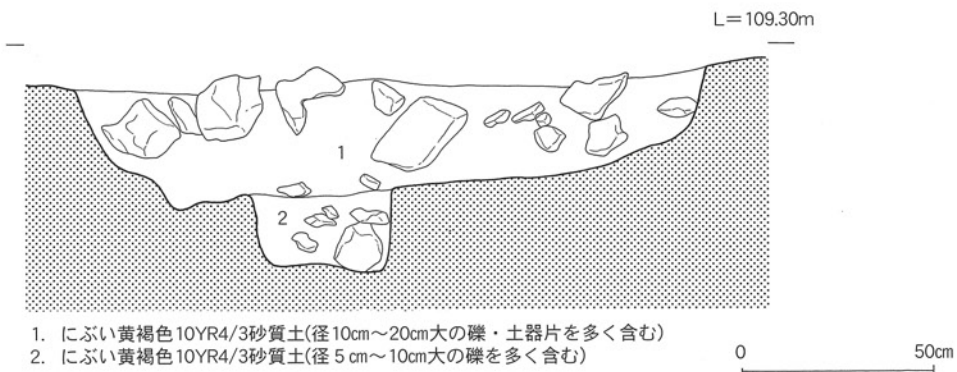
第9図 SJ1001遺構断面図



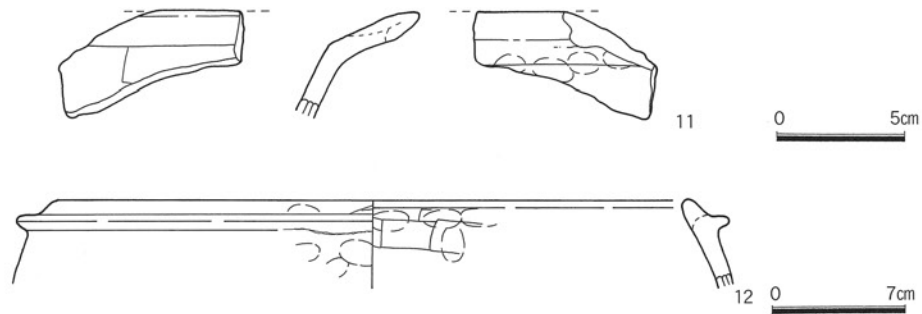
第10図 SJ1001出土遺物実測図



第11図 SJ1002遺構断面図



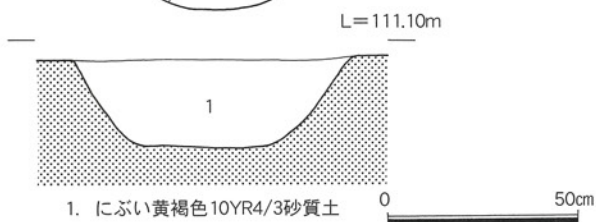
第12図 SJ1003遺構断面図



第13図 SJ1003出土遺物実測図



第15図 SP1019出土遺物実測図



第14図 SP1019実測図

外面ともユビオサエ、ナデ調整である。8は、茶釜である。口径17.4cmを測り、口縁部が直立し口縁端部を丸くおさめる。内外面はユビオサエ、ナデ調整である。

9・10は、サヌカイト製の石鏝である。いずれも鏝身三角形の平基無茎式の石鏝である。9は、長さ2.0cm、幅1.55cm、厚さ0.4cm、重さ0.9g、10は、長さ2.3cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、重さ1.2gを測る。いずれも表裏面とも細かな調整加工が施され、横断面形は凸レンズ状を呈する。9は、器体先端の一部を欠損する。5から10は、発掘時あるいは大雨などによる混入と考えられる。

暗渠2 (SJ1002) (第8・11図)

A区南側、Q-9・Q-10・Q-11にかけて検出した暗渠である。標高約110mから109.6mに位置し、東西方向に斜面に沿ってほぼ平行に検出された。長さ約8.4m、幅約0.6m～1.0m、深さ約0.3mを測る。西端は暗渠1 (SJ1001) と接し、暗渠2 (SJ1002) へ流れ込むように構築されている。覆土は2層に分層でき、1層は、にぶい黄褐色砂質土0.2cm～1.0cmの礫および10cmの礫を多量に含む。2層は、褐色砂質土である。底面はやや中央部が低くなり、1層が大きく突出した部分が見えるが、暗渠の杭の跡と考えられる。時期は暗渠1 (SJ1001) と同じ近世のものと考えている。多量の石は出土したが土器などの遺物の出土はなかった。

暗渠3 (SJ1003) (第8・12図)

A区南東端部、O-11・P-11・P-12にかけて検出した暗渠である。標高約109.2m～109.3m前後に位置し、斜面に対してほぼ平行に検出された。A区南東端部より南西方向に伸び、西端ははっきりしないが暗渠1 (SJ1001) と接していた可能性がある。また、暗渠2 (SJ1002) と平行に伸びるように構築されている。長さ約5.5m、幅約1.7m、深さ0.5mを測る。覆土は2層に分層でき、1層は、にぶい黄褐色砂質土でやや粘性があり、10cm～20cm大の礫を多量に含む。また、土器片も含む。2層は、同じくにぶい黄褐色砂質土で5cm～10cm大の礫を多量に含む。覆土中より土師質土器の釜、鍋、器種不明の小さな土器片などが出土したが大半は実測不能であった。時期は同じく近世と考えている。

出土遺物 (第13図)

11は、土師質土器の鍋である。径は測定できなかった。口縁部は「く」の字状に体部との境で大きく外上方へ屈曲し、口縁端部は尖り気味におさめる。内面は丁寧な板状工具によるナデ、外面はユビオサエ後丁寧なナデ調整である。12は、土師質土器の釜である。口径33.2cm、鏝径37.4cm、を測る。口縁部は体部上位より内傾し口縁端部を丸くおさめる。また、口縁部下方に断面楕円形の長めの鏝が水平につく。内外面ともユビオサエ後板状工具によるナデ調整を施している。

柱穴19 (SP1019) (第14図)

A区北部の中央、S-11で検出された柱穴である。標高約110mに位置し、西側を不明遺構7 (SX1007) と切り合っている。長軸0.67m、短軸0.53m、深さ0.22mを測る。平面形は不整な円形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～1cm大の礫を多量に含む。覆土中より土師質土器の皿と播鉢の破片1個が出土している。播鉢の破片は実測不能であった。

出土遺物（第15図）

13は、土師質土器の皿である。底径5.3cmを測る。体部は底部から外上方に直線的に立ち上がり、体部外面の強いナデにより底部との境に段を有する。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。

自然流路 1（SR1001）（第8図）

A区中央部、西端より中央へR-9・R-10・Q-10グリッドにかけて検出した。標高約110.4m～109.9mに位置し、長さ約10.5m、幅約0.3m～1.6m、最大深度0.22mを測る。南端は、暗渠2（SJ1002）と接し、大雨などによってできた自然流路で暗渠2（SJ1002）へと流れ込んでいたと考えられる。覆土は、にぶい黄褐色砂質土で0.2～1cm大の礫と5cm～10cmの礫を少量含む。また炭化物も含む。覆土中遺物の出土は見られなかった。

火葬墓 1（ST1001）（第16図）

A区の南部中央、P-10グリッドから検出された火葬墓である。標高約109.7mに位置する。長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.21mを測る。平面形は不整な半円形で、底面はほぼ平坦である。遺構の南半分は暗渠1（SJ1001）に切られており、実際は短軸方向にもっと広がった楕円形であったと思われる。埋土に炭や焼土に混じって2cm未満の骨片が多数見られた。埋土は3層に分層でき、1層は、灰黄褐色砂質土で砂性強く、炭・骨片・土器片・焼土を多く含み、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。2層は、灰黄褐色砂質土で焼土、炭を含む。3層は、灰黄褐色砂質土で焼土、炭化物を含む。埋土の上部で土師質土器の小皿2枚が出土した。出土遺物より室町時代後半の遺構と考える。

出土遺物（第17図）

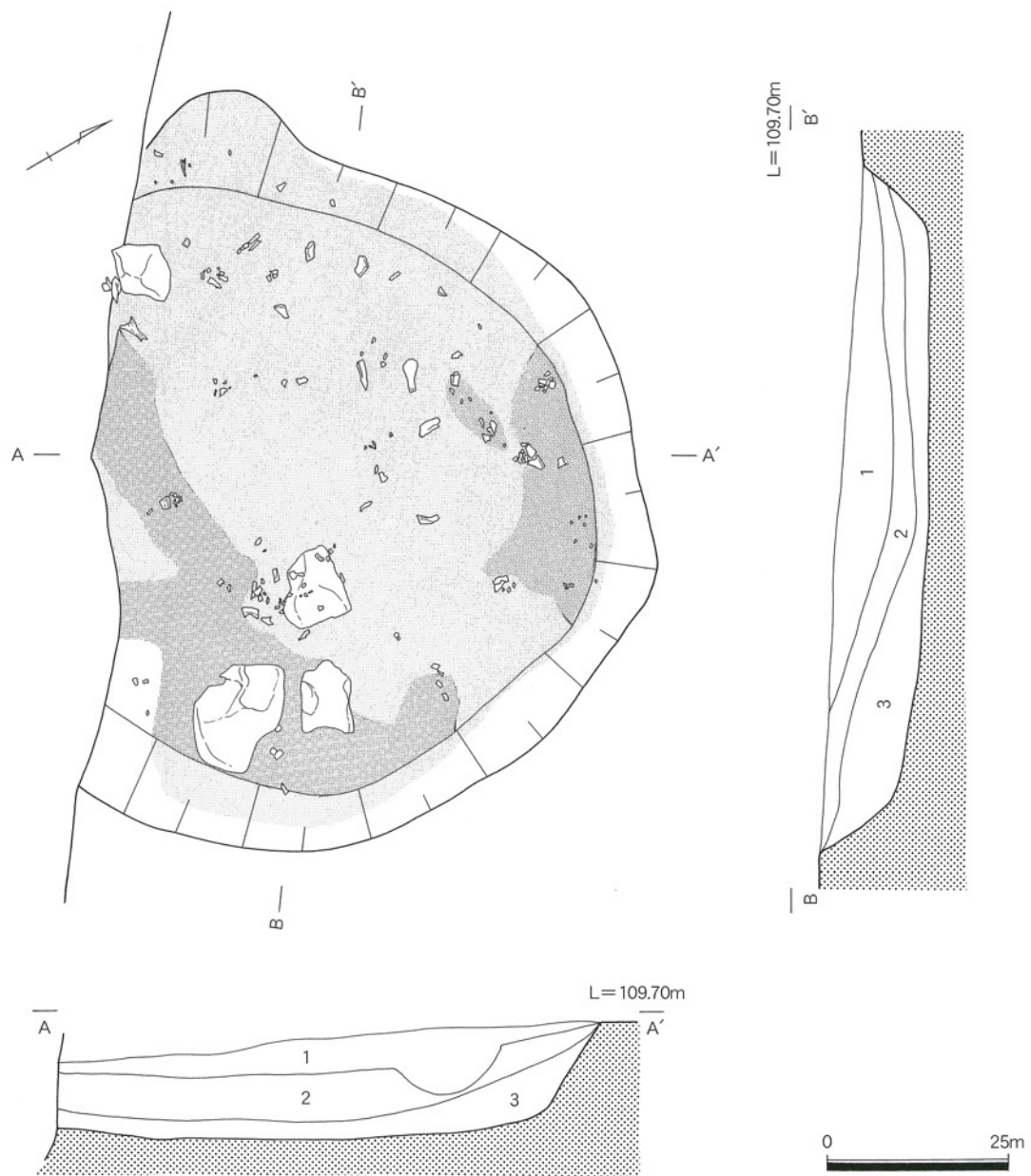
14・15は、土師質土器の皿である。14は、口径5.7cm、器高2.3cm、底径4.7cmを測る。体部が底部より外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。内外面ともにナデ調整で底面は静止糸切りである。15は、口径11.1cm、器高2.4cm、底径4.8cmを測る。体部は底部より直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面の強いナデにより底部との境に段を有する。内外面ともにナデ調整を施し、底部静止糸切りである。いずれも16世紀室町時代のものと考えられる。

不明遺構 1（SX1001）（第18図）

A区北部東端、S-12グリッドで検出した不明遺構である。標高約109.9mに位置する。平面形は不整な楕円形を呈し底面はほぼ平坦である。長軸0.84m、短軸0.52m、深さ0.21mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫および土器片を少量含む。土師質の土器片3個が出土したが、細片のため実測不能であった。時期は16世紀ごろと考える。

不明遺構 2（SX1002）（第19図）

A区北部、S-11グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構3（SX1003）の隣、標高約110mに位置する。平面形は隅丸の長方形で長軸1.03m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。底面は東の方が低くなっている。埋土は褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫、10cm大の礫、土器片を少量含む。土師質土器の皿の底部が出土したが、細片のため実測不能であった。時期は16世紀ごろと考える。

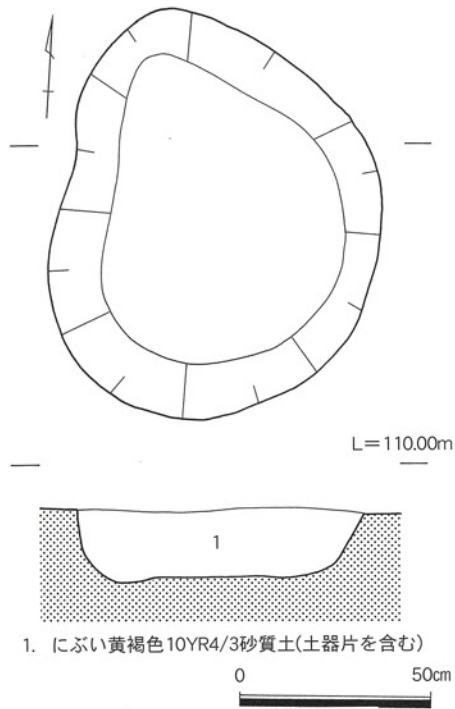


1. 灰黄褐色10YR4/2砂質土(砂性強く、炭・骨片・土器片・焼土を含む)
2. (焼土・炭を含む)
3. (焼土・炭化物を含む)

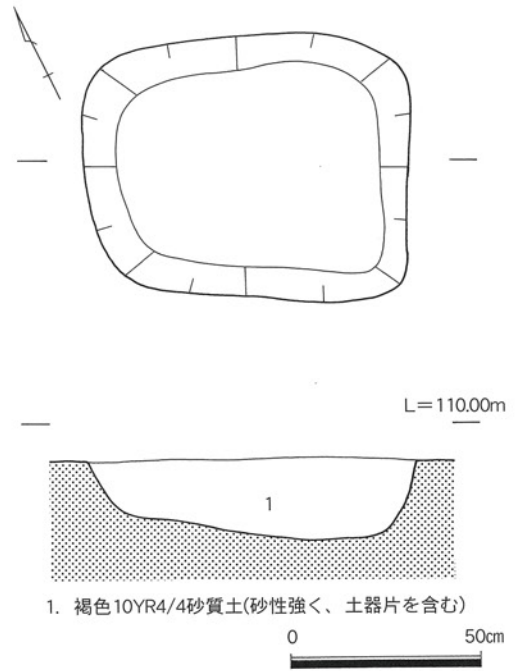
第16図 ST1001実測図



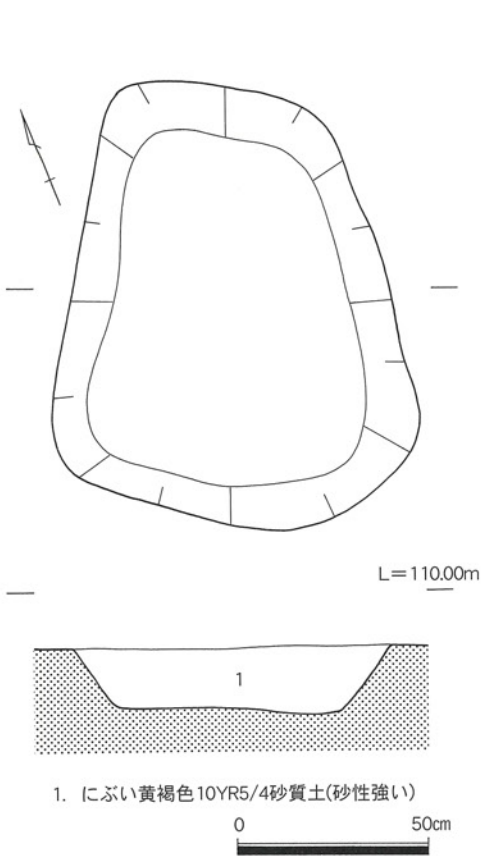
第17図 ST1001出土遺物実測図



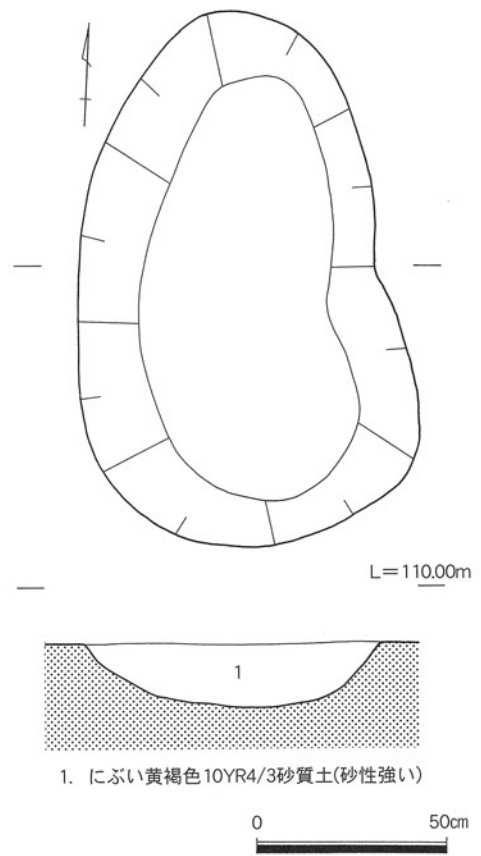
第18図 SX1001実測図



第19図 SX1002実測図



第20図 SX1003実測図



第21図 SX1004実測図

不明遺構 3 (SX1003) (第20図)

A区北部、S-11・R-11グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構 2 (SX1002) とは北東の隅で、不明遺構 8 (SX1008) とは南西の隅で隣接する。標高約110mに位置する。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸1.14m、短軸0.72m、深さ0.19mを測る。底面は東がやや低くなっているがほぼ平坦である。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫、5cm～10cm大の礫を含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構 4 (SX1004) (第21図)

A区北部の東側寄り、R-11グリッドで検出した不明遺構である。標高約109.8m、不明遺構 3 (SX1003) の南に位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸1.32m、短軸0.6m、深さ0.25mを測る。底面は丸く緩やかに立ち上がる。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く0.2cm～0.5cm大の礫、5cm～10cm大の礫を少量含む。土師質土器の皿を2点出土したが細片のため実測不能であった。時期は16世紀ごろと考える。

不明遺構 5 (SX1005) 欠番

不明遺構 6 (SX1006) (第22図)

A区中央部東側寄り、R-11グリッドで検出した不明遺構である。平面形は中央が少し窪んだ不整な楕円形で、底面は平坦である。標高約109.7mに位置し、長軸0.88m、短軸0.52m、深さ0.16mを測る。埋土は灰黄褐色砂質土で砂性強く0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構 7 (SX1007) (第24図)

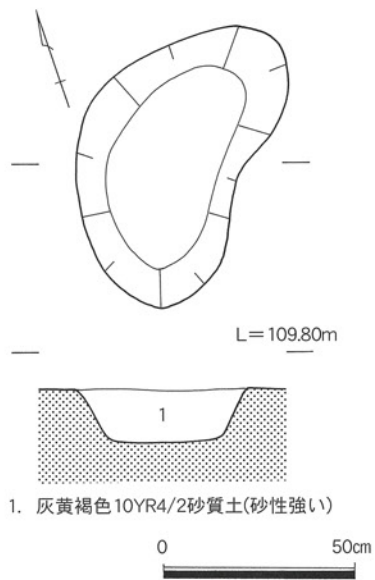
A区北部の中央、S-10、S-11グリッドで検出した不明遺構である。標高約110mに位置し、平面形は「く」の字型に屈折した不整な楕円形であるが、2つの遺構が切り合っている可能性もある。また、東の端は柱穴19 (SP1019) と切り合う。長軸0.95m、短軸0.74m、深さ0.16mを測る。底面はやや丸みをおび、東側の底面は緩やかに立ち上がる。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～1cm大の礫を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構 8 (SX1008) (第23図)

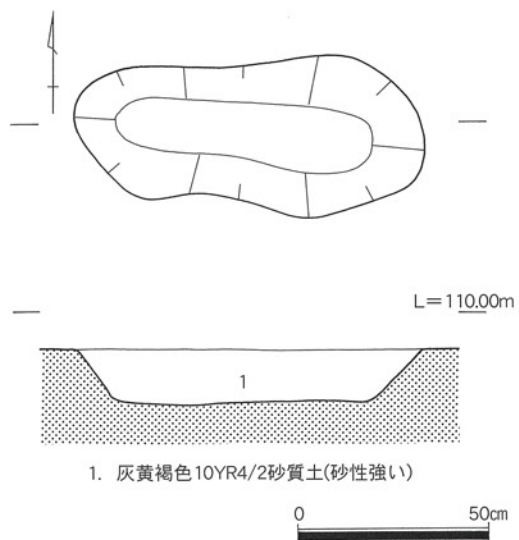
A区北部の中央、S-11、R-11グリッドで検出した不明遺構である。標高約110mに位置し、平面形は不整な楕円形で底面は平坦である。長軸0.90m、短軸0.22m、深さ0.15mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫、5cm～10cm大の礫多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構 9 (SX1009) (第26図)

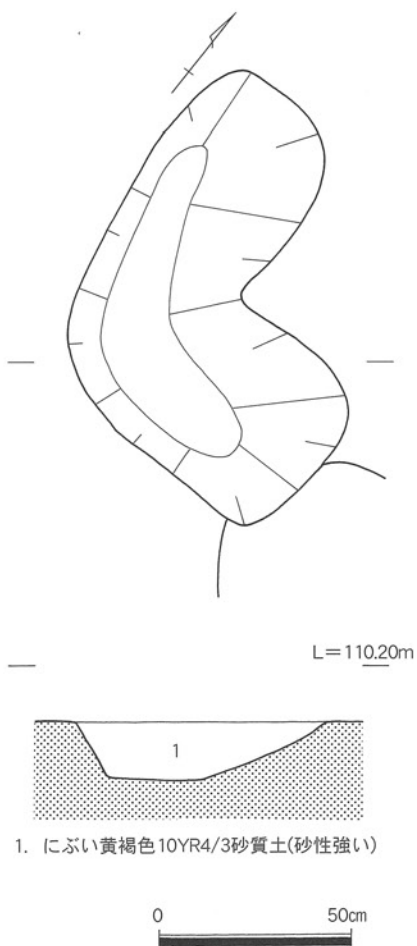
A区中央部、R-10、R-11、Q-10、Q-11グリッドで検出した不明遺構である。自然流路1の約0.2m東、標高約110mに位置する。平面形は一部が窪んだ不整な円形で、底面はほぼ平坦、東に向かって低くなっている。長軸4.55m、短軸4.40m、深さ0.18mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、土器片を含む。また0.2cm～1cm大の礫を多量に含む。覆土中より土師質土器の播鉢、器種不明の底部などの細片が3点出土したが実測不能であった。時期は出土遺物より16世紀ごろと考える。



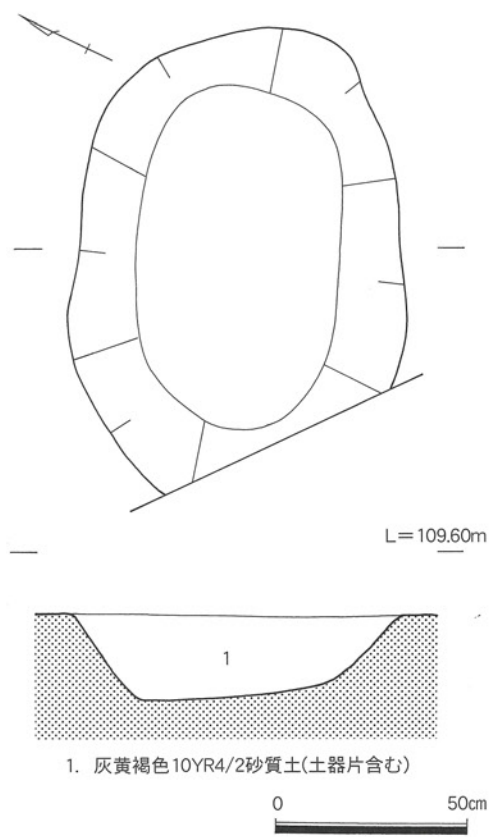
第22図 SX1006実測図



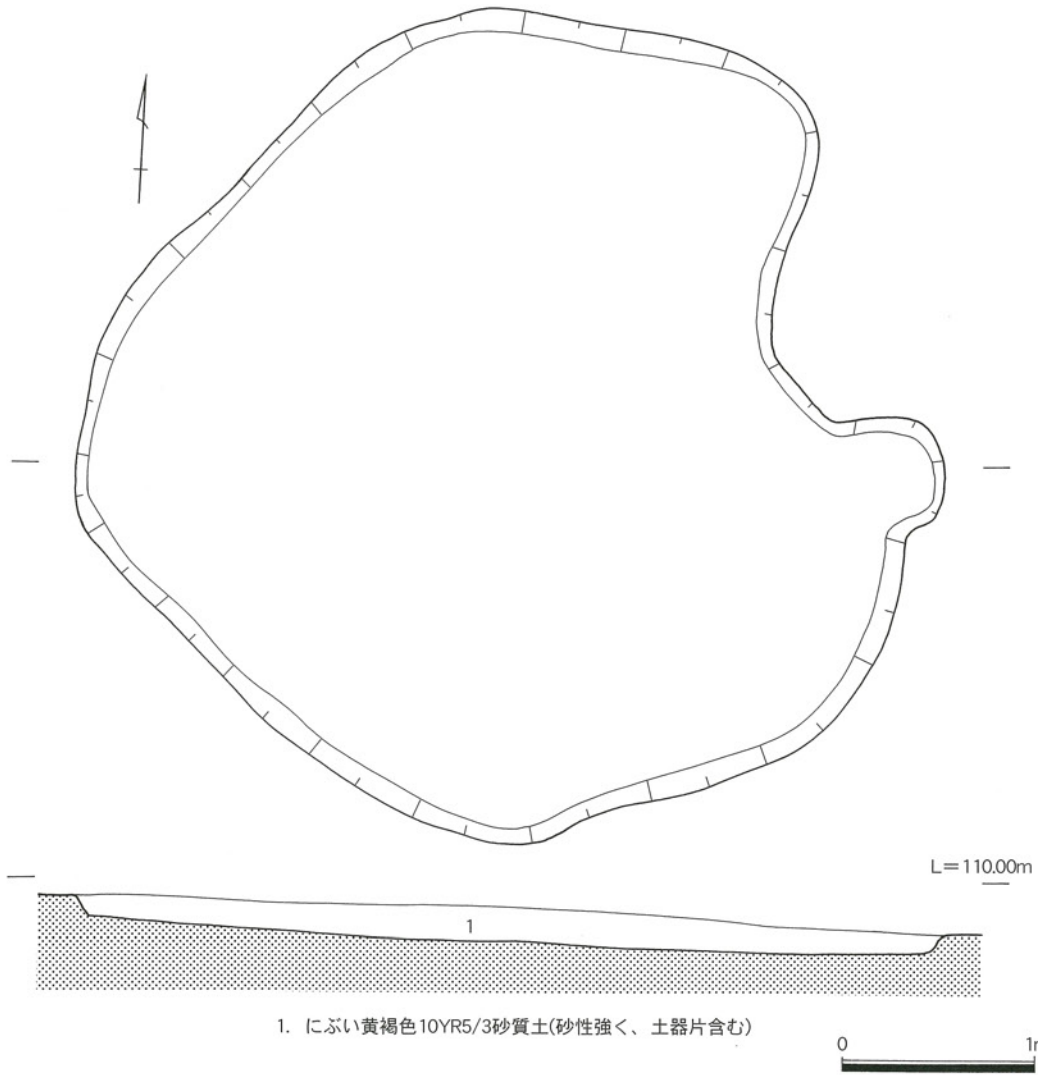
第23図 SX1008実測図



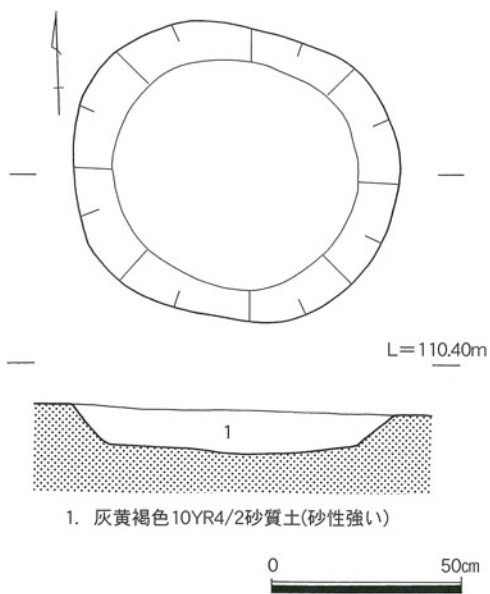
第24図 SX1007実測図



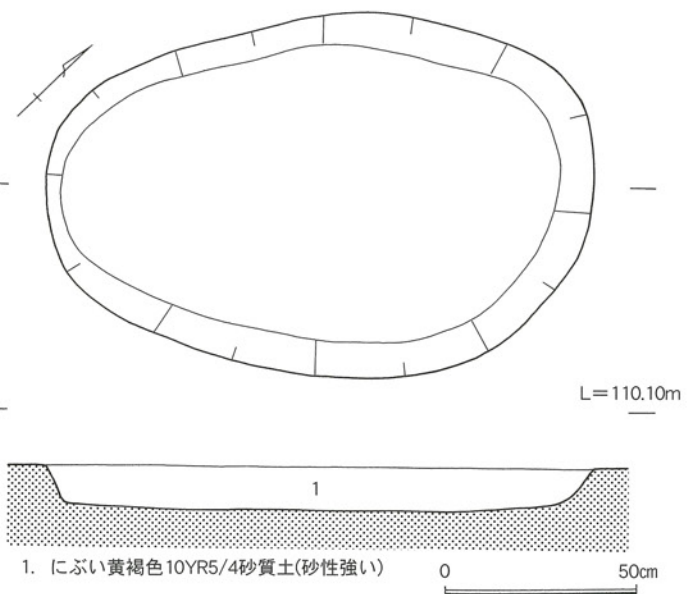
第25図 SX1013実測図



第26図 SX1009実測図



第27図 SX1010実測図



第28図 SX1011実測図

不明遺構10 (SX1010) (第27図)

A区中央部の西端、自然流路1 (SR1001) の北、S-9、R-9グリッドで検出した不明遺構である。平面形は円形を呈し、底面は平坦である。標高約110.3mに位置し、長軸0.84m、短軸0.78m、深さ0.13mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～1cm大の礫を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構11 (SX1011) (第28図)

A区中央部、R-9、Q-9、R-10グリッドで検出した不明遺構である。自然流路1 (SR1001) の南、標高約110mに位置し、平面形は不整な楕円形を呈し、底面は平坦である。長軸1.40m、短軸0.85m、深さ0.13mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構12 (SX1012) 欠番

不明遺構13 (SX1013) (第25図)

A区南部、P-10グリッドで検出した不明遺構である。標高約109.5mに位置する。南西部分が暗渠1 (SJ1001) と切り合っているが平面形は楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で北部に向かって深くなっている。長軸1.05m、短軸0.60m、深さ0.23mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土で砂性強く、0.2cm～0.5cm大の礫、3cm～5cm大の礫、土器片を少量含む。覆土中より器種不明の土師質土器の細片1個が出土したが実測不能であった。



第29図 B区遺構配置図

B 区 (第29図)

調査区の中では中央部に位置し、A区より少し下がった標高約110mから108mを測る。また、B区も南東方向に向かって低くなっている。遺構はB区北部に多く、南東部は少ない。B区からは、掘立柱建物跡2棟、炉跡2基、土坑1基、窯跡1基、柱穴175基、不明遺構10基を検出した。出土土器は全体に中世室町時代のもので、A調査区と同じように土師質土器の皿、土釜、播鉢が多い。また、出土した土器片は小さく実測不可能なものが多かった。

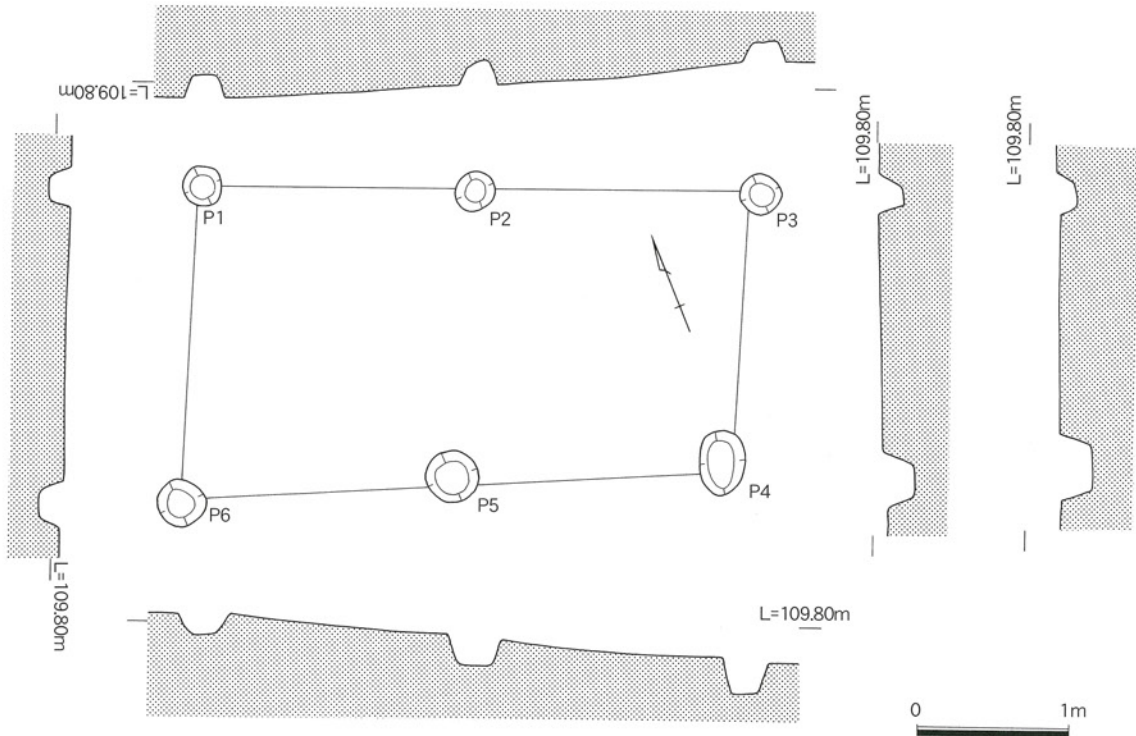
B区の遺構と遺物

掘立柱建物跡1 (SA1001) (第30図)

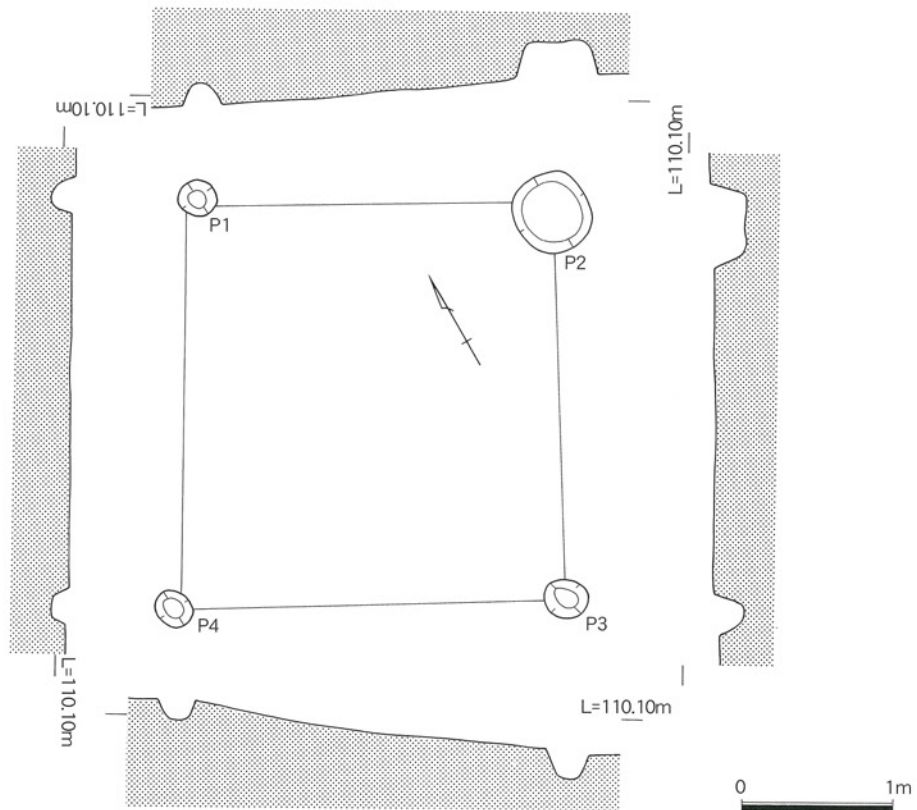
B区の北西部、N-6、7、O-6グリッドで検出した掘立柱建物跡である。6基の柱穴により構成される。B区の最頂部近く標高約109.9m～約109.6mに位置し、梁間1間(2.12m)、桁行2間(3.68m)で棟方向はN-69°-Wで、緩斜面に対しほぼ直角に建っていたと思われる。柱間距離は梁間1.9m～2.12m、桁行1.76m～1.88mを測る。柱穴の掘り方は不整円形を呈し、直径0.22m～0.29m、深さ0.15m～0.27mを測る。P1は、直径0.24m、深さ0.15mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性があり、0.2cm～3cm大の礫を含む。P2は、直径0.22m、深さ0.19mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で、やや粘性があり、0.2cm～1cm大の礫を含む。P3は、直径0.27m、深さ0.16mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1.0cm大の礫を含む。P4は、直径0.29m、深さ0.27mを測り、平面形は楕円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で粘性強く0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。また、P4の柱穴覆土中より土師質土器の釜と皿の破片が出土したが、実測不能であった。P5は、直径0.29m、深さ0.21mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く0.2cm～3cm大の礫を少量含む。P6は、直径0.24m、幅0.15mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性があり、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。また、掘立柱建物跡1 (SA1001) より南約10mのところ炭窯跡1 (SO1001) が検出され、その炭窯跡に関連した遺構の可能性もある。時期は出土遺物より室町時代と考えられる。

掘立柱建物跡2 (SA1002) (第31図)

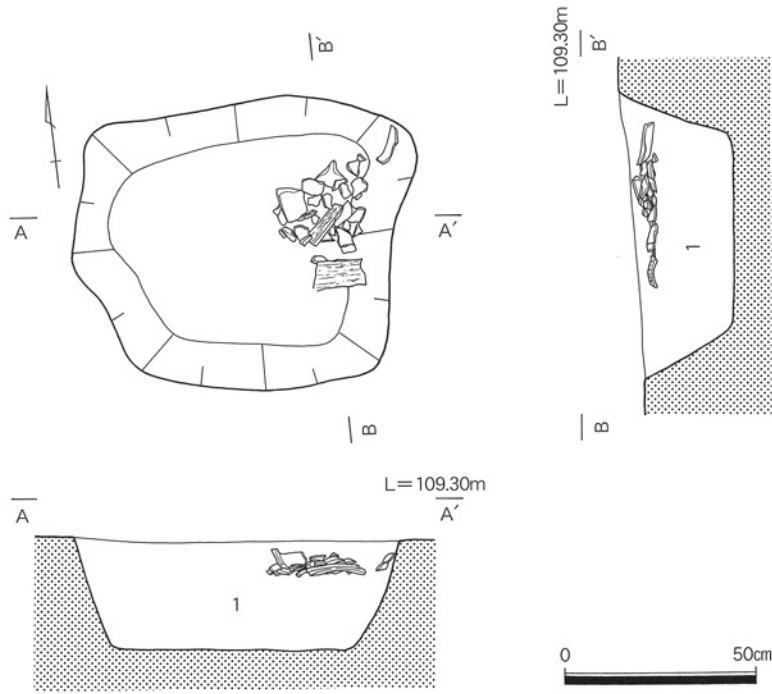
B区の北西端部、掘立柱建物跡1 (SA1001) の西、N-6、O-6グリッドで検出した。4基の柱穴により構成される。B区の最頂部約110.2m～109.9mに位置し、掘立柱建物跡1 (SA1001) よりやや高い所で検出された。北西から南東へ柱間距離2.4m～2.55m、北東から南西へ柱間距離2.65m～2.66mを測り、棟方向はN-60°-Wで、緩斜面に対しほぼ平行に建っていたと思われる。柱穴の掘り方は不整円形を呈し、直径0.17m～0.49m、深さ0.13m～0.28mを測る。P1は直径0.17m、深さ0.15mを測り、平面形はほぼ円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性があり、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。P2は直径0.49m、深さ0.21mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性があり、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。P3は直径0.24m、深さ0.28mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土は埋土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性があり、0.2cm～1cm大の礫を少量含む。P4は直径0.20m、深さ0.13mを測り、平面形はやや楕円形を呈する。覆土はにぶい黄褐



第30図 SA1001実測図

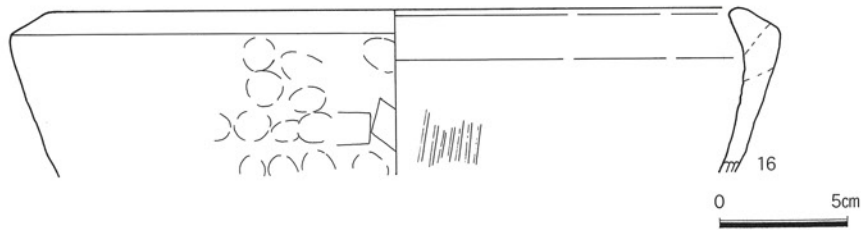


第31図 SA1002実測図

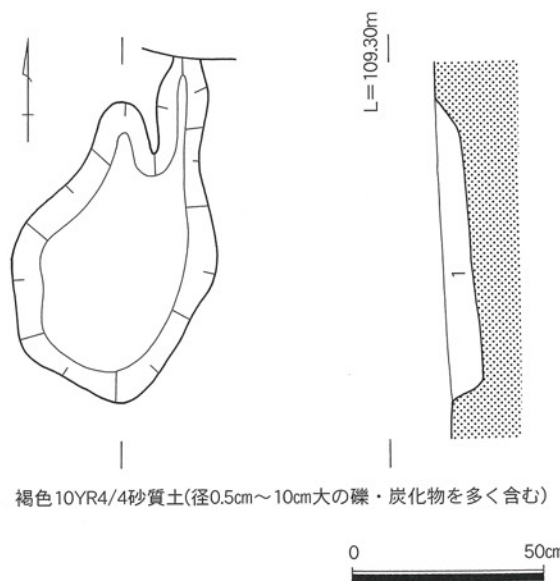


1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(砂性強く炭化物・土器を多く含む)

第32図 SH1001実測図



第33図 SH1001出土遺物実測図



1. 褐色10YR4/4砂質土(径0.5cm~10cm大の礫・炭化物を多く含む)

第34図 SH1002実測図

色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～1cm大の礫を少量含む。SA1002もSA1001と同様に南東約10mで検出された炭窯跡1（SO1001）と関連がある遺構の可能性はある。埋土中より出土した遺物はなかった。

炉跡1（SH1001）（第32図）

B区北部中央、N-8・M-8グリッドより検出した炉跡である。標高約109.2mに位置し、平面形は不整な方形を呈し、底面はほぼ平坦、長軸0.97m、短軸0.77m、深さ0.29mを測る。すぐ南にある炉跡2（SH1002）と接する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で砂性強く、炭化物・土器片を多量に含む。埋土中より土師質土器の鍋・釜・皿などの破片約10個が出土したが実測可能なものは少なかった。

出土遺物（第33図）

16は、土師質土器の播鉢である。体部は外上方に立ち上がり、口縁部は肥厚し、内方へ屈曲する。端部は丸くおさめる。体部内面は3条/cmの櫛描条線を施す。外面はユビオサエ後ナデ、内面はナデ、櫛描条線を施す。16世紀ごろの土器と思われる。

炉跡2（SH1002）（第34図）

B区北部中央、M-8グリッドより検出した炉跡である。炉跡1（SH1001）の南端と接する。標高は炉跡1（SH1001）と同じ約109.2mに位置し、平面形は一部が大きく窪んだ不整形である。長軸0.94m、短軸0.36m、深さ0.09mを測る。底面はほぼ平坦で北に向かって浅くなっている。覆土は褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫を少量含み、0.5cm～10cm大の礫および炭化物を多量に含む。覆土中より土師質土器の播鉢および器種不明の土器片2個が出土したが実測不能であった。

窯跡1（SO1001）（第35図）

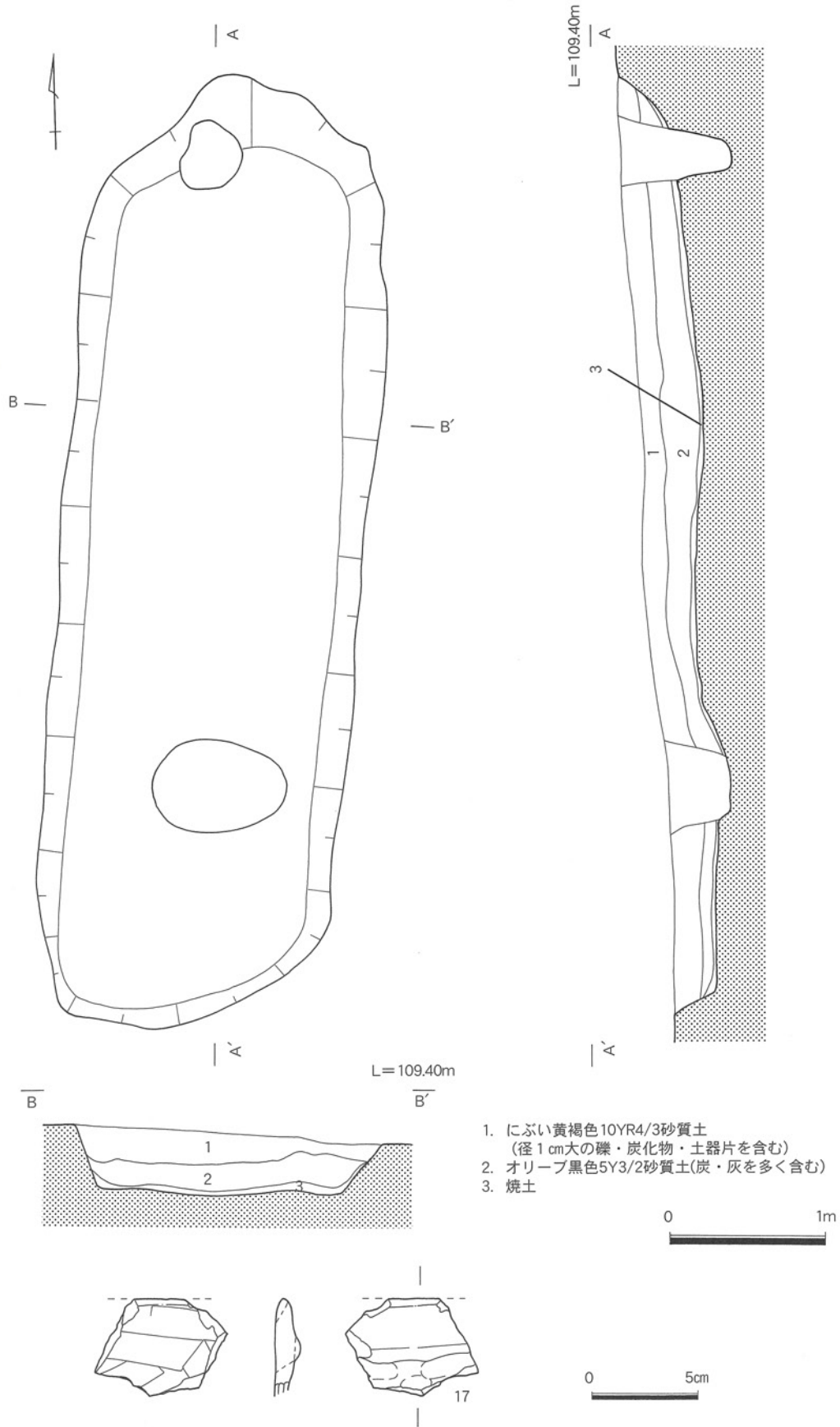
B区中央部西寄り、K-7・L-7グリッドで検出した。標高約109.3m～約108.9mに位置し、長軸方向はN-89°-Eに向く。平面形は不整な隅丸長方形で長軸5.9m、短軸1.95m、深さ0.4mを測る。北から南に向いて下る緩斜面上に構築されており北の隅の中央部でピットが検出された。底面は緩やかに南から北に上昇している。埋土は3層で、1層は、にぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を少量、炭化物、土器片を含む。2層は、厚さ20cmほどでオリーブ黒色砂質土、炭や灰が多量に含まれていた。3層は、焼土で底から壁際に沿って遺構面に達していた。埋土中より木炭、土師質土器の皿、鍋、釜などが数点出土したが、いずれも細片で釜以外は実測不能であった。

出土遺物（第35図）

17は、土師質土器の釜である。径は測定不能であった。口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。鏝は退化して突帯状となる。内面はナデ、外面はユビオサエ後ナデ調整を施す。

柱穴140（SP1140）（第36図）

B区の中央部西側寄り、L-7グリッドで検出した。炭窯跡1（SO1001）の北西の隅に隣接する。平面形はほぼ円形、底面は平坦である。標高約109.3mに位置し、長軸0.28m、短軸0.27m、深さ0.20mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫を少量、炭化物および土器片を含む。埋土中



第35図 SO1001遺構・出土遺物実測図

より土師質土器の釜が出土した。

出土遺物 (第37図)

18は、土師質土器の釜である。破片が小さく口径は測定できなかった。口縁部は体部上位より内傾し、口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。断面三角形の短い鏝が口縁部と体部との境に突帯状につく。外面はユビオサエ、内面は板状工具によるナデ調整である。時期は室町時代のものと考えられる。

柱穴161 (SP1161) (第38図)

B区中央の炉跡1 (SH1001) の東隣、M-8グリッドで検出した。標高約109.2mに位置し、長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.17mを測る。平面形は不整な円形で、底面はほぼ平坦である。覆土は褐色砂質土、0.2cm～1cm大の礫、および10cm大の礫、土器片を少量含む。埋土中より長さ28.3cm、幅13.5cmの焼けた石と土師質土器の茶釜が出土した。出土遺物から付近の炉跡と何らかの関係があると思われる。

出土遺物 (第39図)

19は、土師質土器の茶釜である。口径13.9cm、器高16.4cm、鏝径28.0cmを測る。球形の体部にやや外傾気味に直立する短い口縁がつく。口縁端部は方形におさめる。体部中央、口縁部と平行に長い鏝がつく。鏝端部は方形に仕上げる。体部最張部2ヶ所に板状の把手を貼り付け、把手の基部内側に円孔を施す。

柱穴164 (SP1164) (第40図)

B区の中央部、M-8グリッドで検出した柱穴である。炉跡2 (SH1002) の約1m南に位置し、標高約109.1m、長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.16mを測る。平面形はほぼ円形を呈し、底面はやや丸くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で粘性やや有り、0.2cm～3cm大の礫、および炭化物を少量含む。覆土中より土師質の播鉢が出土した。

出土遺物 (第41図)

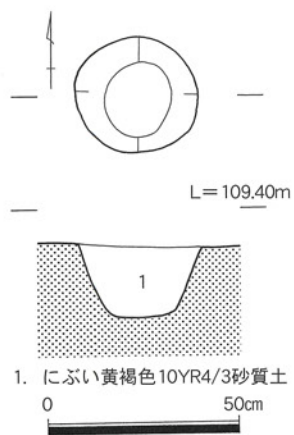
20は、備前系陶器の播鉢である。口縁部は肥厚し、口縁端部は欠損している。体部内面に3条/0.9cm 1単位の櫛描条線を施す。胎土は結晶片岩を含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面が橙色を呈する。時期は15世紀から16世紀のものと思われる。

柱穴192 (SP1192) (第42図)

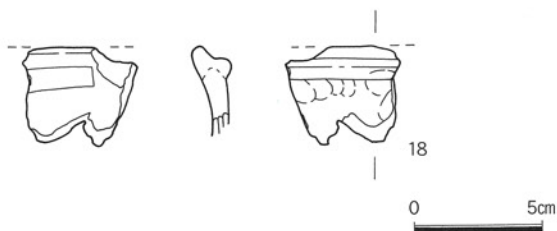
B区の南西部、K-5グリッドで検出した。標高約109.2m、長軸0.28m、短軸0.26m、深さ0.24mを測る。平面形は不整な円形を呈し、底面はやや丸くなっている。覆土は、にぶい黄褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む、炭化物、土器片を含む。覆土中より土師質土器の播鉢が出土した。

出土遺物 (第43図)

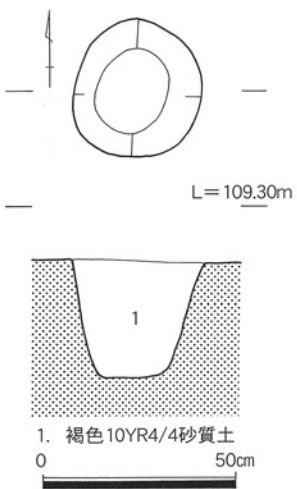
21は、土師質土器の播鉢である。体部は底部より直線的に立ち上がり、底部は外方向に突出する。体部内面はヨコハケ (7本/cm) 後櫛描条線 (4条/1.3cm)、外面はユビオサエ後ナデを施す。時期は室町時代のものと思われる。



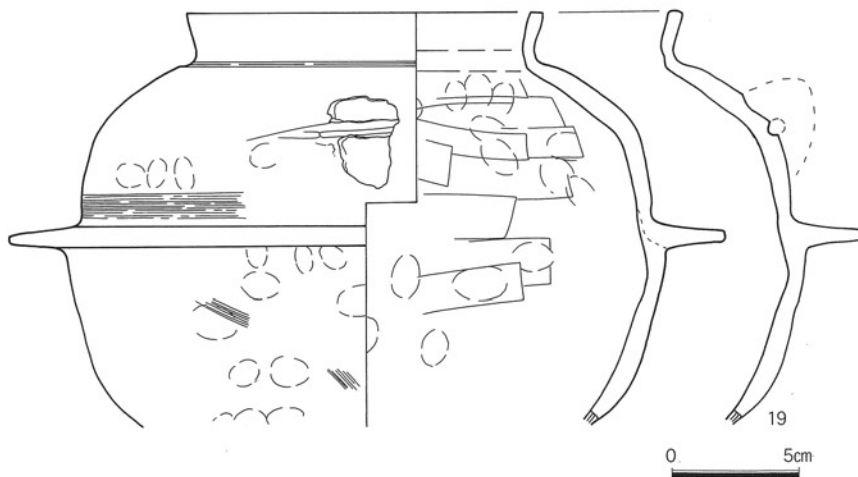
第36図 SP1140実測図



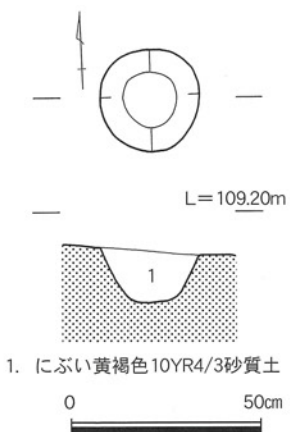
第37図 SP1140出土遺物実測図



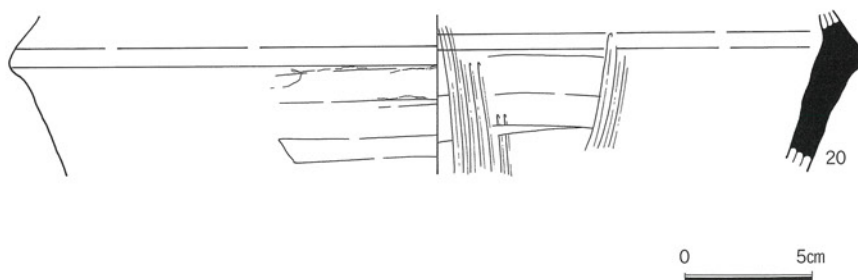
第38図 SP1161実測図



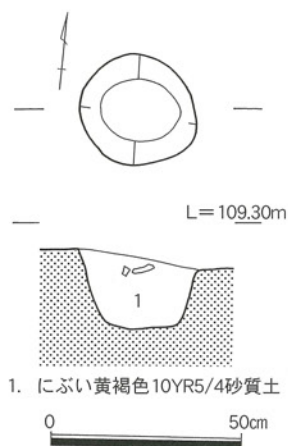
第39図 SP1161出土遺物実測図



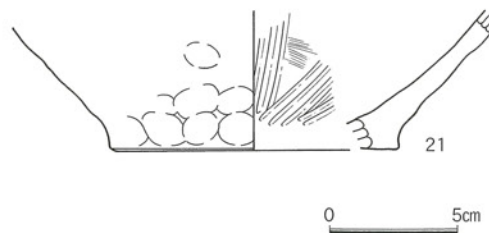
第40図 SP1164実測図



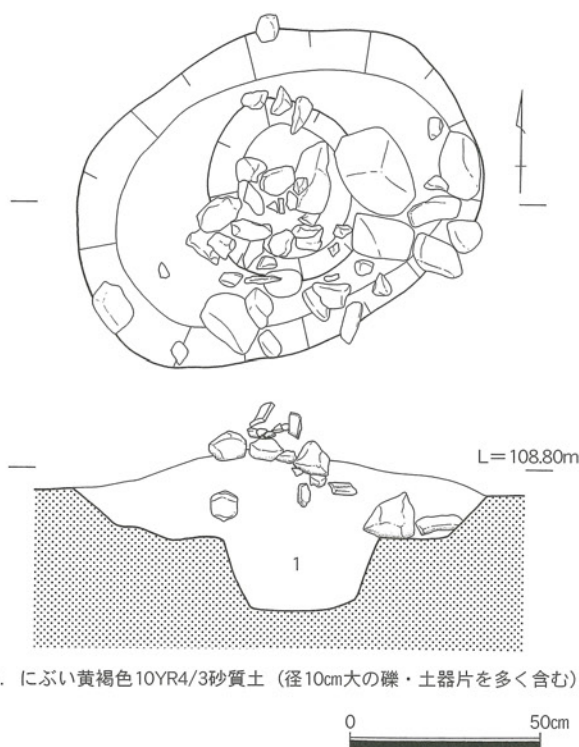
第41図 SP1164出土遺物実測図



第42図 SP1192実測図



第43図 SP1192出土遺物実測図



第44図 SK1001実測図

土坑 1 (SK1001) (第44図)

B区北東部、N-10グリッドより検出した土坑である。標高108.7mに位置し、平面形は不整な楕円形を呈する。長軸0.95m、短軸0.85m、最深部で0.34mを測り、底面は中央部が一段と深くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm~0.5cm大の礫を少量含み、10cm大の礫および土器片を多量に含む。埋土中より土師質土器の鍋・播鉢・甕の底部など数点が出土したが、いずれも細片で実測不能であった。

不明遺構 14 (SX1014) (第45図)

B区の北西部、O-7グリッドより検出した不明遺構である。標高約110mに位置し、長軸1.00m、短軸0.70m、深さ0.10mを測る。平面形は不整な隅丸三角形を呈し、底面はほぼ平坦で東に向かって低くなっている。覆土はにぶい

黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm~0.5cm大の礫および0.5cm~10cm大の礫を含む。また、炭化物を多量に含む。出土遺物はなかった。

不明遺構 15 (SX1015) (第46図)

B区の北西部、掘立柱建物跡 1 (SA1001) のすぐ南、N-7グリッドより検出した不明遺構である。標高は約109.6mに位置し、長軸0.88m、短軸0.70m、深さ0.17mを測る。平面形は不整な楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm~0.5cm大の礫、および5cm~10cm大の礫、土器片を含む。覆土中より土師質土器の皿、器種不明の細片などが出土した。

出土遺物（第47図）

22は、土師質土器の皿である。底径10.5cmを測る。内外面とも丁寧なナデを施し、体部は底部より外上方に直線的に立ち上がる。底部と体部との境は不明瞭である。

不明遺構16（SX1016）（第48図）

B区の北部中央、掘立柱建物跡1（SA1001）より約3.5m東に位置するN-8グリッドより検出した不明遺構である。標高約109m～109.4mに位置し、長軸0.65m、短軸0.52m、深さ0.20mを測る。平面形は隅丸な三日月状を呈する。底面はほぼ平坦で、東の方向へ向かって低くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～10cm大の礫を多量に含む。出土遺物はなかった。

不明遺構17（SX1017）（第49図）

B区の南西部、J-4グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構18（SX1018）より1.5m西、標高約109mに位置し、長軸0.85m、短軸0.74m、深さ0.20mを測る。平面形は不整な楕円形で底面は平坦、東に向かって低くなっている。出土遺物はなかった。

不明遺構18（SX1018）（第50図）

B区の南西部、J-5グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構17（SX1017）の約1.5m東、標高約109mに位置し、長軸0.88m、短軸0.6m、深さ0.15mを測る。平面形はひとつの角が窪んだ不整な隅丸長方形を呈し、底面は平坦である。出土遺物はなかった。

不明遺構19（SX1019）（第51図）

B区南部の中央、J-7グリッドで検出した不明遺構である。標高約108.7mに位置し、長軸1.12m、短軸0.92m、0.15m深さを測る。平面形は不整な楕円形を呈し、底面は平坦である。出土遺物はなかった。

不明遺構20（SX1020）（第52図）

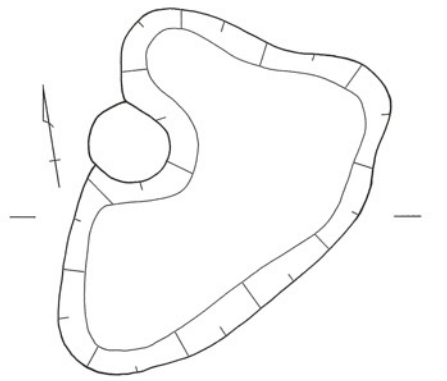
B区の南部、J-8グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構22（SX1022）の約1m南、および不明遺構21（SX1021）の約0.8m西と比較的近くに3つの不明遺構が検出された。標高約108.4mに位置し、長軸0.95m、短軸0.85m、深さ0.17mを測る。平面形は不整な円形で底面は平坦である。覆土中に礫を含む。出土遺物はなかった。

不明遺構21（SX1021）（第53図）

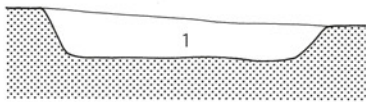
B区の南部、J-9グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構20（SX1020）の約0.8m東、標高約108.4mに位置し、長軸0.86m、短軸0.66m、深さ0.16mを測る。平面形は南側に面する半分が丸く半楕円形、北側の半分が長方形を呈する。覆土中に礫を含む。出土遺物はなかった。

不明遺構22（SX1022）（第54図）

B区の南部、K-8グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構20（SX1020）の約0.8m北、標高



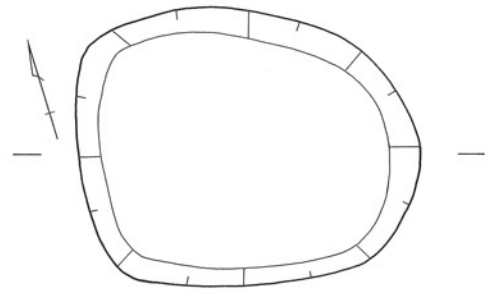
L=110.10m



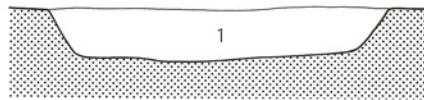
1. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土(炭化物を多く含む)



第45図 SX1014実測図



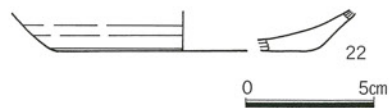
L=109.70m



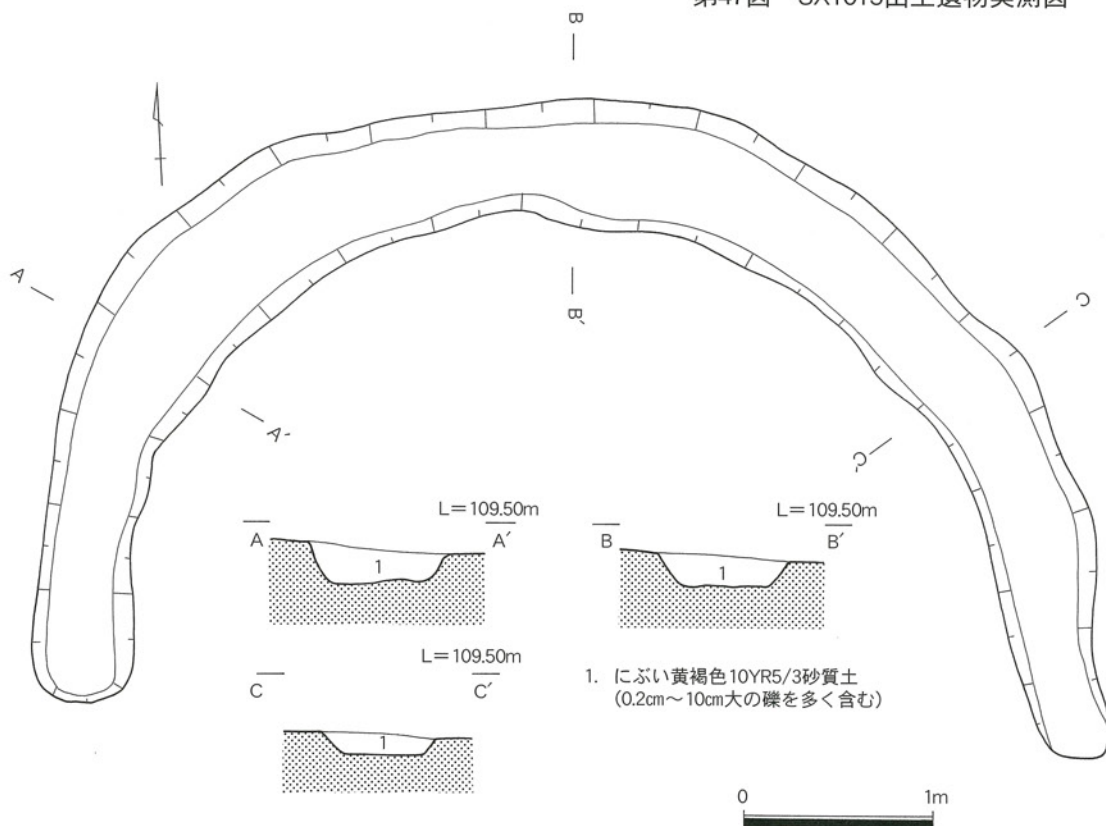
1. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土(土器片含む)



第46図 SX1015実測図



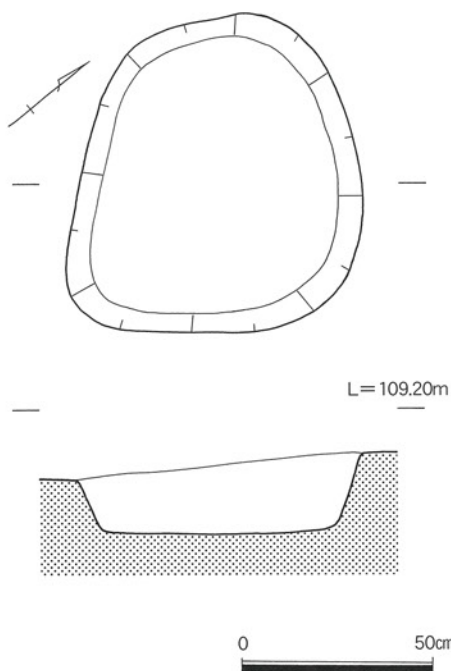
第47図 SX1015出土遺物実測図



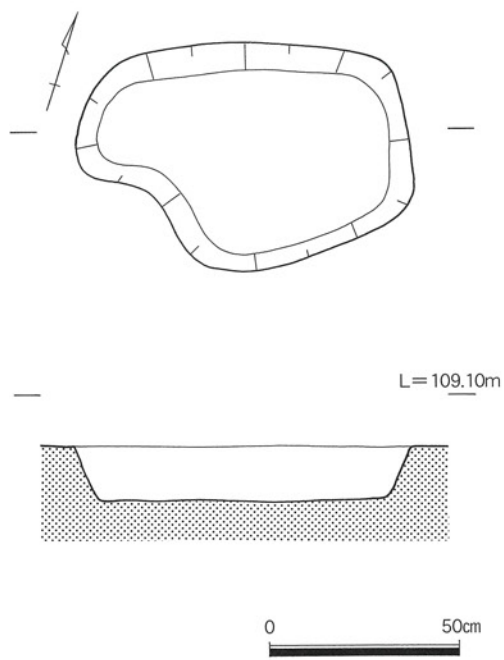
1. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土
(0.2cm~10cm大の礫を多く含む)



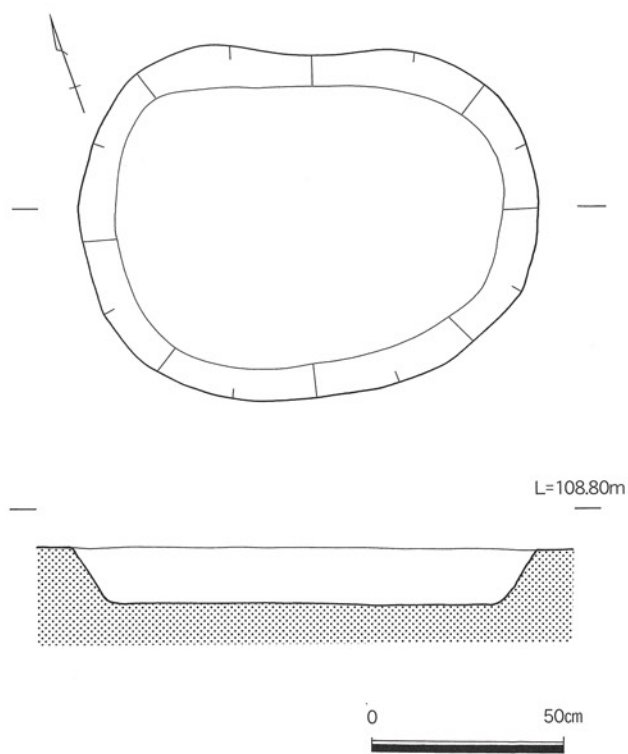
第48図 SX1016実測図



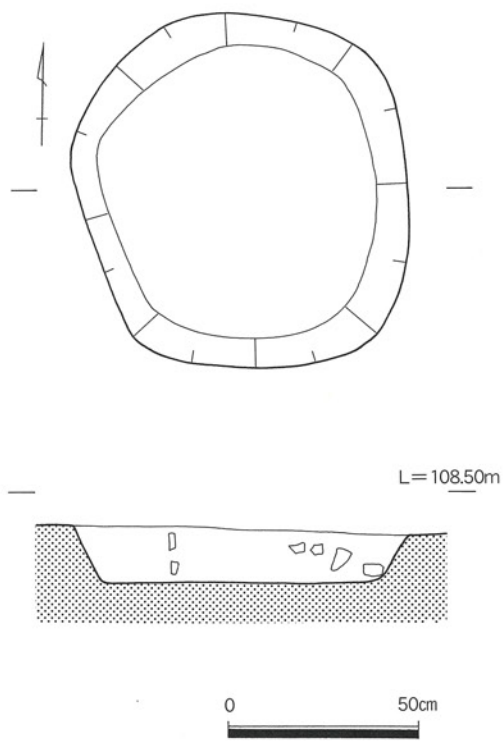
第49図 SX1017実測図



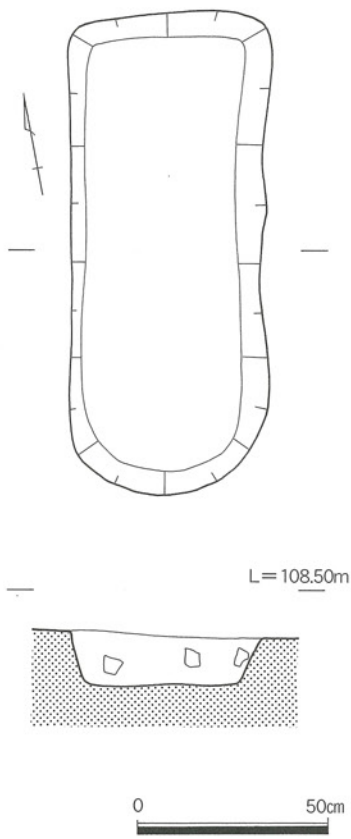
第50図 SX1018実測図



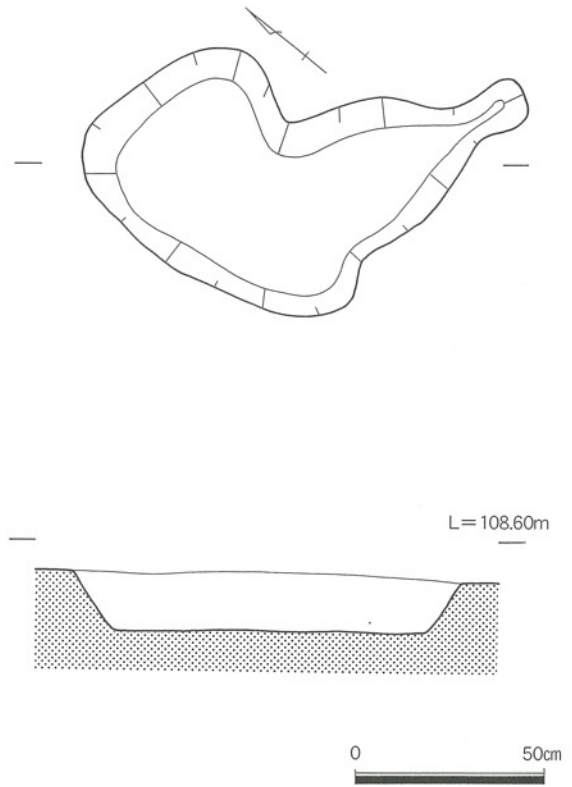
第51図 SX1019実測図



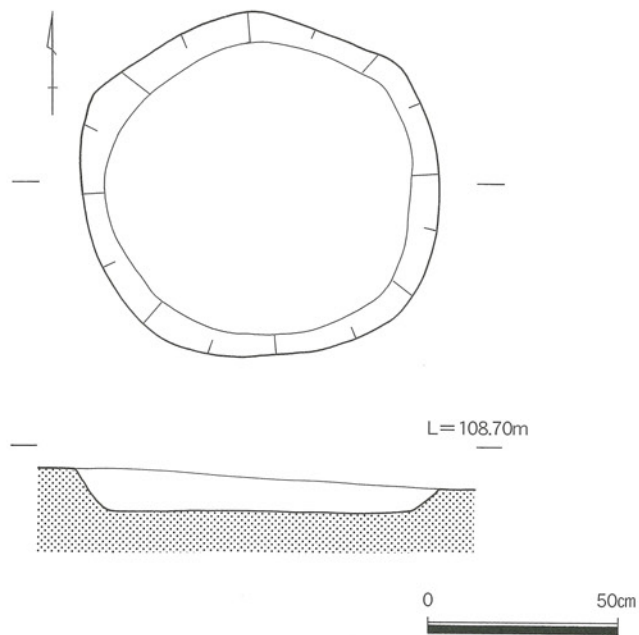
第52図 SX1020実測図



第53図 SX1021実測図



第54図 SX1022実測図



第55図 SX1023実測図

約108.5mに位置する。長軸1.24m、短軸0.48m、深さ0.15mを測る。平面形は、不整な瓢箪型で北西の隅はやや角ばり、南東の隅は少し低くなり瓢箪の口のように狭くなっているが、2つの遺構が切り合っている可能性も考えられる。底面はほぼ平坦である。出土遺物はなかった。

不明遺構23 (SX1023) (第55図)

B区の中央部東端、M-11グリッドで検出した不明遺構である。標高約108.6mに位置し、平面形は不正な円形を呈する。底面はほぼ平坦で東に向かって低く浅くなっている。長軸0.92m、短軸0.85m、深さ0.10mを測る。出土遺物はなかった。



第56図 C区遺構配置図

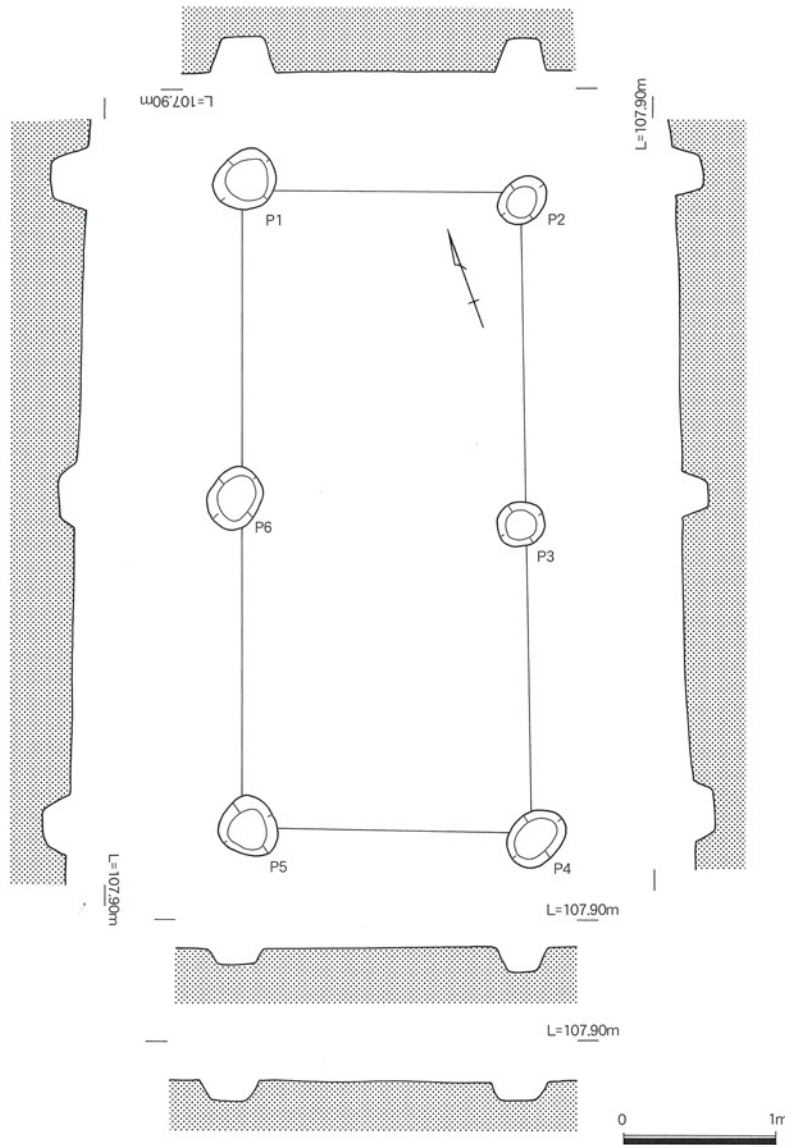
C 区 (第56図)

C区は調査区が一番南に位置し、B調査区よりさらに一段下がる。標高約108m～107.3mを測り、南に向かって緩やかに傾斜している。C区では、掘立柱建物跡1基、溝4条、柱穴53基、不明遺構6基を検出した。遺構からの出土遺物は少なかったが、包含層からは中世の土師質土器の釜、播鉢、近世の陶器などが出土した。

C区の遺構と遺物

掘立柱建物跡3 (SA1003) (第57図)

C区中央部、G-6・G-7グリッドで検出された掘立柱建物跡である。6基の柱穴で構成される。標高約107.8m～107.6mに位置し、傾斜に対してほぼ直角に構築されている。梁間1.9m、桁行4.25mを測る。棟方向はN-60°-Wである。柱間距離は梁間1.85m～1.9m、桁行は2.05m～2.2m、柱穴の平面形



第57図 SA1003実測図

はどれも不整な円形、あるいは楕円形で、直径0.36m～0.23m、深さ0.12m～0.22mを測る。P1は直径0.30m、深さ0.22mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含み、2cm～3cm大の礫を少量含む。P2は直径0.23m、深さ0.22mを測り、平面形は楕円形を呈する。覆土はP1と同じである。P3は直径0.30m、深さ0.18mを測り、平面形は不整な円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性があり、0.2cm～0.5cm大の礫を多量、2cm～3cm大の礫および炭化物を少量含む。P4は直径0.36m、深さ0.14mを測り、平面形は楕円形を呈する。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を含む。P5は直径0.33m、深さ0.15mを測り、平面形は不整な隅丸三角形を呈する。覆土は褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を多量、5cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。P6は直径0.32m、深さ0.12mを

測り、平面形は楕円形を呈する。覆土は褐色砂質土でP 5と同じく0.2cm～1cm大の礫を多量、5cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

溝 1 (SD1001) (第58図)

C区の東側、G-9グリッドで検出した溝である。溝1 (SD1001)、溝2 (SD1002)、溝3 (SD1003) とほぼ東西方向に一直線上に並んで検出された。標高も約107.8m～107.7mと高低差は少なく、極緩やかに西から東に向かって低くなっている。溝1 (SD1001)は、3本の中で一番西に検出され、標高約107.8m、長軸2.8m、短軸0.3m、深さ0.1mを測る。左端から右端までほとんど高低差はなく、平面形はほぼ帯状に伸びた長い楕円形で、覆土はにぶい黄褐色砂質土、0.2cm～1cm大の礫および炭化物を含む。また5cm～10cm大の礫を少量含む。付近から掘立柱建物跡などの遺構が検出されていないので、その性格は不明である。覆土中遺物の出土はない。

溝 2 (SD1002) (第59図)

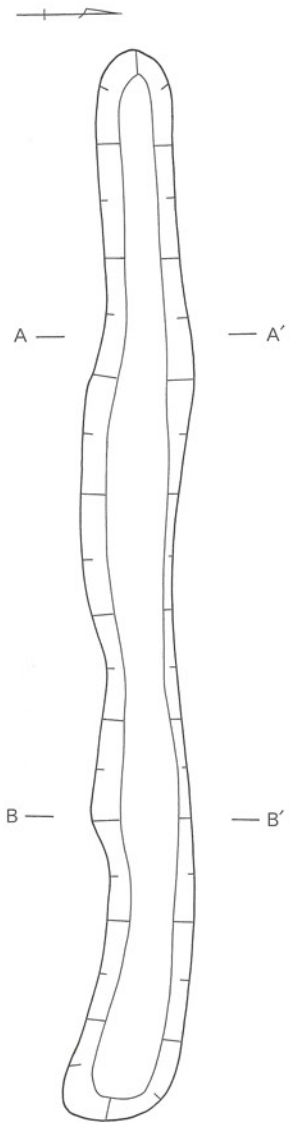
C区の東側、G-10グリッドで検出した溝である。溝1 (SD1001) より約3.5m東で、標高もやや低く約107.7mに位置する。平面形は長い帯状の楕円形を呈する。長軸2.9m、短軸0.26m、深さ0.08mを測り、3本の溝の中では一番短い。埋土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～2cm大の礫を多量、5cm大の礫および炭化物を少量含む。この2号溝付近からも掘立柱建物跡などの遺構は検出されていないので、その性格は不明であるが、0.2m南に不明遺構26 (SX1026) が検出されており何らかの関係があるとも考えられる。覆土中より遺物の出土はない。

溝 3 (SD1003) (第60図)

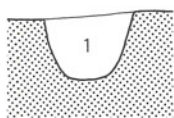
C区の東端、G-10・G-11グリッドで検出した溝である。3本の溝の中では一番東端に有り、一番長い。標高も溝2 (SD1002) と同じで約107.7mに位置し、端から端まであまり高低差はなく、長軸4.85m、短軸0.35m、深さ0.07mを測る。覆土は溝1 (SD1001) と同じでにぶい黄褐色砂質土、0.2cm～1cm大の礫および炭化物を含み、5cm～10cm大の礫を少量含む。検出状況から3本の溝は、もともとはつながっていた可能性が考えられる。また、3号溝付近からも掘立柱建物跡などの遺構は検出されていないのでその性格は不明である。覆土中より遺物の出土はなかった。

溝 4 (SD1004) (第61図)

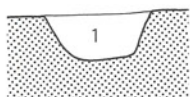
C区の北東端、L-10・11・12・K-10・11・J-10グリッドで検出した溝である。標高約108.4m～108.1mに位置し、長軸16.0m、短軸1.25m、深さ0.1mを測る。平面形は中央で大きく屈曲した帯状で東西に約6m、南北に約10m延びている。東西方向の高低差は約12cmで東に向かって低くなっている。また、南北方向の高低差は約37cmで南に向かって低くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～2cm大の礫を多量、5cm大の礫および炭化物を少量含む。溝4は、他の溝1から溝3より約13m北で、標高も約45cm高い所に位置している。この付近からも掘立柱建物跡などの遺構は検出されずその性格は不明である。覆土中より遺物の出土はない。



A — L=107.90m — A'



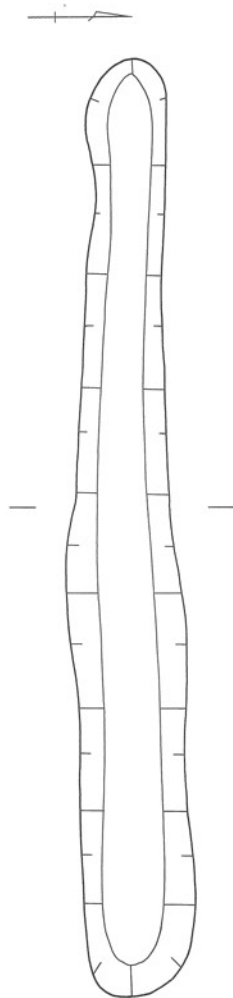
B — L=107.90m — B'



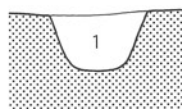
1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土



第58図 SD1001実測図



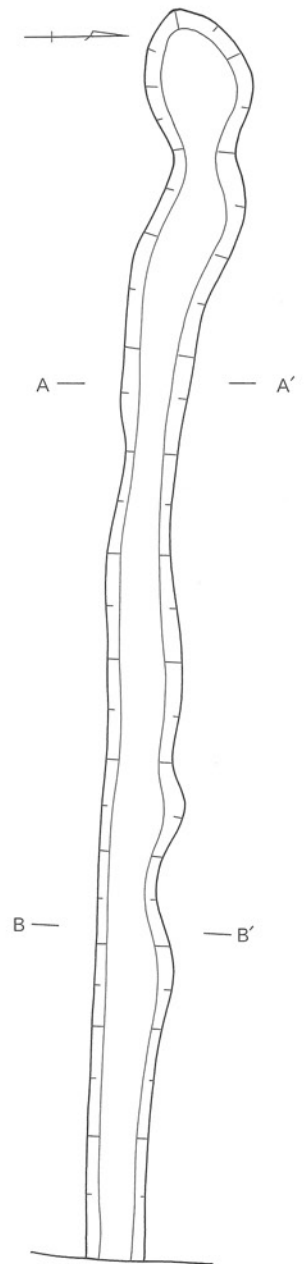
L=107.80m



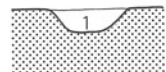
1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土



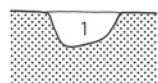
第59図 SD1002実測図



A — L=107.70m — A'



B — L=107.70m — B'



1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土



第60図 SD1003実測図

不明遺構24 (SX1024) (第62図)

C区の南部の西端、E-2グリッドで検出した不明遺構である。標高約107.4mに位置し、長軸0.95m、短軸0.45m、深さ0.20mを測る。平面形は瓢箪のような形をした不整な楕円形で、2つの遺構が切り合っている可能性もある。底面は、ほぼ平坦で東の方がやや深くなっている。覆土は褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫、10cm大の礫および炭化物を少量含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構25 (SX1025) (第63図)

C区の中央部、F-6グリッドで検出した不明遺構である。掘立柱建物跡3 (SA1003) より2m南西に位置し、標高約107.5m、長軸1.85m、短軸0.66m、深さ0.9mを測る。平面形は不整な楕円形で底面はほぼ平坦である。覆土はにぶい黄褐色砂質土で炭化物を含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構26 (SX1026) (第64図)

C区の東南端近く、G-10グリッドで検出した不明遺構である。溝2 (SD1002) の約0.2m南に隣接する。標高約107.7m～107.5mに位置し、南に向かって低くなり、傾斜に対して直角方向に検出された。長軸5.98m、短軸1.28m、深さ0.17mを測る。平面形は不整な隅丸長方形で、底面はほぼ平坦である。覆土は褐色砂質土でやや粘性が有り、0.2cm～2cm大の礫を多量、5cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構27 (SX1027) (第65図)

C区の東南端、G-11グリッドで検出した不明遺構である。不明遺構26 (SX1026) の約1.8m東に位置し、標高約107.6m、長軸1.36m、短軸1.03m、深さ0.23mを測る。平面形は中央部が窪んだ不整な楕円形で底面はやや丸くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を含み、5cm～10cm大の礫を少量、炭化物を多量に含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

不明遺構28 (SX1028) (第66図)

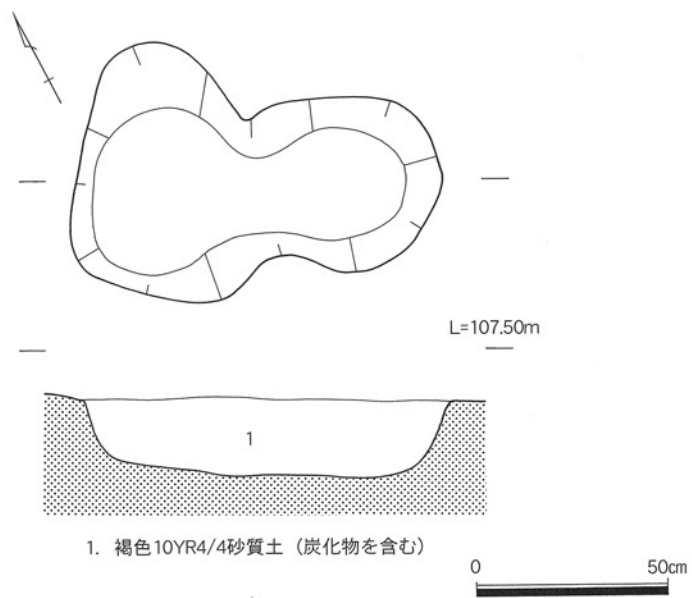
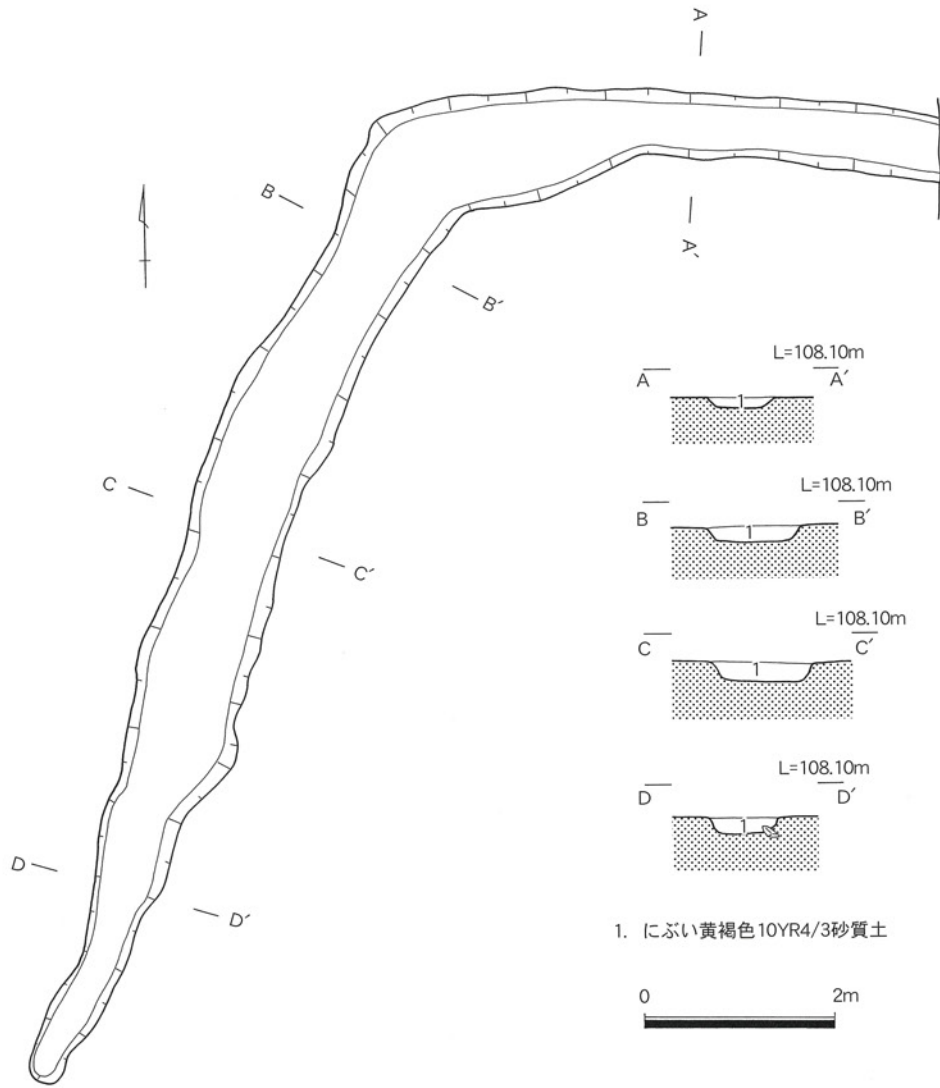
C区の東南、G-10・H-10グリッドより検出した不明遺構である。溝2 (SD1002) の0.4m北に位置し、標高約107.8m、長軸1.20m、短軸0.92m、深さ0.08mを測る。平面形は楕円形で、底面はほぼ平坦であり、南東に向かって低くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含み、2cm～5cm大の礫および炭化物を少量含む。覆土中より遺物の出土はなかった。

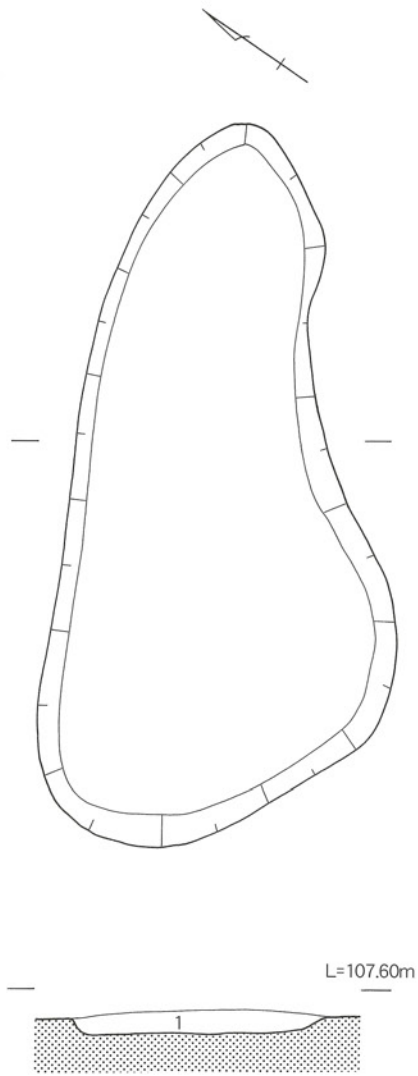
不明遺構29 (SX1029) (第67図)

C区の北東端、K-11・K-12グリッドで検出した不明遺構である。南東部の端は調査区の溝で切られている。標高約108.3mに位置し、長軸1.66m、短軸0.90m、深さ0.28mを測る。平面形は不整な隅丸長方形で底面は東側が浅くなっている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で0.2cm～1cm大の礫を含み、5cm～10cm大の礫を少量、炭化物を多量に含む。覆土中より近世の陶器が出土した。

出土遺物 (第68図)

23・24は、緑釉の皿である。見込に型押成形による雲龍文の陽刻がある。高台には千鳥の陰刻がある。

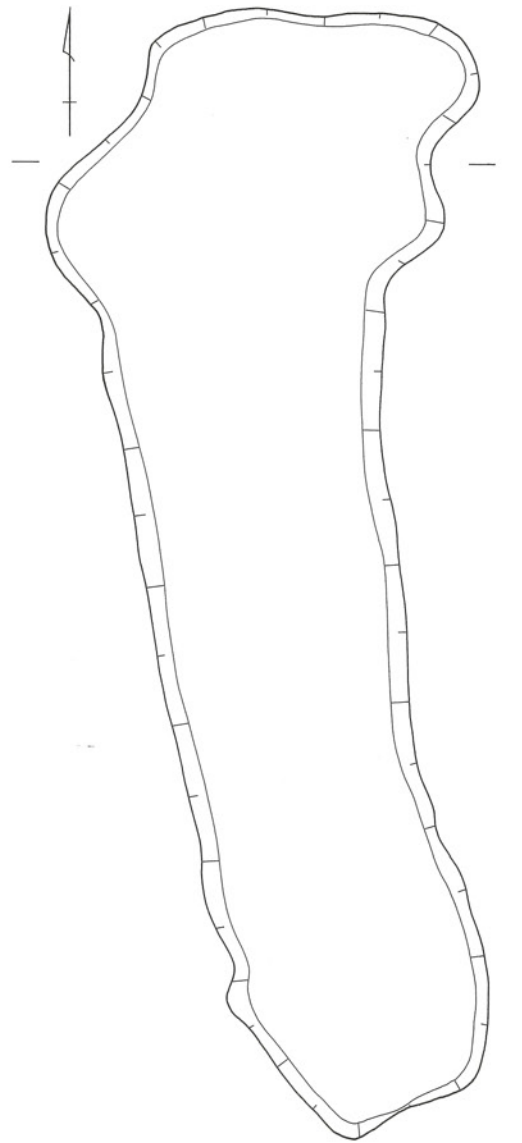




1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土 (炭化物を含む)

0 50cm

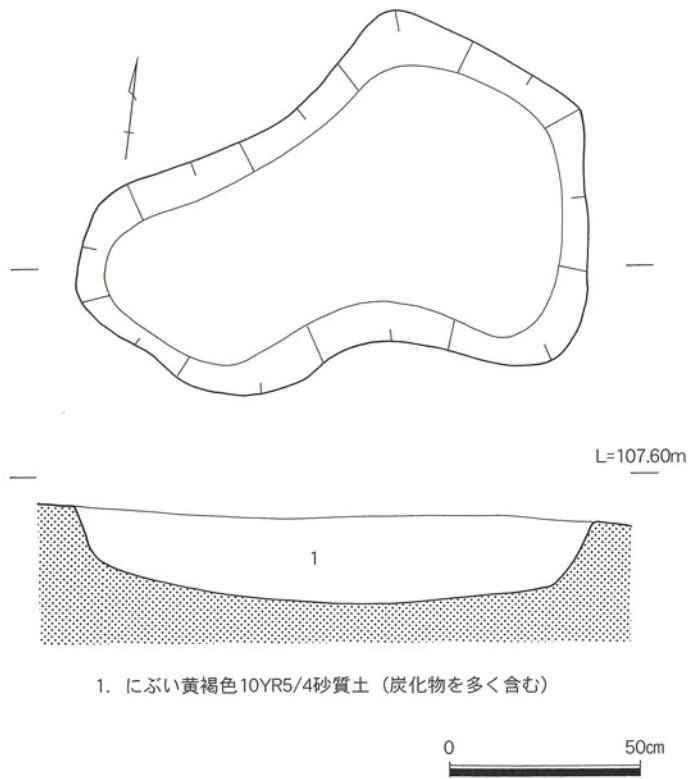
第63図 SX1025実測図



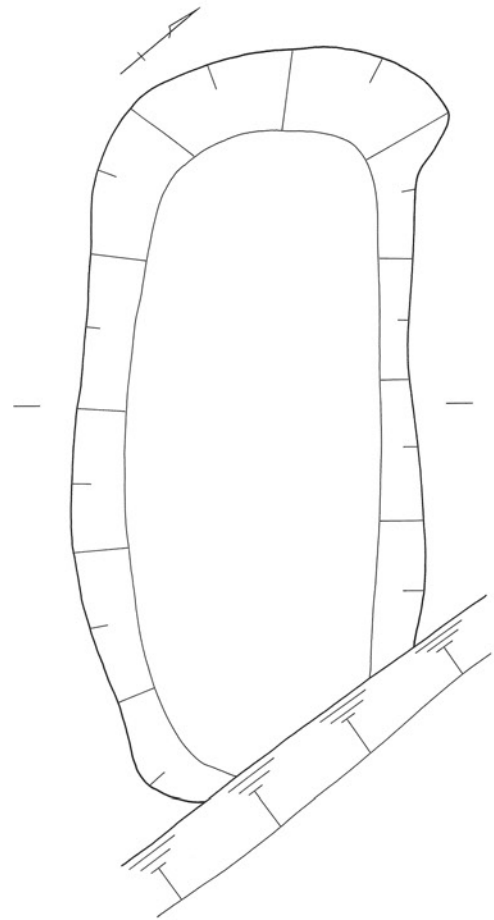
1. 褐色10YR4/4砂質土 (炭化物を含む)

0 1m

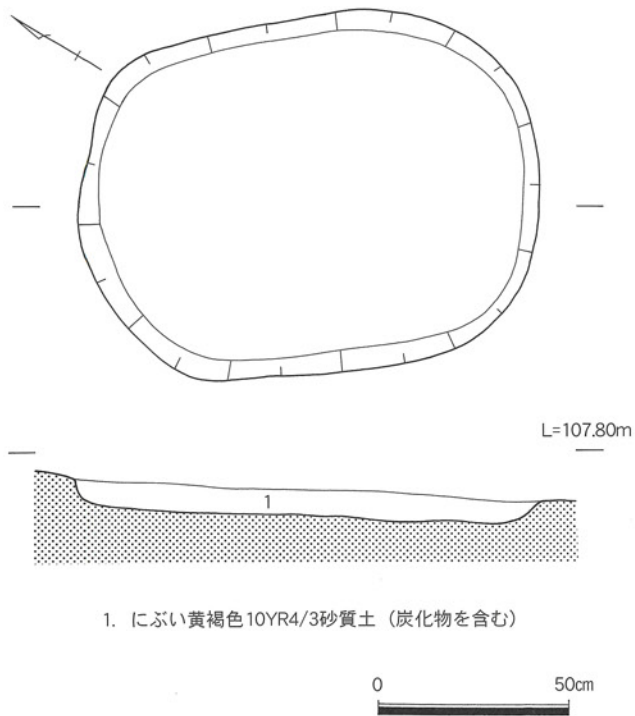
第64図 SX1026実測図



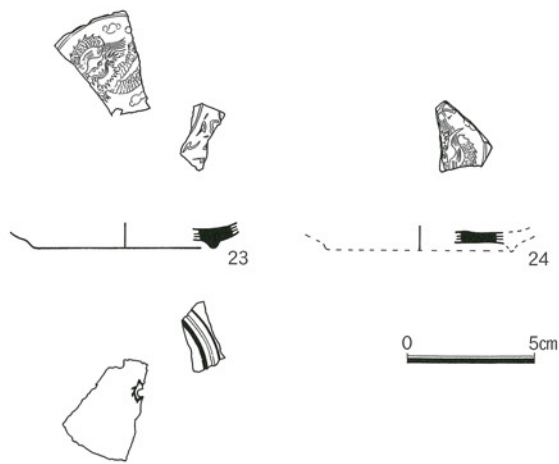
第65図 SX1027実測図



第67図 SX1029実測図



第66図 SX1028実測図



第68図 SX1029出土遺物実測図

胎土は灰白色で緻密であるが、陶器質である。緑釉の全釉である。19世紀中葉から19世紀末にかけてのものと思われる。

遺物包含層の出土遺物

中世以前の遺物

石器 (第69図)

25は、サヌカイト製の石鎌である。長さ2.6cm、幅2.2cm、厚さ0.35cm、重さ2.8gを測る。先端が欠損しているが、鎌身三角形の平基無茎式の石鎌である。表裏面とも細かな調整加工が施され、横断面形は凸レンズ状を呈する。

中世の遺物

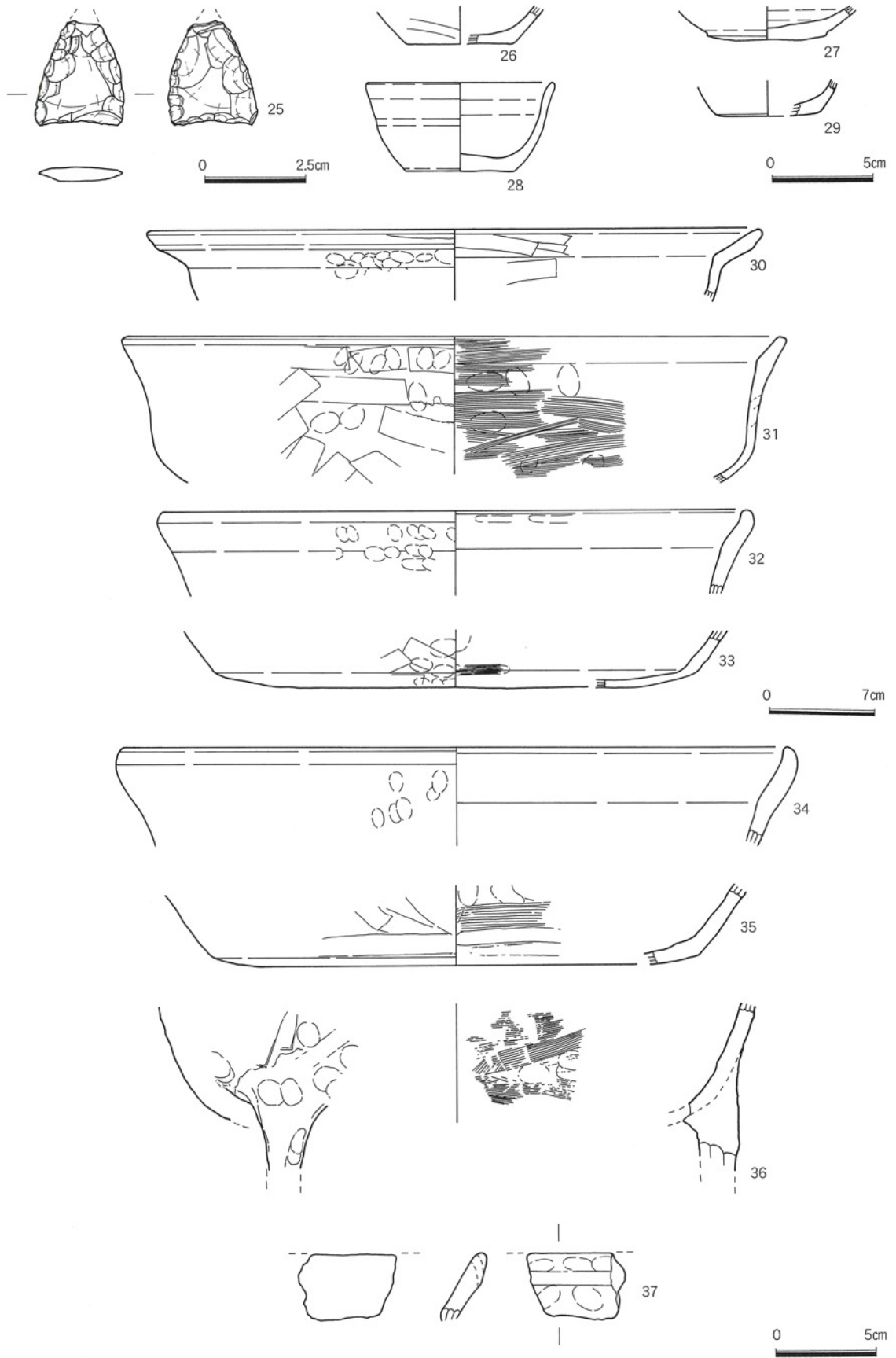
土師質土器・皿・杯 (第69図)

26・27は、土師質土器の皿である。いずれも内外面にヨコナデを施す。27は、体部外面の強いヨコナデにより底部との境に段を有する。28・29は、土師質土器の杯である。28は、口径に比して器高が高く、内外面をヨコナデし、底部を静止糸切りする。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部わずかに外反する。口縁端部は尖り気味におさめる。底部の器壁は中心部に向かって厚くなる。29は、体部は直線的に外上方に立ち上がり、内外面に丁寧なヨコナデを施す。いずれも底部と体部との境は明瞭である。

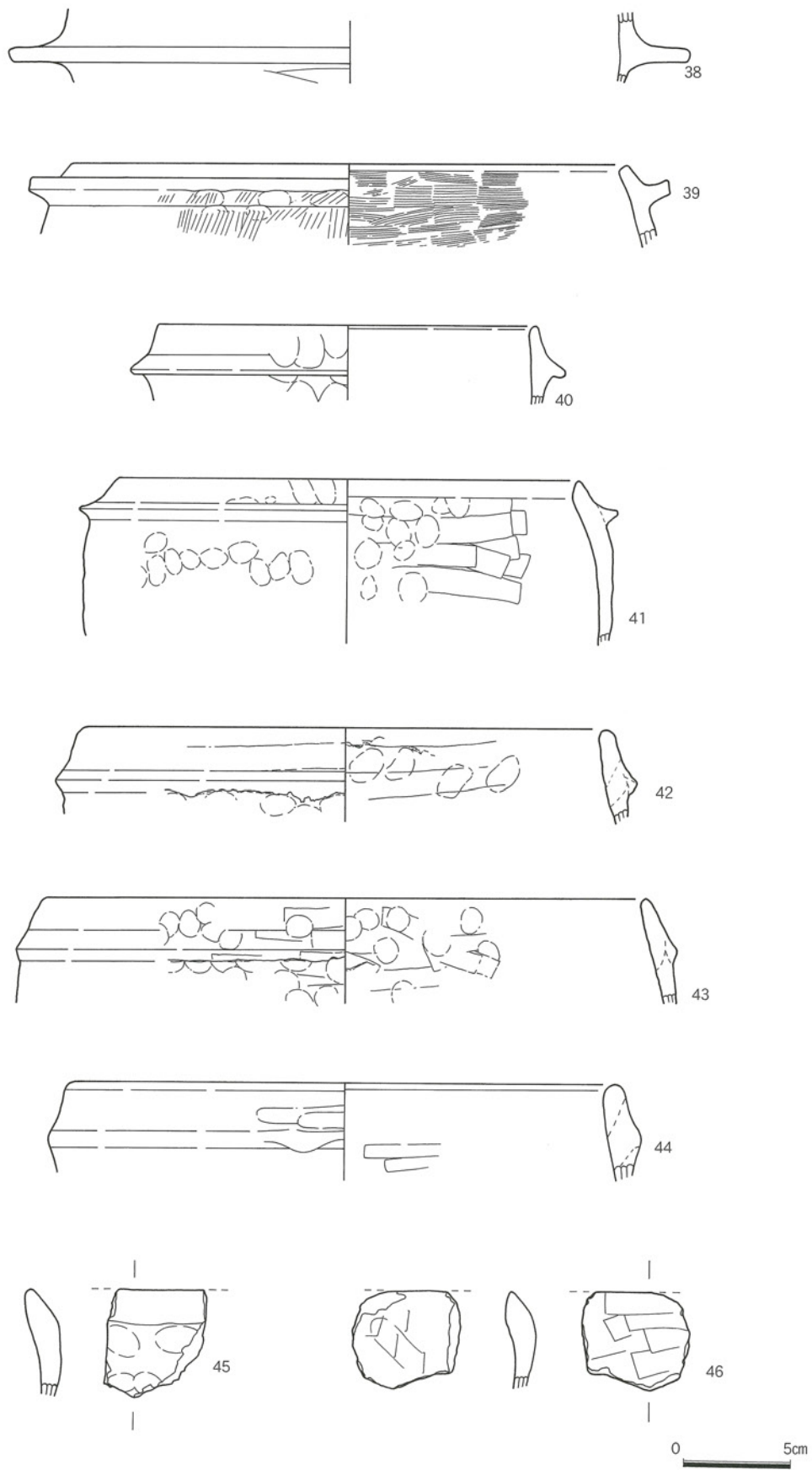
土師質土器・鍋 (第69図)

30～37は、土師質土器の鍋である。外面に鏝を持たず、口縁部が外反するものを鍋とした。30は、口縁部が体部との境で大きく「く」の字状に外反し、口縁端部は丸くおさめる。内面の口縁部と体部との境は明瞭である。内面は板状工具によるナデ、外面は板ナデとユビオサエを施す。31は、体部が下位で彎曲し直線的に立ち上がる。口縁部は体部との境で「く」の字状に外反し肥厚、口縁端部は方形にまとめる。内面は緻密なハケ(8本/cm)・ユビオサエ、外面は板ナデおよびユビオサエ調整を施す。また、内面の口縁部と体部との境は明瞭である。32は、口縁部が体部との境で「く」の字状にわずかに外反し肥厚する。口縁端部は上方へつまみ上げ丸くおさめる。内面はユビナデ、外面はユビオサエをとどめる。34は、口縁部が「く」の字状に外反し肥厚、口縁端部はやや内上方につまみ上げ、尖り気味におさめる。内面はナデ、外面はユビオサエのちナデ調整を施す。37は、口径は不明であるが、口縁部は同じく「く」の字状に外反し肥厚、口縁端部は丸くおさめる。30・31・37は、外反の度合いが強く、32・34は、外反の度合いが弱く、また口縁端部を上方へ摘み上げている。

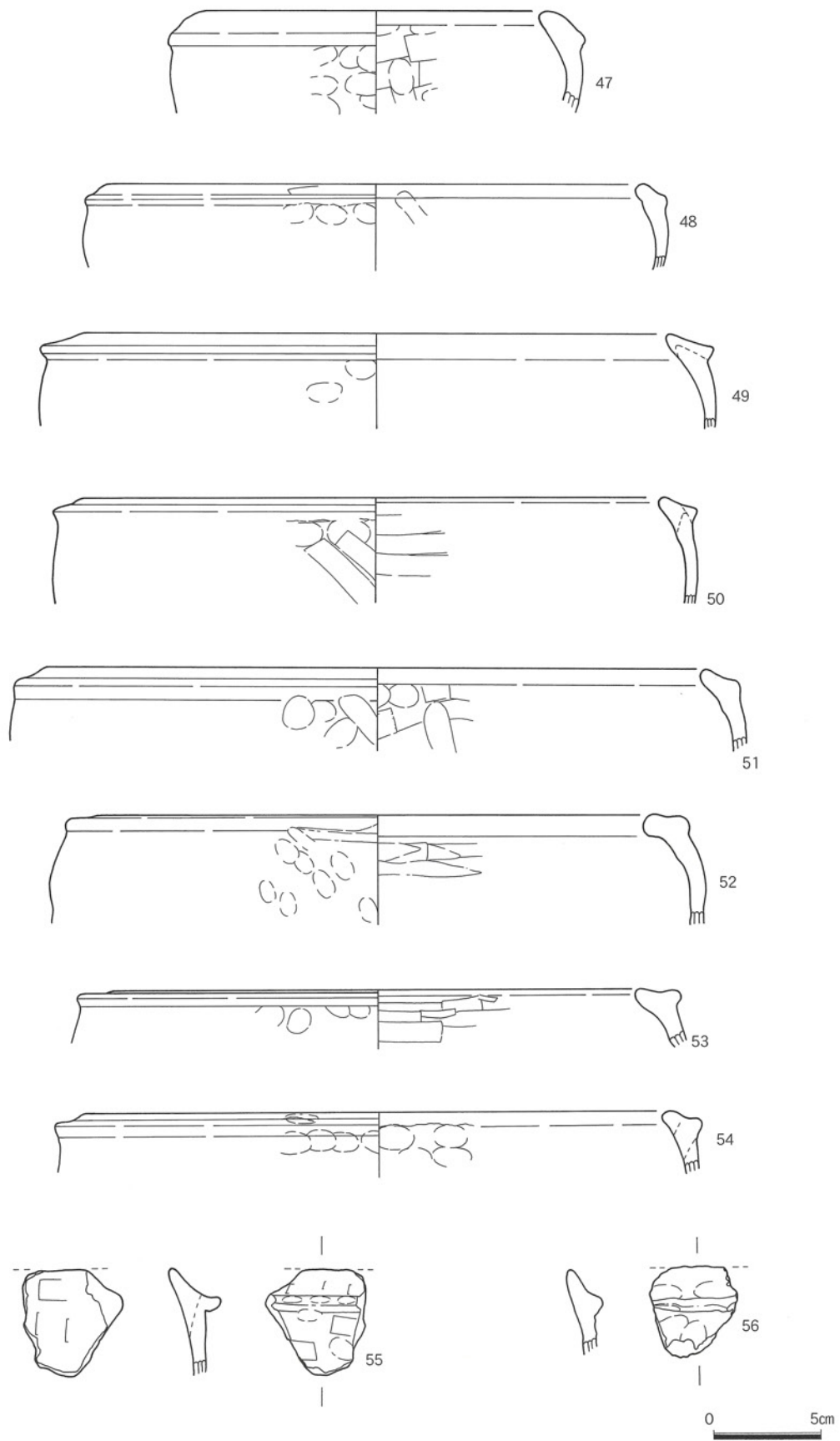
33・35は、鍋の底部である。いずれも底部はやや丸みを持つ。底部から外上方に直線的に立ち上がり、底部と体部の境は不明瞭である。また、内面にヨコハケを密に施す。36は、脚付きの鍋である。体部は底部より直線的に立ち上がり、底部に脚がつく。内面は緻密なハケ(10本/cm)後ユビオサエで外面はユビオサエ後ナデ調整である。



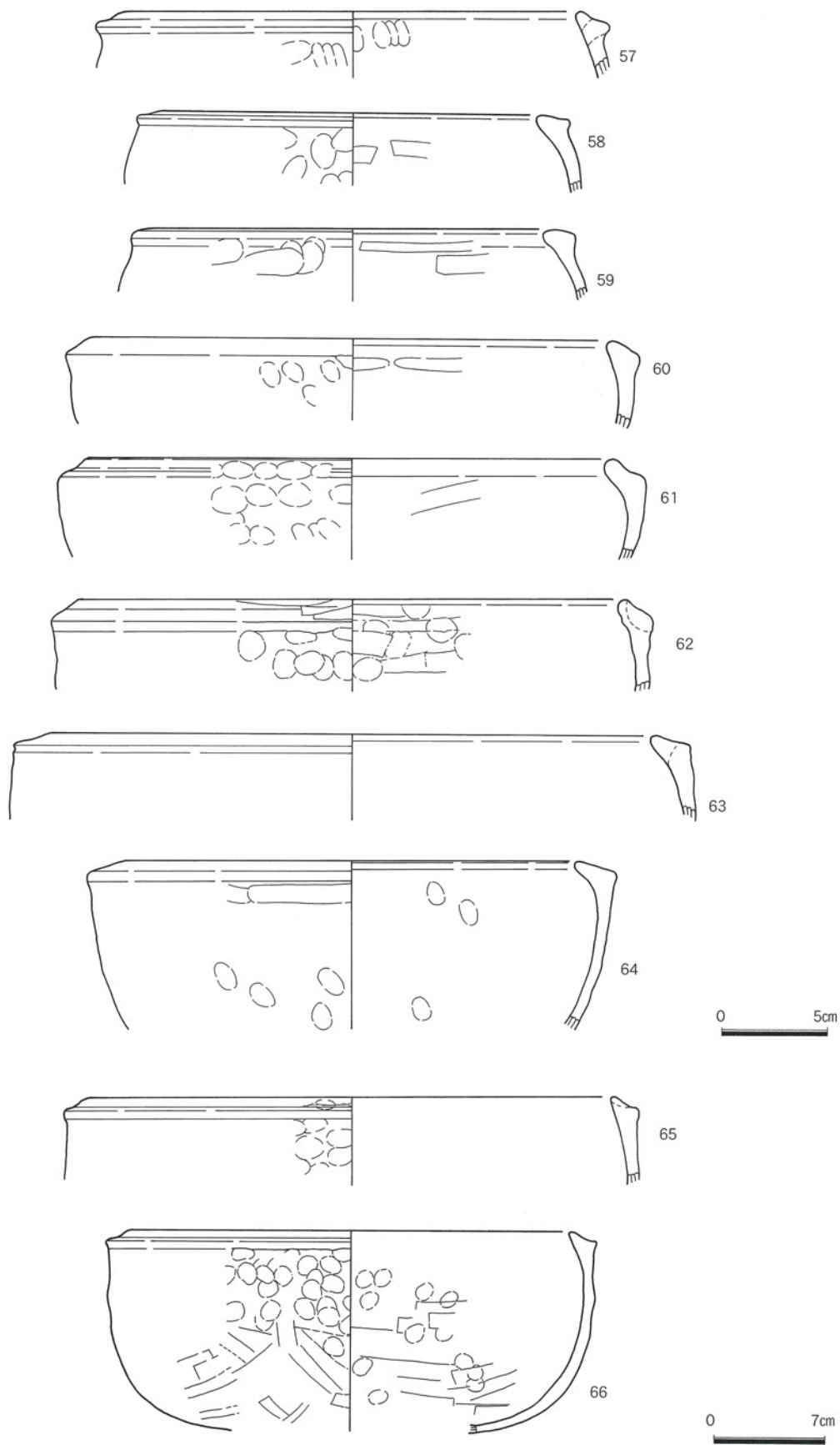
第69図 包含層出土遺物実測図(1)



第70図 包含層出土遺物実測図(2)



第71图 包含層出土遺物実測図(3)



第72図 包含層出土遺物実測図(4)

土師質土器・釜（第70～75図）

38～83は、土師質土器の釜である。口縁部外面に鏝を持ち、断面方形のしっかりとした鏝を持つものから、口縁部上端近くおよび下方に痕跡程度に形骸化した鏝をもつものまでを含めて釜とした。

38・39は、断面方形のしっかりした鏝がつく。38は、口径は不明であるが、鏝径が31.8cmを測り、内面はナデ、外面は板状工具によるナデ調整、口縁部は直立し断面方形の長い鏝が水平につく。39は、口径23.8cm、鏝径29.8cmを測る。口縁部は内傾し、口縁部外面に板状工具によるナデ、ユビオサエをとどめ、体部外面にハケ、内面は口縁部から体部にかけてヨコハケを密に施す。断面方形の長い鏝が上向きにつく。

40・41・55は、やや長めの鏝がつく釜である。40は、口径17.6cm、内外面ともナデ調整、外面にはユビオサエをとどめる。口縁部は直立し、口縁端部は尖り気味におさめる。長めの断面台形の鏝が下向きにつく。41は、口径21.3cm、鏝径25cmを測る。体部は直立し、口縁部は体部上方より内彎する。口縁端部は尖り気味におさめる。断面三角形の長めの鏝が水平につく。55は、口径は不明であるが、口縁部は体部上方より内傾し、口縁端部は丸くおさめる。断面台形状の長めの鏝が水平につく。

42～44・56は、口縁部やや内傾し、断面三角形の退化した鏝が形骸的につく。45・46は、口縁部が内傾し、鏝部分は退化して肥厚し認められない。

47～54・57～70は、口縁部が体部上位より内彎し、だんだんと退化した鏝が口縁部上端近くにつくものである。

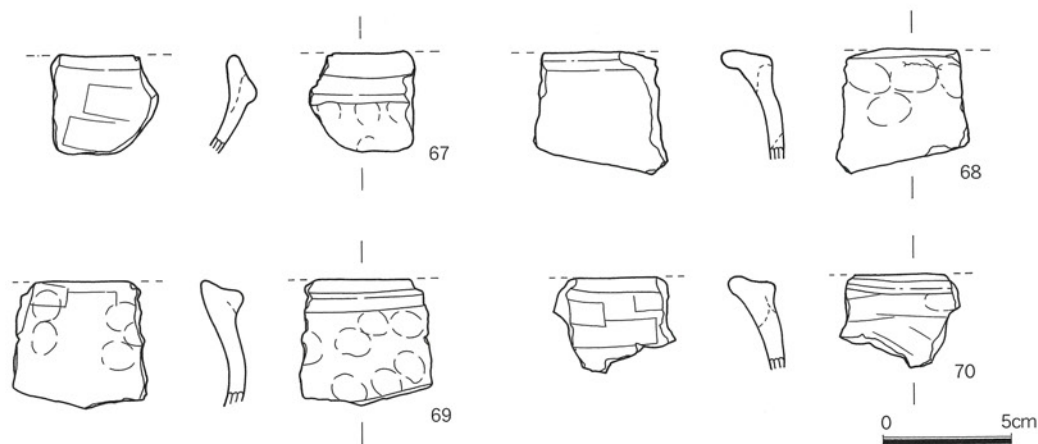
71～77は、土師質土器の内耳の釜である。口縁部は体部上位より内傾し、口縁部上端に退化した鏝をめぐらし、一部耳状に突出させ内側に円孔を施す。

78は、釜の底部である。内面はハケ、外面は格子目タタキをとどめる。79～83は、茶釜である。内彎した体部に短く直立した口縁部がつき、口縁端部は方形におさめる。79は、体部最張部に把手の痕跡があり、内側に円孔を施す。口縁部について81は内傾し、83はわずかに外傾している。

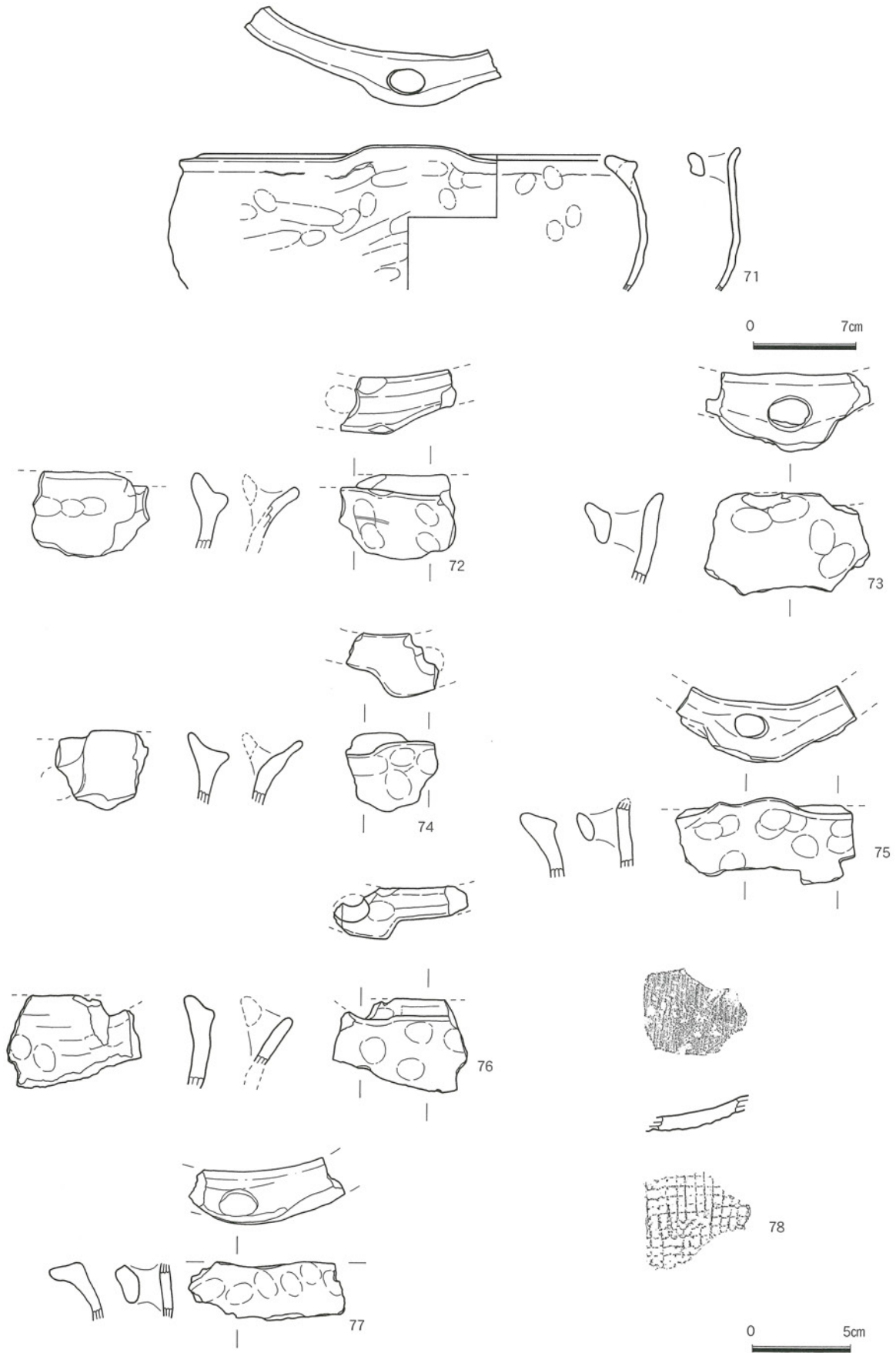
84～91は、釜あるいは鍋の脚である。身部はヘラケズリとナデにより仕上げられている。90・91は、基部が屈曲し周辺には貼り付けによるユビオサエが顕著である。

土師質土器・播鉢・捏鉢・鉢（第76・77図）

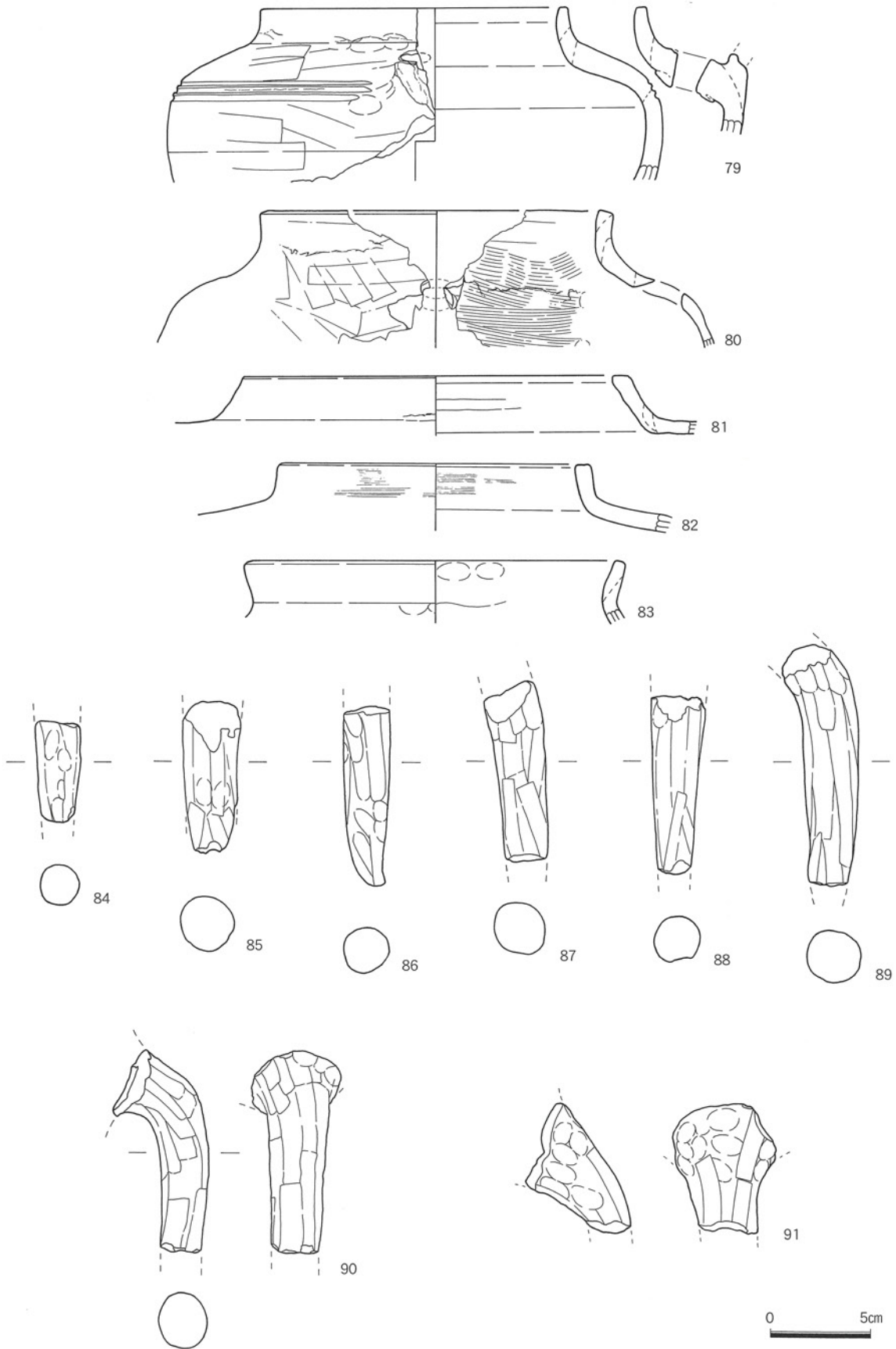
92～113は、土師質土器の播鉢である。92・95・96・101は、口縁部が内傾する。92は、口縁端部が内



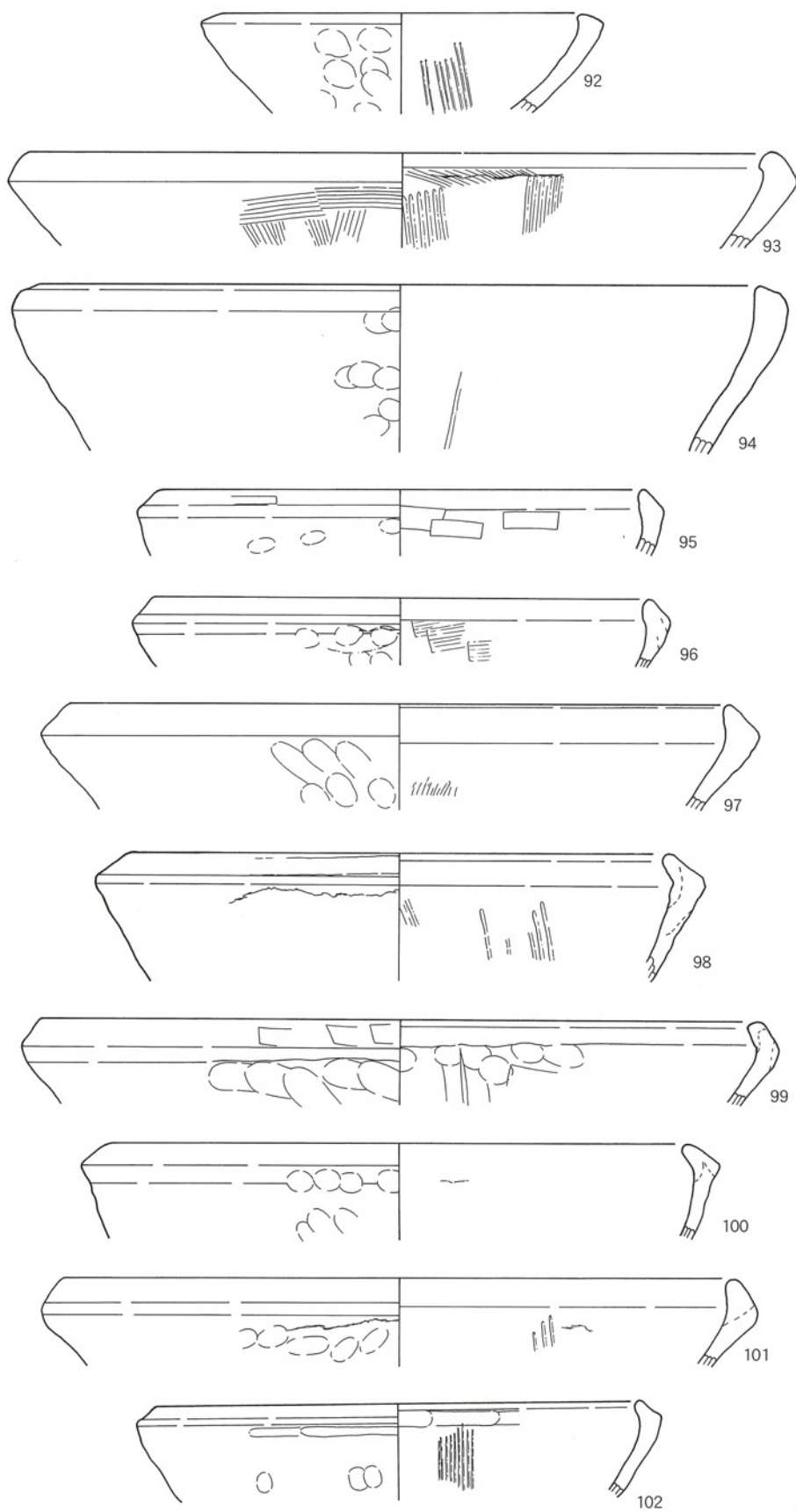
第73図 包含層出土遺物実測図(5)



第74図 包含層出土遺物実測図(6)

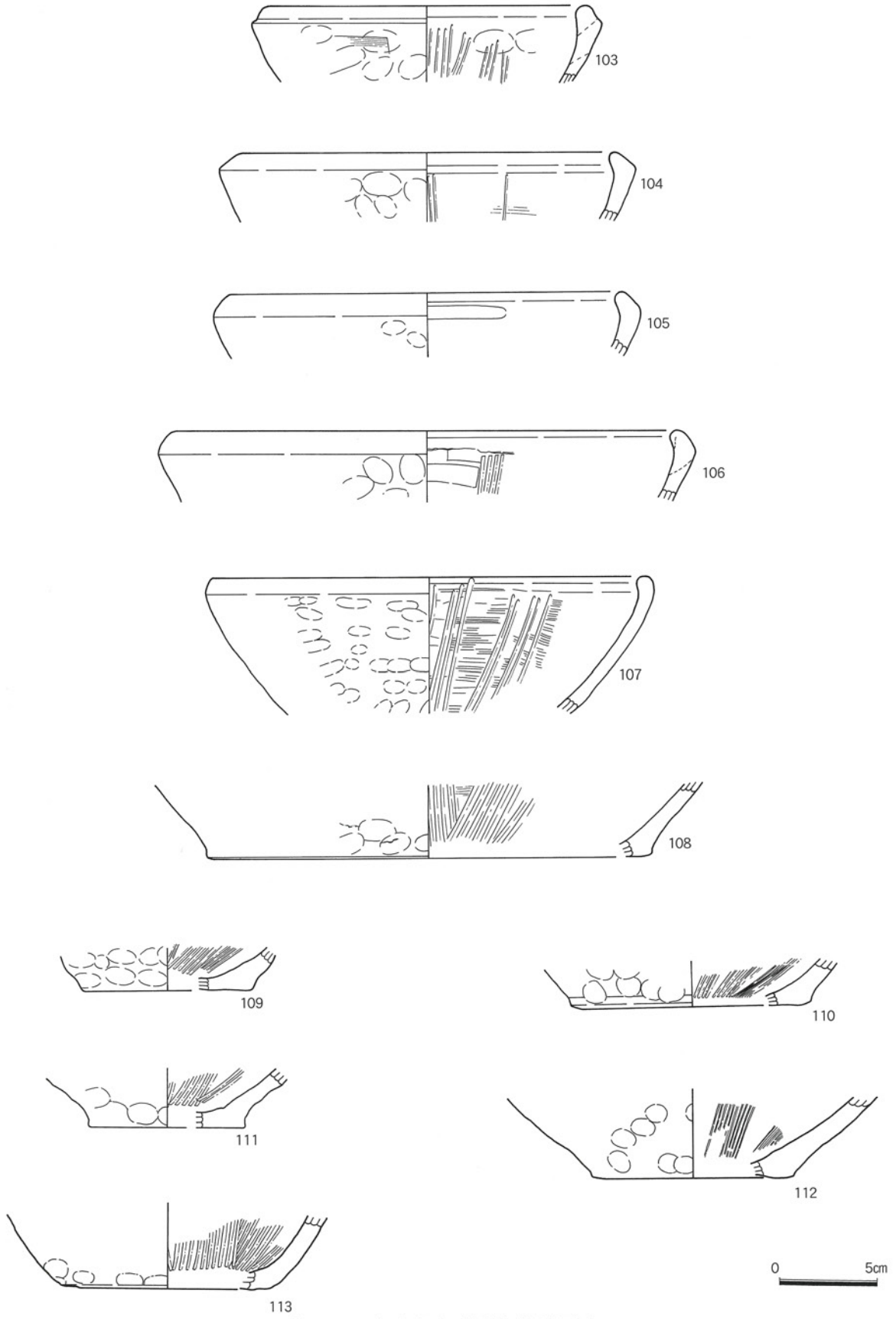


第75図 包含層出土遺物実測図(7)



0 5cm

第76図 包含層出土遺物実測図(8)



第77图 包含層出土遺物実測図(9)

方向に拡張する。94は、口縁部が上方に立ち上がる。93・98・99・107は、口縁部は内傾し、口縁部内面に段を有する。97～100・102・104～106は、口縁部が体部との境で内方向に「く」の字状に屈曲する。いずれも摺り目上端は下位である。107は、内面にハケ後摺り目を施している。108～113は、播鉢の底部である。108～112は、体部外面の強いヨコナデにより底部が外方向に突出する。

114は、土師質土器の捏鉢である。口径21.7cmを測る。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は、内上方につまみ出し口縁端部丸くおさめる。内面板ナデ、外面ユビオサエ後ナデ調整を施す。

115は、土師質土器の鉢である。口径26.6cmを測る。口縁部は内方向へ屈曲し肥厚する。口縁端部は丸くおさめる。内面は板状工具によるナデ、外面はユビオサエ後板状工具によるナデ調整である。

輸入陶磁器（第78図）

116は、天目茶碗である。口径13.6cmで内外面黒褐色の鉄釉を施釉し体部下位は無釉である。胎土は灰黄色である。輸入陶器の可能性はある。117～123は、青磁の碗である。117は、口径12.6cmを測り、外面蓮弁文である。119は、全体に釉が厚く、高台が高い。内底面は釉を剥ぎ、高台は内面まで釉がかかっている。焼成は悪い。120・122は、端反碗である。120の外面は蓮弁文であるが不明瞭である。122は、内外面に陰刻の文様がある。121は、釉が厚く、高台部畳付に釉を施す。123は、内面に沈線文が2条、外面に蓮弁文が認められる。

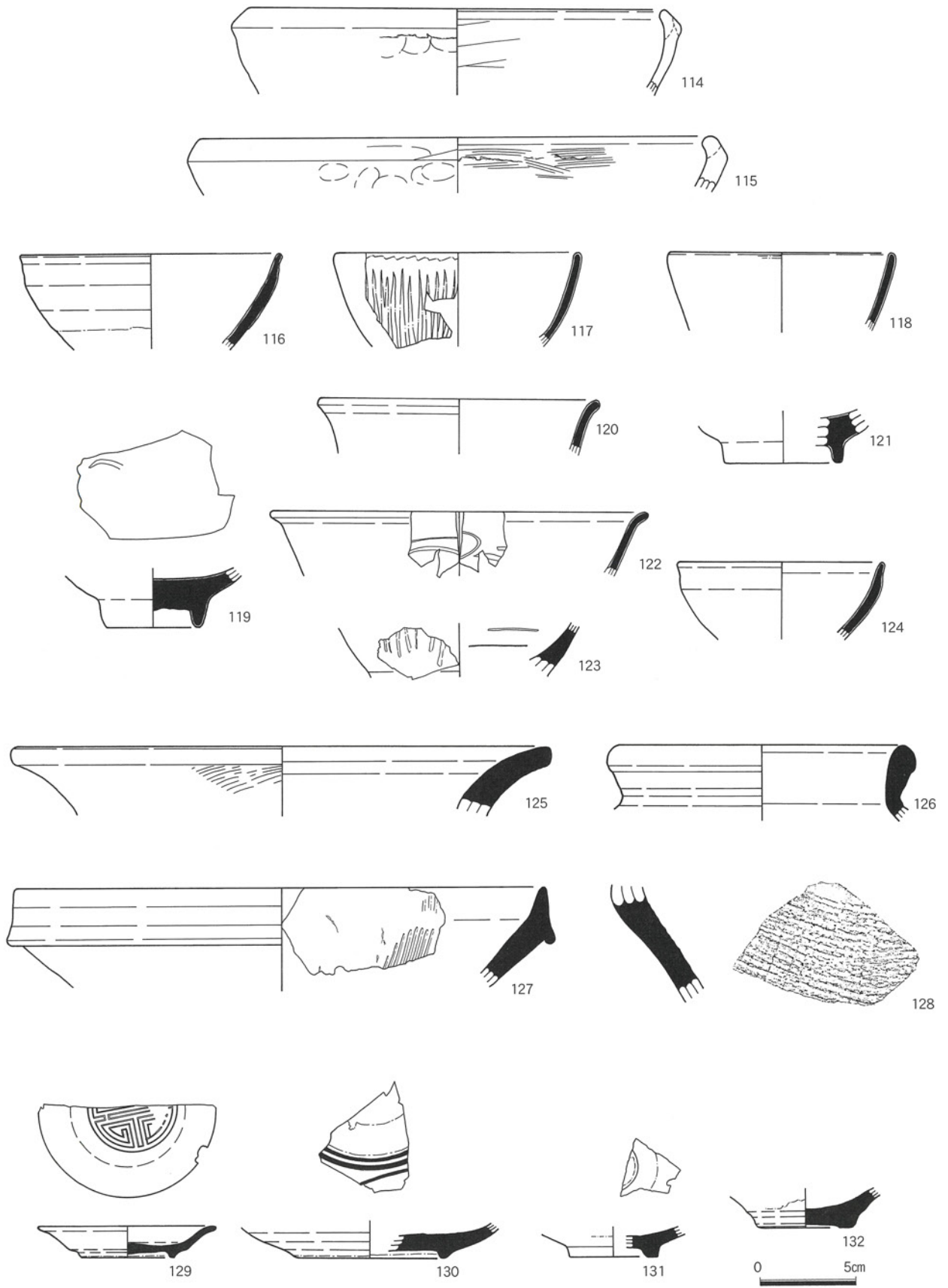
国産陶器（第78図）

124は、瀬戸美濃系の天目茶碗で、口径10.6cmを測る。内外面にぶい褐色の鉄釉を施す。胎土は黄味をおびた灰白色で焼成はあまい。125は、備前陶器の甕である。内外面ロクロナデ調整で、外面にタタキの痕が認められる。126は、備前焼の壺である。内外面とも褐灰色。胎土断面芯部は、にぶい赤褐色、表面部は褐灰色を呈する。16世紀後半のものである。127は、備前焼締陶器の播鉢である。胎土は断面、表面とも灰色である。間壁忠彦編『備前編年図表』の室町Ⅳ期の播鉢である。128は、須恵器の甕である。内面はナデ、外面は格子目タタキ調整である。

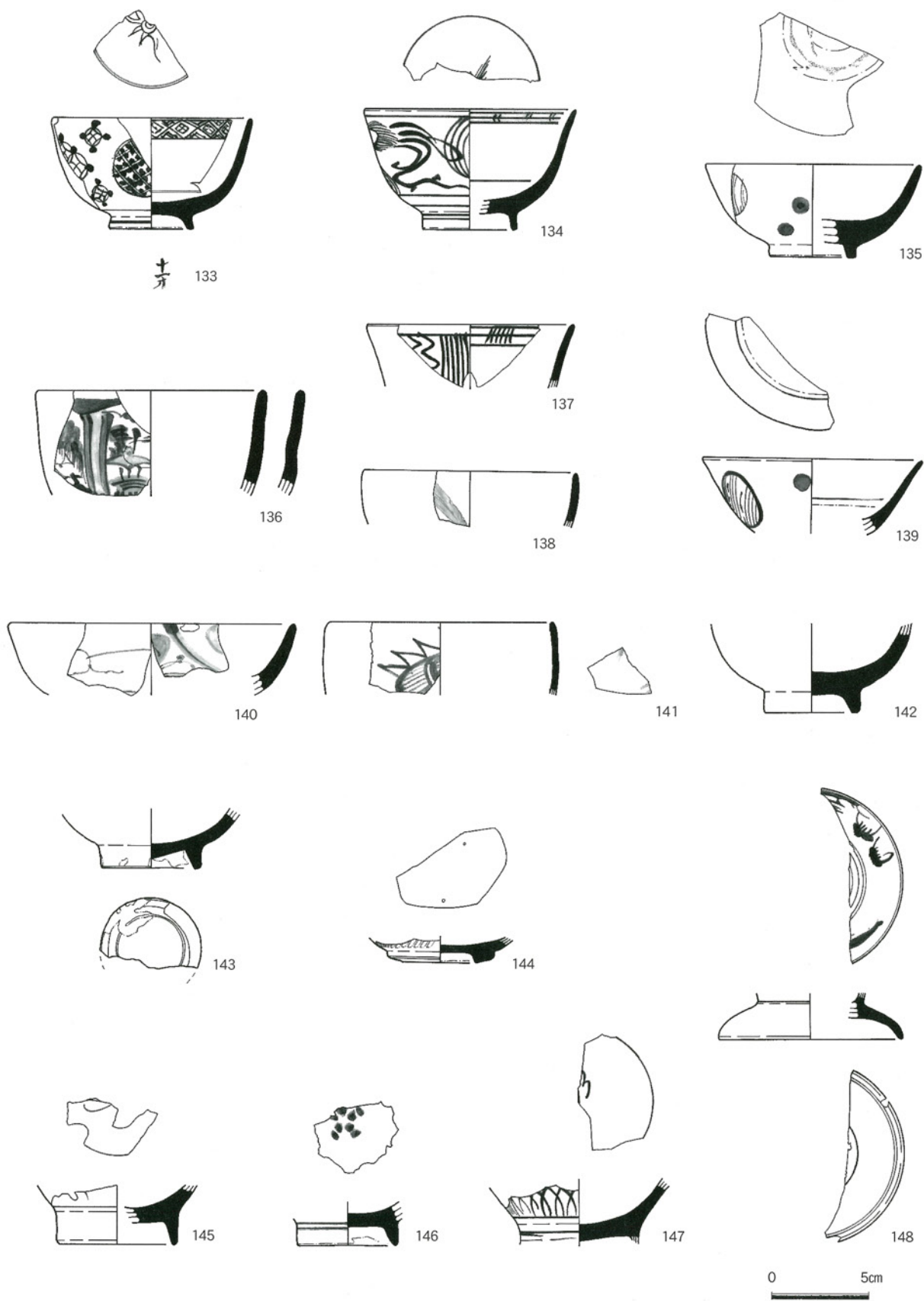
近世の遺物

国産の陶磁器（第78～81図）

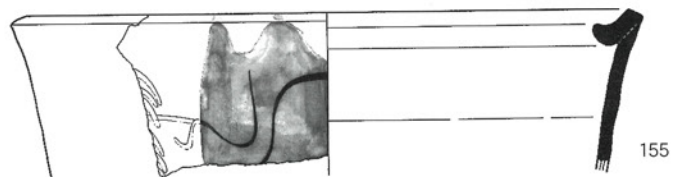
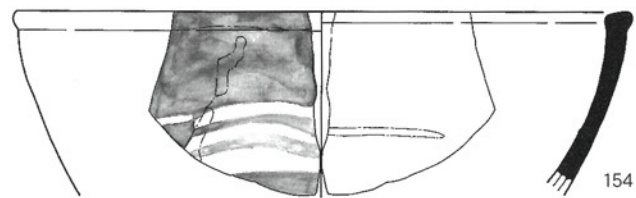
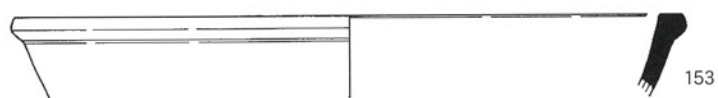
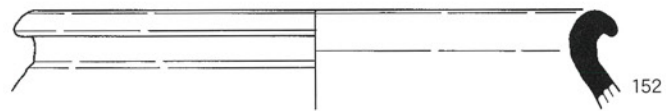
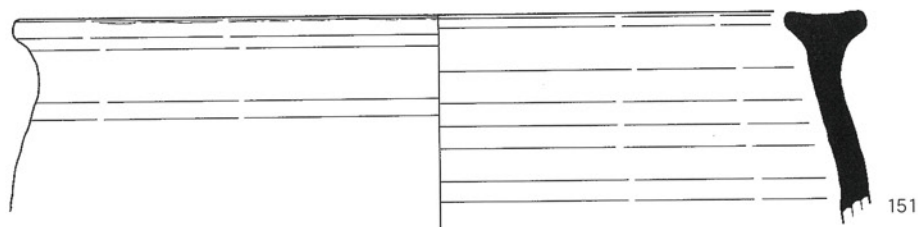
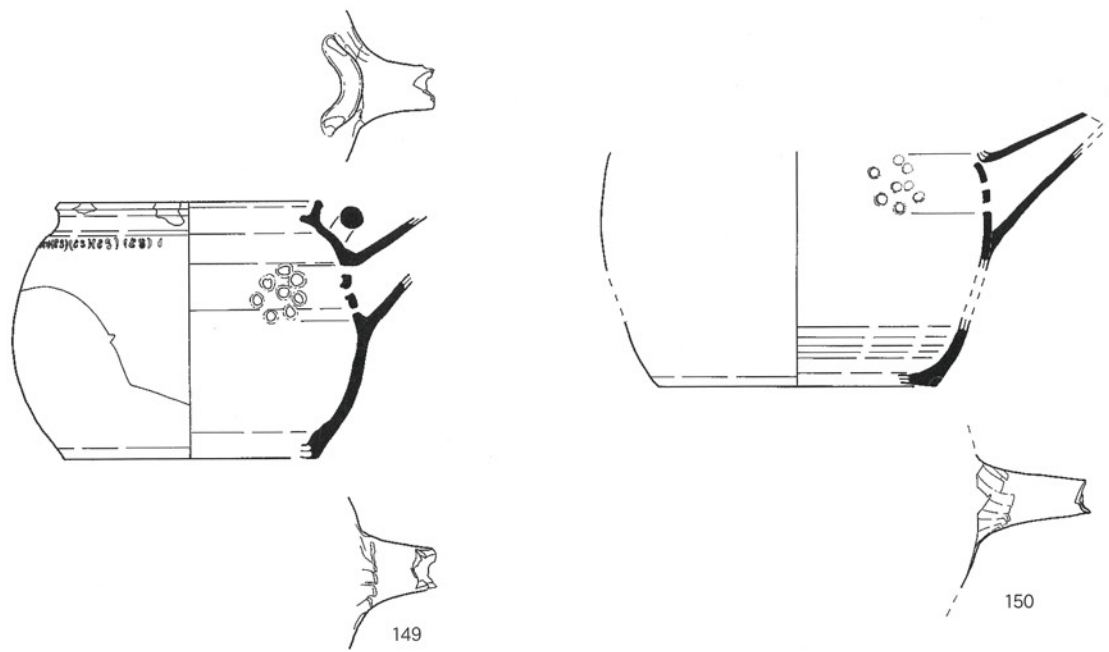
129は、瀬戸美濃系の白磁寿文皿である。130は、肥前系の染付皿である。見込蛇ノ目釉剥ぎで畳付は無釉である。131は、肥前系の陶器皿である。内面に銅緑釉をかける。見込蛇ノ目釉剥ぎである。132は、肥前系陶器の皿である。見込に砂目痕があり、高台以外の内外面に灰釉をかける。畳付に回転糸切りの痕がある。133は、肥前系の染付け碗である。見込に捻子文、外面に丸文を染め付ける。高台は撥高台で、褐色の焼継師の印「ナ一オ」あるいは「十一オ」がある。134は、肥前系の染付端反碗である。外面は流水文、見込は山水文である。胎土は、灰色に近い灰白色である。135は、肥前系染付碗である。畳付に砂が付着し、見込は蛇ノ目釉剥ぎし、透明なアルミナ土を塗り、環状の窯道具痕がある。136は、肥前系の陶胎染付碗である。体部の一ヶ所を押圧している。外面は楼閣山水文である。137は、肥前系の染付碗である。外面はよろけ縞模様である。138は、京信楽系の灰釉陶器碗である。胎土灰白色の陶器質である。緑色と金色の笹文を上絵付けしている。139は、肥前系の染付鉢である。見込は蛇ノ目釉剥ぎし、淡黄色を呈するアルミナ土を塗っている。外面は丸文である。140は、肥前系の染付皿である。



第78图 包含層出土遺物実測図(10)



第79図 包含層出土遺物実測図(1)



0 5cm

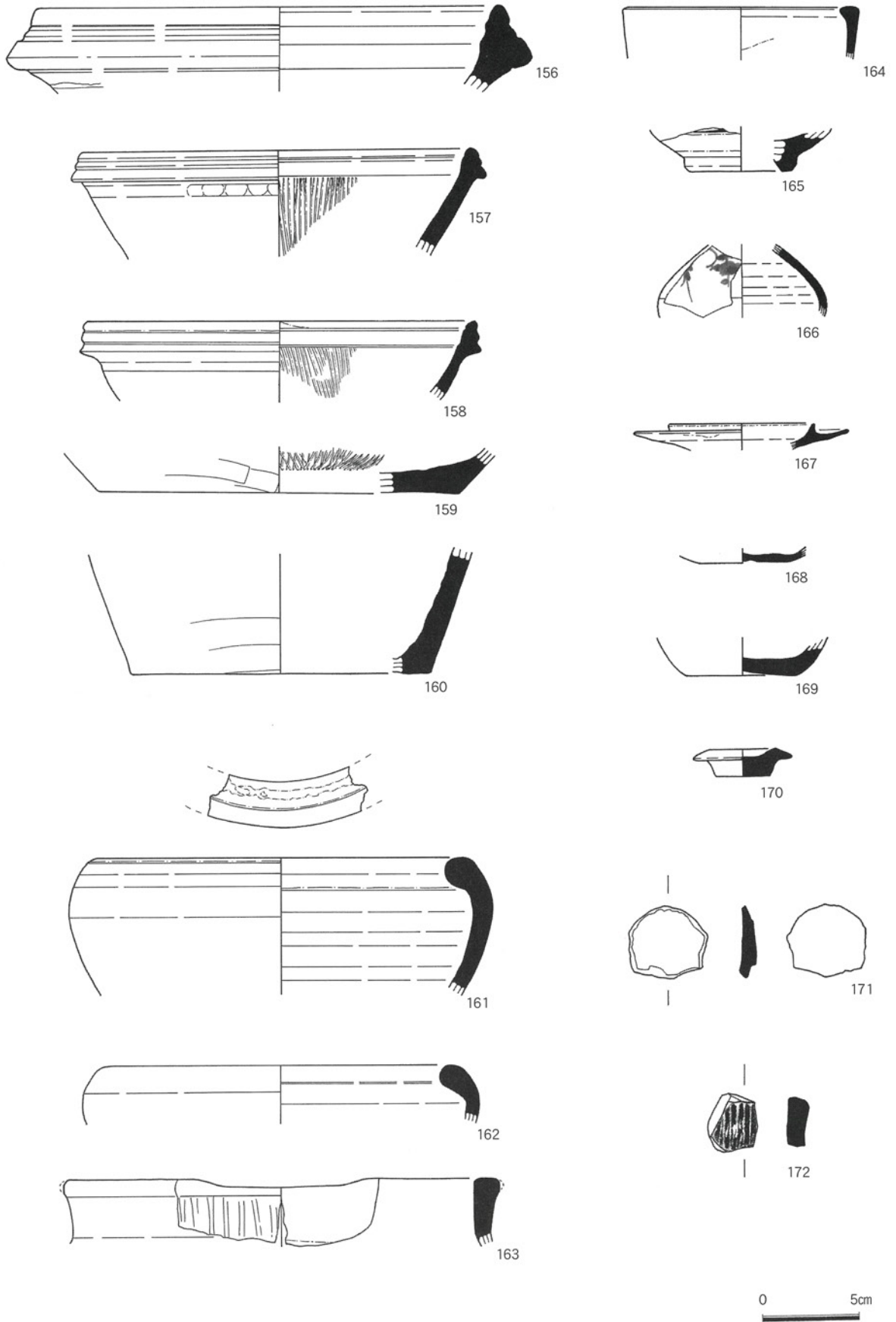
0 7cm

第80図 包含層出土遺物実測図(12)

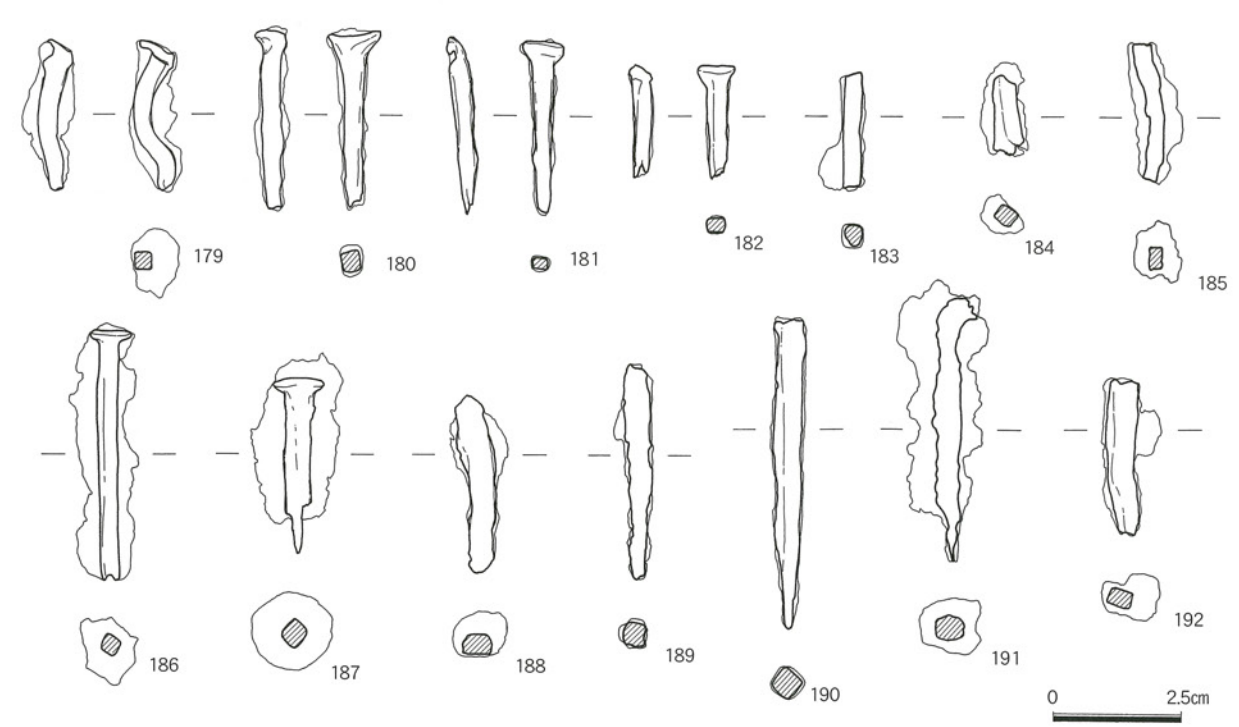
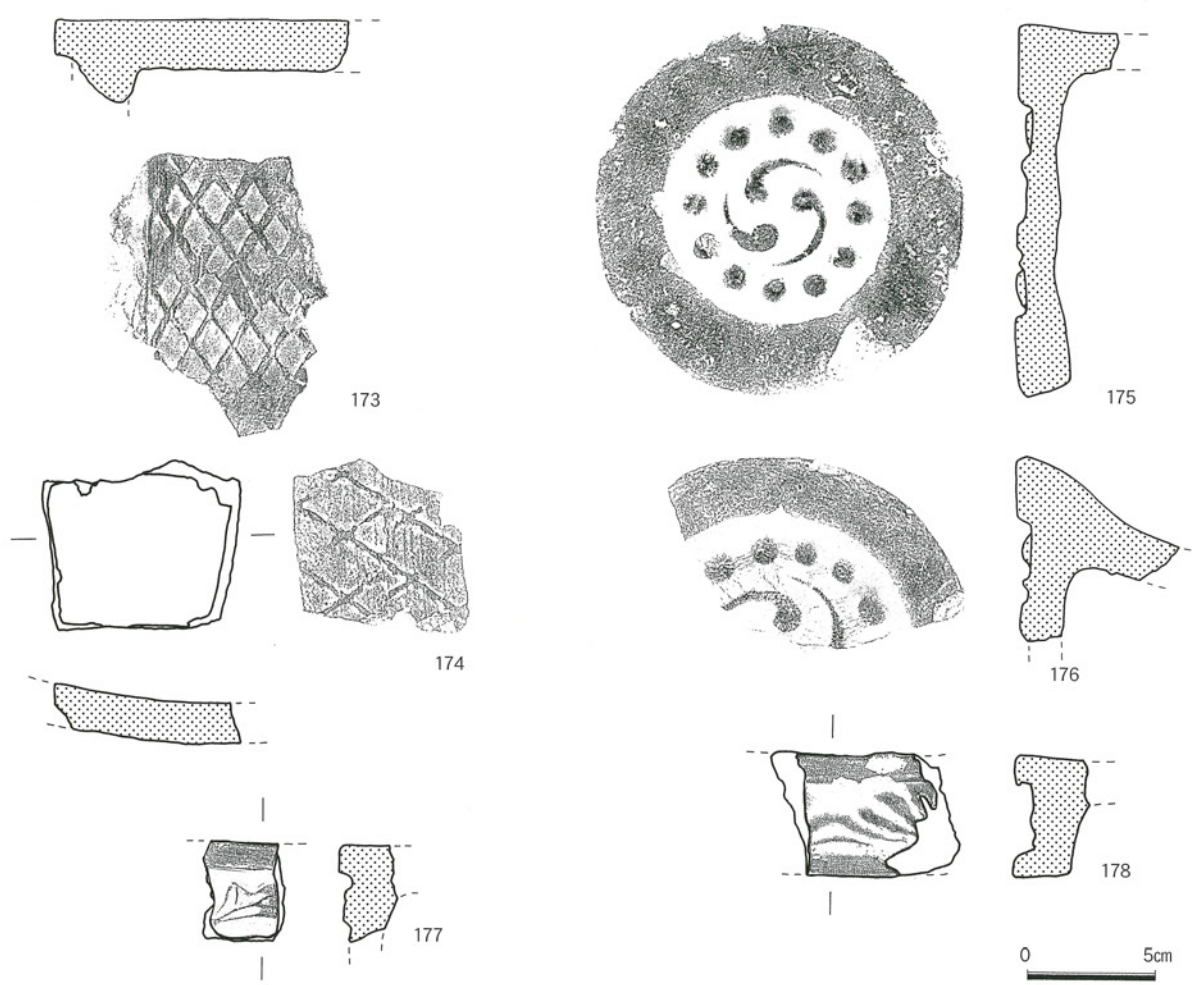
外面は唐草文である。141は、京信楽系の灰釉陶器碗である。赤で海老、緑でしめ縄を上絵付けしている。胎土は灰白色の陶器質である。142は、肥前系の呉器手碗である。畳付はわずかに砂が付着している。143は、肥前系の青磁碗である。高台は無釉で畳付に砂が付着している。また、見込に溶着痕が認められる。いわゆる初期伊万里である。144は、京信楽系の陶器の碗である。見込にハリピン痕があり、外面は飛び鉋装飾を施し鉄釉をかける。内面は灰釉をかける。145は、肥前系の広東碗である。146は、瀬戸美濃系の太白手広東碗である。見込は五弁花文で、胎土はにぶい黄橙である。147は、肥前系の染付広東碗である。外面は網目文、胎土は灰色に近い灰白色である。148は、肥前系の染付蓋である。撥高台の碗に伴う。149・150は、産地不明の焼締陶器の土瓶である。149は、口径10.2cmを測る。胎土は、断面・表面ともに明赤褐色で焼成はあまり硬くない。注ぎ口の貼り付け部を幅5mmぐらいのヘラで押さえており、肩部上位に陰刻文を押印する。穴は8個で不整である。煤は、内面が顕著であり、外面にも一部付着している。150は、底径10.8cmを測り、胎土は暗赤褐色で149より焼成が硬い。それ以外は共通しているが、内面に煤は付着していない。外面は一部煤が付着している。151は、大谷焼陶器の甕である。内外面に鉄釉を施し、口縁端部上面は無釉である。胎土はにぶい赤橙色で黒色・白色粒を含む。152は、瀬戸美濃系の陶器甕である。内外面鉄釉をかける。153は、肥前系陶器片口である。内外面に鉄釉を施釉する。口縁内端部に積み重ね痕がある。154は、肥前系の鉢である。内外面鉄釉と白泥の刷毛目装飾を施す。口縁上端部は無釉である。内面に環状の積み重ね痕がある。155は、瀬戸美濃系の陶器水甕である。外面に流水文を陰刻し、灰釉地に緑釉を流し掛けする。156は、備前の播鉢である。断面・表面ともに胎土は灰赤色である。口縁部内側の段差は弱く、外面の顎は張り出している。内面の摺り目上端が下位である。顎部下に積み重ね痕がある。157は、堺明石系の播鉢である。口縁部内面に段差がなく、外面の顎は張り出しているが積み重ね痕はない。内面の摺り目は緻密で、口縁帯と内面に塗り土を施す。158は、備前焼の播鉢である。口縁部内面の段差は退化し、外面の顎が強く張り出し、積み重ね痕がある。摺り目は細密である。口縁帯に塗り土を施している。159は、堺明石系の播鉢である。底部外面に積み重ね痕がある。胎土はにぶい赤橙色である。160は、備前の瓶類である。胎土は暗赤褐色で内面に米粒大の工具痕が無数にある。161は、大谷焼の陶器火鉢である。外面に褐色の鉄釉をかける。口縁上端部に連続する敲打痕が顕著である。162は、備前焼の鉢である。断面・表面ともに灰褐色に焼き締めている。外面に火櫛が見られる。163は、瀬戸美濃系の火鉢である。いわゆる瓶掛けである。口縁部内外面に緑釉を施釉する。敲打痕が非常に顕著であり、口縁部が磨耗している。164は、肥前系青磁の香炉である。内面の露胎部が橙色を呈する。165は、肥前系の陶胎染付の香炉である。内面無釉で見込に砂目がある。166は、肥前系の染付油壺である。内面に黒色物質が付着している。167は、京信楽系の灰釉陶器の灯明受け皿である。仕切りの端部は無釉である。168は、備前の灯明皿である。胎土は赤褐色で焼成はあまい。内面は塗り土を施している。外面は回転糸切り後同心円削りを施す。169は、産地不明の焼締陶器の極小甕である。断面は灰白色で微細な黒粒を含む。表面は暗赤褐色を呈する。170は、産地不明の土瓶の蓋である。胎土は暗褐色で精良で硬い。底部は右回転糸切り離しである。外面に鉄釉をかける。内面は黒色を呈する。171・172は、陶器加工円盤である。171は、大谷焼の灯明具の上皿を転用している。172は、堺明石焼の播鉢からの転用である。

瓦 (第82図)

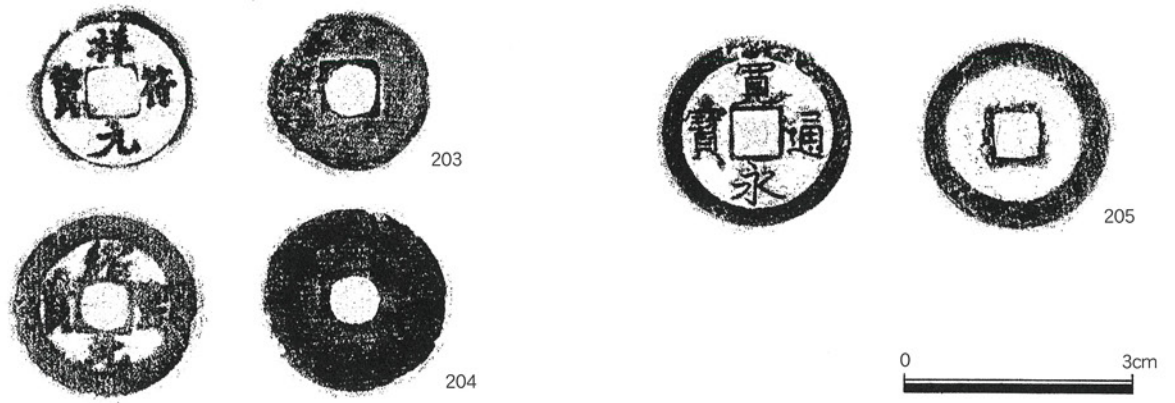
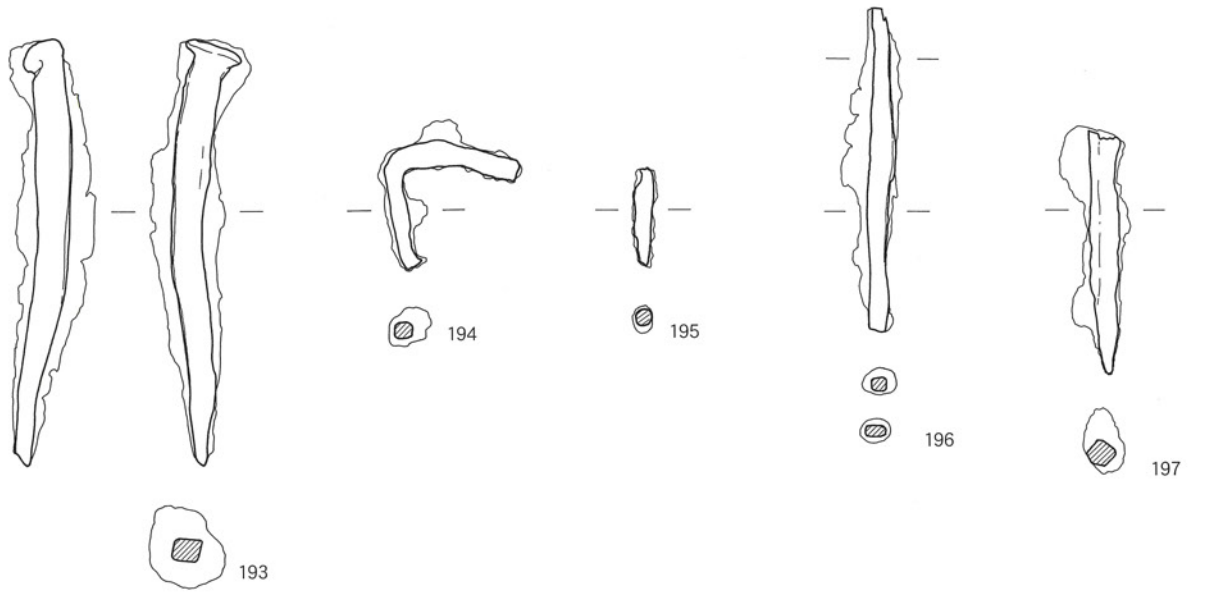
173・174は、軒平瓦である。ともに凸面に格子目タタキを施し、土師質である。175・176は、軒丸瓦



第81图 包含層出土遺物実測図(13)



第82图 包含層出土遺物実測図(14)



第83図 包含層出土遺物実測図(15)

である。175は、瓦当面径13.8cm、瓦当厚1.7cm、外縁幅2.8cm、外縁高0.6cmを測る。左巻き三ツ巴に12の連珠を配している。176は、瓦当面径16.0cm、瓦当厚1.3cm、外縁幅2.3cm、外縁高0.6cmを測る。右巻き三ツ巴に13前後の連珠を配している。瓦質で暗灰色を呈する。177・178は、均整唐草文軒平瓦である。177は、外縁幅1.1cm、外縁高0.5cmを測る。178は、瓦当厚2.0cm、外縁幅1.1cm、外縁高0.9cmを測る。175・177・178は、ともに瓦質で灰色を呈する。

金属製品 (第82・83図)

179～202は、金属製品の釘である。

銭貨 (第83図)

203は、北宋銭の祥符元寶で縁が加工されている。初鑄年は北宋1009年である。204は、北宋銭の紹聖元寶である。初鑄年は、北宋1094年である。205は、寛永通寶である。

(3) まとめ

花園遺跡は、阿讃山脈裾部に位置し、吉野川の支流である河内谷川によって形成された扇状地の西側に立地する。標高110m付近の北東から南東に傾斜して下る緩傾斜面上にある遺跡である。そのため、ここは大雨などにより土石流が発生しやすい場所で、近年では昭和50年代に一度発生して家が流されている。調査地の現状は、みかん畑・桑畑であり、3段の段々畑になっている。そのため段々畑に伴う削平や石垣の構築などによる盛り土、あるいは大雨などによる土砂崩れなどにより遺構の遺存状況は良好とはいえない。特にC区は、A・B区で見られた上層が剥ぎ取られ、表土直下に地山がみられた。

花園遺跡は、分布調査で弥生土器片や中世以前の紡錘車、試掘調査でサヌカイト製の石鎌や中世の釜の脚の一部などの遺物が採取、検出されたが、また近くの花園中365番地より中世の花園窯跡の存在が確認されたことなどから、それに関係する遺構の存在や中世以前の遺構の存在などが予想された。しかし、今回の発掘調査では、掘立柱建物跡3棟、炭窯跡1基、炉跡2基、焼土墓1基、暗渠3条、自然流路1条、土坑1基、溝4条、柱穴280基、不明遺構29基などが検出されたが、そのほとんどが室町時代後半のものと考えられ、花園窯跡との関連の遺構も検出されなかった。また、検出された3棟の掘立柱建物跡も規模が小さく、B区に2棟、C区に1棟と散発的に存在しているため集落跡とは考えにくく、B区2棟の掘立柱建物跡の近くで検出された炭窯跡の遺構と関連があると考えた方が自然である。遺物は表土からは近世の陶磁器や銅銭などが、遺構面や遺構直上の遺物包含層からは、おもに土師質土器の鍋、釜、搦鉢、捏鉢など煮沸具や調理具などが多く出土した。また、須恵器の土器片や1009年初現の『祥符元寶』や1094年初現の『紹聖元寶』の北宋銭も出土した。したがって、遺跡の性格としては、近くに花園窯跡が存在したこと、炭窯跡の遺構が検出されたこと、出土遺物等を考え合わせて集落跡というよりは、就労の場として臨時的な生活が営まれていた室町時代後半の遺跡と考えられる。

第1表 花園遺跡検出遺構一覧表 掘立柱建物跡

遺構名	地区	規模				棟方向	出土遺物	時期	備考
		間数	梁間(m)	桁行(m)	面積(m ²)				
SA1001	B区	1×2	2.12	3.68	7.80	N-69°-W			
SA1002	B区	1×1	2.55	2.66	6.78	N-60°-W			
SA1003	C区	1×2	1.90	4.25	8.08	N-60°-W			

第2表 花園遺跡掘立柱建物柱穴観察表

掘立柱建物	柱穴番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	土色・土質	備考
SA1001 (B区)	P1	0.24	0.22	0.15	1. にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～3cm大の礫を含む。
	P2	0.22	0.20	0.19	1. にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～1cm大の礫を含む。
	P3	0.27	0.20	0.16	1. にぶい黄褐色砂質土	0.2cm～1cm大の礫を含む。
	P4	0.29	0.26	0.27	1. にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。
	P5	0.29	0.20	0.21	1. にぶい黄褐色砂質土	砂性強く、0.2cm～3cm大の礫を少量含む。
	P6	0.24	0.21	0.15	1. にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。
SA1002 (B区)	P1	0.17	0.17	0.15	1. にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。
	P2	0.49	0.44	0.21	1. にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を少量含む。
	P3	0.24	0.24	0.28	1. にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～1cm大の礫を少量含む。
	P4	0.20	0.20	0.13	1. にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～1cm大の礫を少量含む。
SA1003 (C区)	P1	0.30	0.29	0.22	1. にぶい黄褐色砂質土	0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含み、2cm～3cm大の礫を少量含む。
	P2	0.23	0.23	0.22	1. にぶい黄褐色砂質土	0.2cm～0.5cm大の礫を多量に含み、2cm～3cm大の礫を少量含む。
	P3	0.30	0.28	0.18	1. にぶい黄褐色砂質土	粘性やや有り、0.2cm～0.5cm大の礫を多量、2cm～3cm大の礫および炭化物を少量含む。
	P4	0.36	0.28	0.14	1. にぶい黄褐色砂質土	0.2cm～1cm大の礫を含む。
	P5	0.33	0.27	0.15	1. 褐色砂質土	0.2cm～1cm大の礫を多量、5cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。
	P6	0.32	0.30	0.12	1. 褐色砂質土	0.2cm～1cm大の礫を多量、5cm～10cm大の礫および炭化物を少量含む。

第3表 花園遺跡 A区 主な検出遺構一覧表

遺構名	出土地点	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深度(cm)	主軸方向	年代	出土遺物
SJ1001	Q-8	—	280	160	57	北西-南東	近世	磁器碗・陶器鉢・瓦・土師質土器の釜・皿の細片・石鏃
SJ1002	Q-8	—	840	170	32	東西	近世	
SJ1003	P-11	—	550	170	50	南東-南西	近世	土師質土器の釜, 鍋, 器種不明の土器片
SR1001	R-9	—	1050	160	22	北西-南東		
ST1001	P-10	不整半円形	100	80	21	N-58°-W	室町	土師質土器の小皿
SX1001	S-12	不整楕円形	84	52	21	N-8°-W	室町	土師質土器片
SX1002	S-11	隅丸長方形	103	70	20	N-65°-W	室町	土師質土器皿の細片
SX1003	S-11	不整隅丸長方形	114	72	19	N-25°-E		
SX1004	R-11	不整楕円形	132	60	25	N-7°-W	室町	土師質土器皿の細片
SX1006	R-11	不整楕円形	88	52	16	N-42°-E		
SX1008	S-11, R-11	不整楕円形	90	22	15	N-83°-W		
SX1007	S-10, S-11	不整形	95	74	16	N-52°-E		
SX1013	P-10	不整楕円形	105	60	23	N-72°-E	室町	土師質土器の器種不明の細片
SX1009	R-10, R-11 Q-10, Q-11	不整円形	455	440	18	N-29°-E	室町	土師質土器の播鉢・器種不明の細片
SX1010	S-9, R-9	円形	84	78	13	N-85°-W		
SX1011	R-9, Q-9 R-10	不整楕円形	140	85	13	N-54°-E		

第4表 花園遺跡 B区 主な検出遺構一覧表

遺構名	出土地点	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	主軸方向	年代	出土遺物
SH1001	M.N-8	不整形	86	77	29	N-83°-W	室町	土師質土器の鍋・釜・皿の細片
SH1002	M-8	不整形	92	36	9	N-13°-E	室町	土師質土器の搗鉢・器種不明の土器片
SO1001	K.L-7	不整隅丸長方形	590	195	40	N-5°-E	室町	木炭、土師質土器の皿・鍋・釜
SK1001	N-10	不整楕円形	95	85	34	N-67°-E	室町	土師質土器の鍋・搗鉢・甕の細片
SX1014	O-7	不整隅丸三角形	100	70	10	N-42°-E		
SX1015	N-7	不整楕円形	88	70	17	N-74°-W	室町	土師質土器の皿・器種不明の細片
SX1016	N-8	隅丸三日月状	—	幅75	20	—		
SX1017	J-4	不整楕円形	85	74	20	N-48°-W		
SX1018	J-5	不整隅丸長方形	87	58	14	N-70°-E		
SX1019	J-7	不整楕円形	120	90	15	N-78°-W		
SX1020	J-8	不整円形	95	85	19	N-7°-W		
SX1021	J-9	不整隅丸長方形	86	66	16	N-12°-E		
SX1022	K-8	不整形	124	48	15	N-57°-W		
SX1023	M-11	不整円形	92	85	10	N-64°-W		

第5表 花園遺跡 C区 主な検出遺構一覧表

遺構名	出土地点	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深度 (cm)	主軸方向	年代	出土遺物
SD1001	G-9	—	280	30	10	東西		
SD1002	G-10	—	290	26	8	東西		
SD1003	G-10.11	—	485	35	7	東西		
SD1004	K-10.11 J-10	—	1600	125	10	—		
SX1024	E-2	不整楕円形	95	45	20	N-65°-W		
SX1025	F-6	不整楕円形	185	66	9	N-64°-E		
SX1026	G-10	不整隅丸長方形	598	128	17	N-11°-W		
SX1027	G-11	不整楕円形	136	103	23	N-60°-E		
SX1028	H-10	楕円形	120	92	8	N-39°-W		
SX1029	K-11	不整隅丸長方形	166	90	28	N-48°-W	近世	近世の陶器

第6表 花園遺跡出土遺物観察表（土器）

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	SJ1001	磁器 碗	底径4.0 高台高0.8		畳付のみ無釉で砂付着。見込みに「寿」の字。外面によるけ縞の文様を染め付ける。	緻密	灰白色	肥前系
2	SJ1001	磁器 碗	底径4.4		見込釉剥ぎ。外面に丸文が描かれる。	緻密	灰白色	肥前系
3	SJ1001	陶器 片口(鉢)	口径22.0		内外面鉄釉を施釉。		にぶい赤褐色	大谷焼 4と同一個 体
4	SJ1001	陶器 片口(鉢)	底径8.6 高台高1.1		高台および底面は無釉。内外面鉄釉を施釉。		にぶい赤褐色	大谷焼 3と同一個 体
5	SJ1001	土師質土器 碗	底径4.6	内面ナデ。外面ナデ。底部静止糸切り。	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり底部と体部の境は外方向に突出する。	焼成は良好。精良。	橙色	
6	SJ1001	土師質土器 釜	口径26.0 鐔径30.0	内面コビオサエ後板状工具によるナデ。外面コビオサエ後ナデ、接合痕。	体部直立。口縁部やや内傾し、口縁端部尖りぎみにおさめる。口縁部下方に断面楕円形の長めの鐔が水平につく。	焼成は良好。1mm~4mm大の石英を含む。	にぶい黄褐色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
7	SJ1001	土師質土器 釜	口径23.4	内面ナデ、ユビ オサエ、接合痕。 外面ナデ、板ナ デ、ユビオサエ。	体部直立。口縁部は体部との境で内 方向へ屈曲し肥厚、口縁端部丸くお さめる。退化した鐳が口縁部と体部 との境に突出したようにつく。	焼成は良好。 1mm～3mmの砂 粒を少し含む。	内面 にぶい黄 橙色 外面 浅黄橙色	
8	SJ1001	土師質土器 茶釜	口径17.4	内面ユビオサエ 後ナデ。外面ユ ビオサエ後ナデ。	口縁部は直立し、端部は丸くおさめ る。	焼成は良好。 4mm大の砂粒 を含む。	内面 橙色 外面 明黄褐色	
11	SJ1003	土師質土器 鍋	—	内面ナデ、板状 工具によるナデ。 外面ナデ、ユビ オサエ後ナデ。	口縁部は「く」の字状に大きく外上 方に屈曲し、口縁端部は尖りぎみに おさめる。	焼成は良好。 3mm大の砂粒 を含む。	橙色	
12	SJ1003	土師質土器 釜	口径33.2 鐳径37.4	内面ユビオサエ 後板状工具によ るナデ。外面ユ ビオサエ後板状 工具によるナデ。	体部上位より口縁部にかけて内傾し、 口縁端部丸くおさめる。断面楕円形 の長めの鐳が口縁部下方に水平につ く。	焼成は良好。 1mm～3.8mmの 砂粒をやや多 く含む。	内面 にぶい橙 色 外面 にぶい黄 橙色	内面に黒斑。
13	SP1019	土師質土器 皿	底径5.3	内外面ヨコナデ。	体部は底部から外上方に直線的に立 ち上がる。体部外面の強いヨコナデ により底部との境に段を有する。	焼成は良好。 精良。	浅黄橙色	
14	ST1001	土師質土器 皿	口径5.7 器高2.3 底径4.7	内外面ナデ。底 部静止糸切り。	体部は、底部より外上方に直線的に 立ち上がる。口縁端部は尖りぎみに おさめる。	焼成は良好。 精良。	橙色	
15	ST1001	土師質土器 皿	口径11.1 器高2.4 底径4.8	内外面ヨコナデ。 底部静止糸切り。	体部は、底部より直線的に外上方に 立ち上がり、口縁端部は丸くおさめ る。体部外面の強いヨコナデにより 底部との境に段を有する。	焼成は良好。 精良。	浅黄橙色	
16	SH1001	土師質土器 播鉢	口径30.8	内面ナデ。外面 ナデ、ユビオサ エ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は肥厚し、内方へ屈曲。端部は丸く おさめる。体部内面は（3条/cm） の櫛描条線。	焼成は良好。 4mm大の砂粒 を多く含む。	内面 灰白色 外面 浅黄橙色	
17	SO1001	土師質土器 釜	—	内面板ナデ、接 合痕。外面ナデ、 ユビオサエ。	口縁部直立し、口縁端部丸くおさめ る。鐳は退化して突帯状となる。	焼成は良好。 2mm大の砂粒 を少し含む。	内面 橙色 外面 にぶい赤 褐色	内外面に黒 斑。
18	SP1140	土師質土器 釜	—	内面板状工具に よるナデ。外面 ユビオサエ、ナ デ。	口縁部は内傾し、口縁端部やや尖り ぎみにおさめる。断面三角形の短い 鐳が体部と口縁部との境に突帯状に つく。	焼成は良好。 2mm～3.5mm大 の砂粒を少し 含む。	浅黄橙色	
19	SP1161	土師質土器 茶釜	口径13.9 器高16.4 鐳径28.0	内面ナデ、ユビ オサエ。外面ナ デ、板状工具に よるナデ。	球形の体部にやや外傾ぎみの直立す る短い口縁がつく。口縁端部は方形 におさめる。体部中央、口縁部と平 行に長い鐳がつく。鐳端部は方形に 仕上げる。体部最張部に板状の把手 を貼り付け、把手の基部内側に円孔 を施す。	焼成は良好。 3.5mm大の砂 粒を含む。	浅黄橙色	
20	SP1164	陶器 播鉢	最大径33.6	内面板ナデ。外 面ナデ、板ナデ、 接合痕、ユビオ サエ。	口縁部は肥厚。口縁端部は欠損して いる。体部内面は（3条/0.9cm）の 櫛描条線。		内面 にぶい黄 橙色 外面 橙色	備前系
21	SP1192	土師質土器 播鉢	底径11.0	内面横方向ハケ （7本/cm）。外 面ユビオサエ後 ナデ。	体部は直線的に外上方に立ち上がる。 体部内面に（4条/1.3cm）の櫛描条 線。底部外方向に突出。	焼成は良好。 2mm大の砂粒 を少量含む。	橙色	
22	SX1015	土師質土器 皿	底径10.0	内外面ナデ。	体部は、底部との境から外上方に直 線的に立ち上がる。体部と底部との 境は不明瞭。	焼成は良好。 精良。	内面 橙色 外面 にぶい橙 色	
23	SX1029	陶器 皿	底径7.1 高台高0.3		見込に型押成形による雲龍文の陽刻。 高台内に千鳥の陰刻。		内外面 緑釉 素地 灰白色	
24	SX1029	陶器 皿	—		見込に型押成形による雲龍文の陽刻。		内外面 緑釉 素地 灰白色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
26	I-7 包含層	土師質土器 皿	底径5.3	内面ナデ。外面 板ナデ。	体部は、底部との境から外上方に直線的に立ち上がる。体部と底部の境明瞭。底部の器壁平坦。	焼成は良好。 精良。	橙色	
27	M-9 包含層	土師質土器 皿	底径5.8	内外面ナデ。	体部は底部から外上方に大きく開く。体部外面の強いヨコナデにより底部との境に段を有する。	焼成は良好。 精良。	橙色	
28	N-9 包含層	土師質土器 杯	口径9.2 器高4.5 底径5.4	内外面ナデ。底 部静止糸切り。	体部内湾しながら立ち上がり、口縁部やや外反する。口縁端部尖り気味におさめる。底部の器壁は中心部に向かって厚くなる。底部と体部の境は明瞭。	焼成は良好。 精良。	橙色	
29	K-5 包含層	土師質土器 杯	底径5.2	内外面ナデ。	体部は底部より直線的に外上方に立ち上がる。底部と体部との境は明瞭。	焼成は良好。 精良。	内面 橙色 外面 にぶい橙 色	
30	S-10 包含層	土師質土器 鍋	口径40.6	内面板状工具によるナデ。外面 ナデ、板ナデ、 ユビオサエ。	口縁部は体部との境で「く」の字状に大きく外反し、内面の口縁部と体部の境は明瞭。口縁端部丸くおさめる。	焼成は良好。 2mm大の砂粒 を少量含む。	にぶい黄橙色	
31	G-4 包含層	土師質土器 鍋	口径43.2	内面ハケ(8本/ cm)、ユビオサ エ、接合痕。外 面ナデ、板ナデ、 ユビオサエ、接 合痕。	体部は、下位で湾曲し直線的に立ち上がる。口縁部は体部との境で「く」の字状に外反し、口縁端部方形にまとめる。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 を多量に含む。	内面 にぶい橙 色 外面 黒褐色	
32	I-8 包含層	土師質土器 鍋	口径39.0	内面ユビナデ。 外面ユビオサエ。	口縁部は体部との境で「く」の字状に外反し肥厚。口縁端部は上方へつまみあげ丸くおさめる。	焼成は良好。 1mm～5mmの砂 粒を多く含む。	橙色	
33	K. J-4. 5 包含層	土師質土器 鍋	底径32.2	内面ハケ(13本/ 2cm)、ユビオ サエ。外面ユビ オサエ後板ナデ。	体部はやや丸みをもつ底部から外上方に直線的に立ち上がる。底部と体部との境は不明瞭。	焼成は良好。 精良。	内面 浅黄橙色 外面 にぶい黄 橙色	
34	L-9 包含層	土師質土器 鍋	口径33.2	内面ナデ。外面 ユビオサエ後ナ デ。	口縁部は「く」の字状に外反し肥厚。口縁端部はやや内上方につまみ上げ尖り気味におさめる。	焼成は良好。 1mm～3mmの砂 粒をやや多く 含む。	内面 にぶい赤 褐色 外面 にぶい褐 色	外面に黒斑。
35	P-11. 12 包含層	土師質土器 鍋	底径19.2	内面ユビオサエ、 ユビナデ、ハケ (11本/1.6cm)。 外面板ナデ。	体部は底部より直線的に外上方に立ち上がる。	焼成は良好。 精良。	浅黄橙色	
36	P-11. 12 包含層	土師質土器 鍋	—	内面ハケ(10本/ cm)後ユビオサ エ。外面ユビオ サエ後ヘラケズ リ。	体部は底部より外上方に直線的に立ち上がり、底部に三脚がつく。	焼成は良好。 精良。	橙色	
37	M-10 包含層	土師質土器 鍋	—	内面ナデ。外面 ユビオサエ後ナ デ。	口縁部は、「く」の字状に外反し肥厚。口縁端部丸くおさめる。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を含む。	にぶい橙色	
38	G-10 包含層	土師質土器 釜	鐔径31.8	内面ナデ。外面 板状工具による ナデ。	体部・口縁部直立し、断面方形の長い鐔が水平につく。	焼成は良好。 5mm大の砂粒 を含む。	にぶい橙色	
39	P-10 包含層	土師質土器 釜	口径23.8 鐔径29.8	内面ハケ(9本/ cm)。外面板状 工具によるナデ、 ユビオサエ後ハ ケ(4本/cm)。	口縁部内傾し、口縁端部方形におさめる。断面方形の鐔が上向きにつく。	焼成は良好。 精良。	内面 赤褐色 外面 にぶい赤 褐色	
40	N-6 包含層	土師質土器 釜	口径17.6 最大径17.0	内面ナデ。外面 ユビオサエ後ナ デ。	口縁部直立し、口縁端部やや尖り気味におさめる。断面台形の長めの鐔が口縁部下方に下に向けてつく。	焼成は良好。 精良。	内面 黄橙色 外面 浅黄褐色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量 (cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
41	R-8 包含層 石垣下	土師質土器 釜	口径21.3 鐳径25.0	内面ユビオサエ 後板状工具による ナデ。外面ユビ オサエ後ナデ。	体部直立。口縁部は体部上方より内 彎し、口縁端部は尖りぎみにおさめ る。口縁部下方に断面三角形の長め の鐳が水平につく。	焼成は良好。 2mm～3mm大の 砂粒を多く含 む。	内面 明黄褐色 外面 浅黄褐色	
42	S-10 包含層	土師質土器 釜	口径24.0 鐳径27.0	内面ユビオサエ 後板ナデ、接合 痕。外面板ナデ、 ユビオサエ後ナ デ、接合痕。	口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめ る。口縁部下方に低く退化した断面 三角形の鐳が突帯状につく。	焼成は良好。 2mm～4mm大の 砂粒を多く含 む。	内面 にぶい橙 色 外面 明黄褐色	
43	S-10 包含層	土師質土器 釜	口径27.9	内面ユビオサエ 後板状工具による ナデ。外面ユビ オサエ後板状 工具によるナデ。	口縁部は内傾し、口縁端部は尖り気 味におさめる。鐳は、口縁部下方に 低く退化し突帯状につく。	焼成は良好。 2mm～3mm大の 砂粒をやや多 く含む。	内面 橙色 外面 明褐色	
44	I-6 包含層	土師質土器 釜	口径25.4	内外面板ナデ。	口縁部内傾し肥厚、口縁端部丸くお さめる。鐳は低く退化し突帯状とな る。	焼成は良好。 1mm～5mm大の 砂粒を多く含 む。	内面 にぶい黄 橙色 外面 橙色	
45	J-4 包含層	土師質土器 釜	—	内面ナデ。外面 板ナデ、ユビオ サエ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部 丸くおさめる。鐳部分は退化して肥 厚し認められない。	焼成は良好。 2mm～3mm大の 砂粒をやや多 く含む。	にぶい黄褐色	
46	J-4 包含層 (西壁)	土師質土器 釜	—	内面ユビナデ後 板状工具による ナデ。外面ヘラ ケズリ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部 尖りぎみにおさめる。鐳部分は退化 して肥厚し認められない。	焼成は良好。 1mm～4mm大の 砂粒をやや多 く含む。	内面 橙色 外面 にぶい橙 色	
47	J-4 包含層	土師質土器 釜	口径16.4	内面ナデ、板ナ デ、ユビオサエ。 外面ナデ、ユビ オサエ後ナデ。	口縁部は肥厚し、体部上方より内傾 する。口縁端部丸くおさめ、断面三 角形の低く退化した鐳が口縁部下方 につく。	焼成は良好。 5mm大の砂粒 を含む。	内面 浅黄褐色 外面 にぶい黄 褐色	
48	M-10 包含層	土師質土器 釜	口径25.0 鐳径27.4	内面ナデ。外面 板状工具による ナデ、ユビオサ エ後ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめ る。断面三角形の低く退化した鐳が 上向きにつく。	焼成は良好。 2mm大の砂粒 を少量含む。	灰白色	
49	L-8 包含層	土師質土器 釜	口径27.6	内面ナデ。外面 ナデ、ユビオサ エ後板ナデ。	体部内彎し、口縁部内傾。口縁端部 は尖りぎみにおさめる。低く退化し た断面三角形の鐳が上向きにつく。	焼成は良好。 1mm～3mm大の 砂粒を多く含 む。	内面 黄褐色 外面 浅黄褐色	
50	M-10 機械掘削	土師質土器 釜	口径27.4	内面ナデ、板ナ デ。外面ナデ、 板ナデ、ユビオ サエ、接合痕。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部 丸くおさめる。断面三角形の低く退 化した鐳が上向きにつく。	焼成は良好。 1mm～3mm大の 砂粒を多く含 む。	にぶい橙色	外面に煤付 着。
51	N-8 包含層	土師質土器 釜	口径31.0 最大径34.0	内面ユビオサエ 後板状工具による ナデ。外面ユビ オサエ後ナデ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部 丸くおさめる。低く退化した三角形 の鐳が上向きにつく。	焼成は良好。 1mm～4mm大の 砂粒をやや多 く含む。	内面 にぶい黄 褐色 外面 黄灰色	
52	L-7 包含層	土師質土器 釜	口径26.0	内面ナデ。外面 ナデ、ユビオサ エ後ナデ。	体部直立。口縁部は体部上方より内 傾し、口縁端部は丸くおさめる。断 面三角形の低く退化した鐳が上向き につく。内面は口縁部と体部との境 に段を有する。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を少量含 む。	浅黄褐色	把手？注ぎ 口？
53	O-10 包含層	土師質土器 釜	口径24.8	内面板ナデ。外 面ナデ、ユビオ サエ後ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめ る。低く退化した断面三角形の鐳が つく。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を少量含 む。	浅黄褐色	
54	I-7 包含層	土師質土器 釜	口径27.6	内面ナデ、ユビ オサエ後ナデ。 外面ユビオサエ 後ナデ、接合痕。	口縁部内傾し口縁端部丸くおさめる。 断面三角形の低く退化した鐳がつく。	焼成は良好。 1mm～2.5mm大 の砂粒をやや 多く含む。	浅黄褐色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
55	F-9 包含層	土師質土器 釜	—	内面板状工具によるナデ。外面板状工具によるナデ、ユビオサ工後板ナデ。	口縁部内傾し口縁端部尖りぎみにおさめる。口縁部下方に短い断面台形状の長めの鐳が水平につく。	焼成は良好。精良。	明赤褐色	
56	G-8 包含層	土師質土器 釜	—	内面ナデ。外面ユビオサ工後ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部尖りぎみにおさめる。口縁部下方に断面三角形の退化した鐳が水平につく。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む。	内面 橙色 外面 にぶい橙色	
57	I-7 包含層	土師質土器 釜	口径21.6 鐳径24.3	内外面ユビオサ工後ナデ。	口縁部内傾し口縁端部尖りぎみにおさめ、断面三角形の短い鐳が水平につく。	焼成は良好。1mm～6mm大の砂粒を少し含む。	浅黄橙色	
58	M-6 包含層	土師質土器 釜	口径18.2 最大径20.4	内面板状工具によるナデ。外面ユビナデ。	口縁部内傾し口縁端部は丸くおさめる。断面三角形の低く退化した鐳が水平につく。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒を多く含む。	浅黄橙色	
59	M-6 包含層	土師質土器 釜	口径18.0 最大径20.8	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサ工後ナデ。	口縁部内傾し肥厚。口縁端部丸くおさめる。断面三角形の退化した鐳が突帯状につく。	焼成は良好。1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	
60	L-5 包含層	土師質土器 釜	口径24.7	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサ工後ナデ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。断面三角形の低く退化した鐳が上向きにつく。	焼成は良好。1mm大の砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	把手?注ぎ口? 耳が付いていた可能性あり。
61	J-4 包含層	土師質土器 釜	口径24.6	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサ工、ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部丸くおさめる。鐳は短く退化して突帯状となる。	焼成は良好。1mm～3mm大の砂粒を多く含む。	にぶい黄橙色	外面に黒斑。
62	P-11.12 包含層	土師質土器 釜	口径25.8	内面ユビオサ工後板状工具によるナデ。外面ユビオサ工後板状工具によるナデ。	体部直立。口縁部内傾し、口縁端部は丸くおさめる。鐳部分は退化し、低い突帯状となる。	焼成は良好。3mm大の砂粒を少量含む。	にぶい橙色	
63	M-10 包含層	土師質土器 釜	口径28.4	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサ工後ナデ。	口縁部内傾し、口縁端部尖りぎみにおさめる。断面三角形の低く退化した鐳が上向きにつく。	焼成は良好。1mm～5mm大の砂粒をやや多く含む。	にぶい橙色	
64	M-10 包含層	土師質土器 釜	口径21.4	内面ナデ、ユビオサ工後ナデ。外面ナデ、ユビオサ工後ナデ。	体部は内彎し、外上方に立ち上がる。口縁部は内傾し口縁端部丸くおさめる。鐳は短く退化して突帯状となる。	焼成は良好。1mm大の砂粒を少量含む。	浅黄橙色	
65	I-8 包含層	土師質土器 釜	口径33.0	内面ナデ。外面ユビオサ工後ナデ、接合痕。	体部上位より口縁部にかけて内傾し、口縁端部尖り気味におさめる。口縁部下方に断面三角形の鐳がつく。	焼成は良好。1mm～5mm大の砂粒をやや多く含む。	内面 橙色 外面 にぶい黄橙色	
66	M-10 機械掘削	土師質土器 釜	口径28.0 最大径30.7	内面ユビオサ工後板状工具によるナデ。外面ユビオサ工後板状工具によるナデ。	体部は内彎しながら立ち上がり、体部上位より口縁部にかけて内傾。口縁端部尖り気味におさめる。断面三角形の鐳が水平につく。	焼成は良好。1mm～5mm大の砂粒をやや多く含む。	内面 橙色 外面 にぶい褐色	外面に煤付着。
67	D-1 包含層	土師質土器 釜	—	内面板状工具によるナデ。外面ユビオサ工後ナデ。	口縁部は内傾し、口縁端部尖りぎみにおさめる。口縁部下方に低く退化した断面三角形の鐳がつく。	焼成は良好。2mm大の砂粒を少量含む。	内面 明黄褐色 外面 にぶい黄橙色	
68	M-9 包含層	土師質土器 釜	—	内面ナデ。外面ナデ、ユビオサ工後ナデ、接合痕。	体部直立。口縁部は体部上方より内傾し、口縁端部丸くおさめる。鐳は短く退化して突帯状となる。内面は口縁部と体部との境に段がある。	焼成は良好。4mm大の砂粒を含む。	浅黄橙色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
69	L-8 包含層	土師質土器 釜	—	内面ナデ、ユビ オサ工後ナデ。 外面ユビオサ工 後板ナデ。	体内内彎し、口縁部は内傾する。口 縁端部は尖りぎみにおさめ、口縁直 下に低く退化した断面三角形の鐳が つく。	焼成は良好。 1mm～4mm大の 砂粒をやや多 く含む。	浅黄橙色	
70	G-6.7 包含層	土師質土器 釜	—	内面板状工具に よるナデ。外面 ユビオサ工後板 状工具によるナ デ。	体部は、内傾し、口縁端部は丸くお さめる。低く退化した断面三角形の 鐳がつく。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を少量含 む。	内面 黄橙色 外面 灰黄褐色	
71	M-10 包含層	土師質土器 内耳型釜	口径27.6	内面ユビオサ工 後ナデ、接合痕。 外面ナデ、接合 痕、ユビナデ、 ユビオサ工。	口縁部は体部上位より内彎し、口縁 端部丸くおさめる。口縁部上端近く に退化した断面三角形の短い鐳をめ ぐらし、一部耳状に突出させ内側に 円孔を施す。	焼成は良好。 1mm～4mm大の 砂粒を少量含 む。	にぶい黄橙色	外面に黒斑。
72	M-6 包含層	土師質土器 内耳型釜	—	内外面ユビオサ 工後ナデ。	口縁部は体部上位より内傾し、口縁 端部丸くおさめる。口縁部と体部と の境に断面三角形の短く退化した鐳 をめぐらし、一部を耳状に突出させ 内側に円孔を施す。	焼成は良好。 4.5mm大の砂 粒を含む。	浅黄橙色	外面に煤付 着。
73	M-10 機械掘削	土師質土器 内耳型釜	—	内面ナデ。外面 ユビオサ工、ナ デ。	口縁部は体部上位より内彎し、口縁 端部尖り気味におさめる。口縁部上 端近くに鐳の一部を耳状に突出させ 内側に円孔を施す。	焼成は良好。 5mm大の砂粒 を含む。	内面 浅黄橙色 外面 にぶい黄 橙色	外面に黒斑。
74	I-7 包含層	土師質土器 内耳型釜	—	内面ナデ。外面 ユビオサ工後ナ デ。	口縁部は体部上位より内彎し、口縁 端部上端近くの鐳の一部を耳上に突 出させ内側に円孔を施す。	焼成は良好。 1mm～4mm大の 砂粒を多く含 む。	内面 橙色 外面 浅黄褐色	
75	M-10 機械掘削	土師質土器 内耳型釜	—	内面ナデ。外面 ユビオサ工後ナ デ。	口縁部は体部上位より内傾し、口縁 端部丸くおさめる。口縁部と体部と の境に断面三角形の短く退化した鐳 をめぐらし、一部を耳状に突出させ 内側に円孔を施す。	焼成は良好。 1mm～3.5mm大 の砂粒を多く 含む。	内面 浅黄褐色 外面 橙色	外面に黒斑。
76	P-11.12 包含層	土師質土器 内耳型釜	—	内外面ユビオサ 工後板状工具に よるナデ。	口縁部は体部上位よりわずかに内傾 し、口縁端部丸くおさめる。口縁部 と体部との境に断面三角形の退化し た鐳をめぐらし、一部を耳状に突出 させ内側に円孔を施す。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を少量含 む。	内面 赤褐色 外面 にぶい赤 褐色	内外面に黒 斑。
77	K-5 包含層	土師質土器 内耳型釜	口径28.6	内面板状工具に よるナデ。外面 ユビオサ工後ナ デ。	口縁部は体部との境で内側へ大きく 屈曲し口縁端部丸くおさめる。口縁 部と体部との境にほとんど退化した 鐳をめぐらし、一部を耳状に突出さ せ内側に円孔を施す。	焼成は良好。 1mm～4.5mm大 の砂粒をやや 多く含む。	にぶい黄褐色	外面に煤付 着。
78	F-8 包含層	土師質土器 釜	—	内面ハケ(4本/ cm)。外面格子 目タタキ。	丸底気味。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を少し含 む。	内面 にぶい橙 色 外面 褐灰色	外面に黒斑。
79	H-7 包含層	土師質土器 茶釜	口径15.3	内面ナデ、接合 痕。外面ナデ、 ユビオサ工後板 ナデ、接合痕。	体部上位で大きく内彎し、口縁部直 立、口縁端部方形におさめる。体部 最張部に板状の把手を貼り付け、把 手の基部内側に円孔と3条の凹線を 施す。	焼成は良好。 1mm～1.5mm大 の砂粒を少量 含む。	内面 橙色 外面 にぶい橙 色	
80	P-11.12 包含層	土師質土器 茶釜	口径16.2	内面ナデ、ハケ (5本/cm)、ユ ビオサ工、接合 痕。外面ナデ、 板ナデ。	体部上位より大きく内彎し、口縁部 直立やや外傾する。口縁端部は方形 におさめる。把手の基部内側に円孔 を施す。	焼成は良好。 1mm～3.5mm大 の砂粒を少量 含む。	内面 浅黄褐色 外面 にぶい橙 色	
81	A区東壁 トレンチ	土師質土器 茶釜	口径19.2	内外面板ナデ、 接合痕。	口縁部は、体部との境で大きく屈曲 し内傾する。口縁端部方形におさめ る。	焼成は良好。 1mm～3mm大の 砂粒を少量含 む。	浅黄褐色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
82	J-6 包含層	土師質土器 茶釜	口径15.4	内外面板状工具 によるナデ。	体部上位で大きく内彎。口縁部やや 内傾し、口縁端部方形におさめる。	焼成は良好。 1mm～3mm大の 砂粒を少量含 む。	浅黄橙色	
83	I-6 包含層	土師質土器 茶釜	口径18.3	内外面ユビオサ 工後ナデ。	口縁部やや外傾しながら直立し、口 縁端部方形におさめる。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒をやや多 く含む。	浅黄橙色	
84	G-5 包含層	土師質土器 釜の脚	—	板状工具による ナデ、ユビオサ 工。	身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。 1mm～3.5mm大 の砂粒を少量 含む。	橙色	
85	I-7 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビオサ工、ケ ズリ。	身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。 1mm～3mm大の 砂粒を少量含 む。	にぶい黄橙色	
86	R-8 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビナデ。	身部円柱状、断面円形。先端部は彎 曲する。	焼成は良好。 1mm大の砂粒を やや多く含む。	明赤褐色	
87	P-11.12 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビナデ、ケズ リ。	身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。 1mm大の砂粒を やや多く含む。	にぶい橙色	
88	F-7 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ケズリ、ユビオ サ工。	身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。 3mm大の砂粒 を含む。	にぶい黄橙色	
89	P-11.12 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビナデ、ケズ リ。	基部屈曲。身部円柱状、断面円形。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 をやや多く含 む。	にぶい橙色	
90	P-11 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ケズリ、ユビオ サ工。	基部強く屈曲。身部円柱状、断面円 形。	焼成は良好。 1mm～2.5mm大 の砂粒を少量 含む。	にぶい黄褐色	
91	J-7 包含層	土師質土器 釜の脚	—	ユビオサ工、ヘ ラケズリ。	基部緩やかに屈曲、断面円形。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を少量含 む。	橙色	
92	L-6 包含層	土師質土器 播鉢	口径15.2	内面回転ナデ。 外面ナデ、ユビ オサ工。	体部は直線的に外方向に立ち上がり、 口縁部内傾する。口縁端部は内方向 につまみ出す。体部内面は(5条/cm) の櫛描条線。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒をやや多 く含む。	内面 にぶい黄 色 外面 浅黄色	
93	S-10 包含層	土師質土器 播鉢	口径33.2	内外面ナデ、ハ ケ(6本/cm)。	体部は外上方に直線的に立ち上がり、 口縁部は内方に屈曲し、肥厚。端部 は丸くおさめる。口縁部内面は体部 との境に段を有し、体部内面は(6 条/1.7cm)の櫛描条線。	焼成は良好。 4mm大の砂粒 を少量含む。	淡赤橙色	
94	M-10 機械掘削	土師質土器 播鉢	口径32.0	内面ナデ。外面 ユビオサ工、ナ デ。	体部は直線的に立ち上がる。口縁部 は内傾し、肥厚。端部はやや丸みを 帯びた方形におさめる。体部内面は 磨減が激しく不明瞭だが櫛描条線。	焼成は良好。 1mm～3.6mm大 の砂粒を多量 に含む。	橙色	
95	J-5 包含層	土師質土器 播鉢	口径21.6	内面板状工具に よるナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内傾し肥厚、端部つまみ上げ丸く おさめる。	焼成は良好。 3mm大の砂粒 をやや多く含 む。	浅黄橙色	
96	I-7 包含層	土師質土器 播鉢	口径22.2	内面板状工具に よるナデ。外面 ユビオサ工後ナ デ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内傾し肥厚、端部つまみ上げ丸く おさめる。	焼成は良好。 2mm大の砂粒 を少量含む。	にぶい橙色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量 (cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
97	M-10 包含層	土師質土器 擂鉢	口径29.4	内面ナデ。外面 ナデ、ユビオサ エ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内傾し肥厚、端部つまみ上げ丸く おさめる。体部内面は櫛描条線。	焼成は良好。 1mm～5mm大の 砂粒を多量に 含む。	内面 灰白色 外面 浅黄褐色	
98	P-11.12 包含層	土師質土器 擂鉢	口径23.6	内面ナデ。外面 板状工具による ナデ、接合痕。	体部は直線的に外上方に立ち上がり、 口縁部は肥厚し内方向に屈曲。端部 は、丸くおさめる。体部と口縁部は 境明瞭。体部内面は、(3条/cm)の櫛 描条線。	焼成は良好。 1mm～3mm大の 砂粒を含む。	内面 浅黄褐色 外面 にぶい黄 褐色	
99	M-9 包含層	土師質土器 擂鉢	口径32.1	内面ユビオサエ 後板ナデ。外面 板ナデ、ユビナ デ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内方に屈曲し、端部丸くおさめる。 口縁部内面は体部との境で段を有す る。体部内面は櫛描条線。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を少量含 む。	にぶい橙色	
100	I-7 包含層	土師質土器 擂鉢	口径26.0	内面ナデ。外面 ユビオサエ後ナ デ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内方に屈曲し、端部丸くおさめる。	焼成は良好。 1mm～3.5mm大 の砂粒を少量 含む。	浅黄褐色	
101	I-7 包含層	土師質土器 擂鉢	口径29.8	内面ナデ。外面 ナデ、接合痕。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内傾し、肥厚。端部つまみ上げ丸 くおさめる。体部内面は(3条/cm) の櫛描条線。	焼成は良好。 1mm～4mm大の 砂粒をやや多 く含む。	浅黄褐色	
102	O-12 包含層	土師質土器 擂鉢	口径21.6	内面ナデ。外面 ナデ、ユビオサ エ後ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内方に屈曲し、端部は丸くおさめ る。体部内面は(8条/1.5cm)の櫛 描条線。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 を含む。	浅黄褐色	
103	I-7 包含層	土師質土器 擂鉢	口径16.6	内面ナデ。外面 ユビオサエ後ナ デ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内傾し肥厚、端部丸くおさめる。 体部内面は(6条/1.6cm)の櫛 描条線。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒をやや多 く含む。	内面 浅黄褐色 外面 にぶい褐 色	
104	I-7 包含層	土師質土器 擂鉢	口径19.4	内面ナデ。外面 ユビオサエ後ナ デ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内方に屈曲し肥厚、端部丸くおさ める。体部内面は、櫛描条線。	焼成は良好。 1mm～5mm大の 砂粒を多く含 む。	浅黄褐色	
105	G-5 包含層	土師質土器 擂鉢	口径20.1	内面ナデ。外面 ナデ、ユビオサ エ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内方に屈曲し、端部丸くおさめる。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を少量含 む。	浅黄褐色	
106	M-6 包含層	土師質土器 擂鉢	口径25.6	内面ナデ、板状 工具によるナデ。 外面ユビオサエ 後ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 は内方に緩く屈曲し肥厚、端部丸く おさめる。体部と口縁部の境はやや 不明瞭な段を有する。体部内面は、 (3条/cm)の櫛描条線。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒をやや多 く含む。	にぶい橙色	
107	D-1 包含層	土師質土器 擂鉢	口径22.2	内面横方向ハケ (7本/cm)。外 面ナデ。	体部は外上方に立ち上がり、口縁部 はやや内傾し、端部丸くおさめる。 体部は(3条/cm)の櫛描条線。	焼成は良好。 1.5mm大の砂 粒をやや多く 含む。	浅黄褐色	
108	I-5 包含層	土師質土器 擂鉢	底径28.8	内面ナデ。外面 ユビオサエ後ナ デ、接合痕。	体部は直線的に外上方に立ち上がる。 体部内面に(5条/2cm)の櫛描条 線。底部外方向に突出。	焼成は良好。 1mm～4mm大の 砂粒を多く含 む。	内面 浅黄褐色 外面 褐色	
109	G-4 包含層	土師質土器 擂鉢	底径8.6	内面ナデ。外面 ユビオサエ後ナ デ。	体部は外上方に立ち上がる。底部は 外方向にやや突出。体部内面は、(5 条/1.7cm)の櫛描条線。	焼成は良好。 1mm～4mm大の 砂粒を多く含 む。	内面 浅黄褐色 外面 灰白色	
110	O-8 包含層	土師質土器 擂鉢	底径11.1	内面ナデ。外面 ユビオサエ後ナ デ。	体部は外上方に立ち上がる。体部内 面に(4条/0.9cm)の櫛描条線。底部 外方向にやや突出。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 を少量含む。	褐色	
111	M-7 包含層	土師質土器 擂鉢	底径7.8	内底面は使用に よる摩耗。外面 ユビオサエ。	体部は外上方に立ち上がる。体部内 面に(4条/1.4cm)の櫛描条線。底部 外方向にやや突出。	焼成は良好。 5mm大の砂粒 を含む。	内面 褐色 外面 にぶい橙 色	

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
112	T-11 包含層	土師質土器 播鉢	底径10.3	内面ナデ。外面 ユビオサ工後ナ デ。	体部は直線的に外上方に立ち上がる。 体部内面に(10条/2cm)の櫛描条線。 底部外方向にやや突出。	焼成は良好。 2mm大の砂粒 を少量含む。	にぶい黄橙色	
113	C区西壁	土師質土器 播鉢	底径11.0	内面ナデ。外面 ユビオサ工、ナ デ。	体部はやや丸みを帯びながら、外上 方に立ち上がり体部内面は、(5条/ 1.5cm)の櫛描条線。	焼成は良好。 1mm~3mm大の 砂粒を多量に 含む。	内面 にぶい褐 色 外面 灰黄褐色	
114	B-1 包含層	土師質土器 捏鉢	口径21.7	内面ナデ、板ナ デ。外面ナデ、 ユビオサ工後ナ デ、接合痕。	体部内彎ぎみに立ち上がり、口縁端 部内上方へつまみ出し丸くおさめる。	焼成は良好。 2mm大の砂粒 を少量含む。	内面 橙色 外面 にぶい橙 色	
115	J-8 包含層	土師質土器 鉢	口径26.6	内面板状工具に よるナデ、接合 痕。外面ユビオ サ工後板状工具 によるナデ。	口縁部は内方へ屈曲し肥厚、口縁端 部丸くおさめる。	焼成は良好。 1mm~2mm大の 砂粒をやや多 く含む。	にぶい橙色	
116	S-10 包含層	天目茶碗	口径13.6		内外面とも鉄釉を施釉。 外面の下位は無釉。		黒褐色の鉄釉 素地 灰黄白色	
117	K. J-4.5 包含層	青磁 碗	口径12.6		外面に蓮弁文。	緻密	灰白色	
118	I-7 包含層	青磁 碗	口径11.6		内外面とも施釉。	緻密	灰白色	
119	S-11 包含層	青磁 碗	底径5.3 高台高0.95		釉が厚い。高台は高く、内底面は釉 を剥ぎ高台は内面まで釉がかかっ ている。	緻密 焼成は悪い。	灰白色	
120	F-8 包含層	青磁 碗	口径14.4		内外面施釉。外面蓮弁文は不明瞭。	緻密	灰白色	
121	K. J-4.5 包含層	青磁 碗	底径6.2 高台高0.85		釉が厚い。高台部の畳付に釉を施す。	緻密	灰白色	
122	K. J-4.5 包含層	青磁 碗	口径19.6		内外面とも陰刻文。	緻密	灰白色	
123	F-4.5 包含層	青磁 碗	—		内面に沈線文が2条。外面に蓮弁文。	緻密	灰白色	
124	K-9.10 包含層	天目茶碗	口径10.6		内外面とも鉄釉を施釉。	焼成はあまい。	にぶい褐色の鉄 釉 素地 灰白色	瀬戸美濃系
125	S-10 包含層	陶器 甕	口径27.4		内外面とも口クロナデで外面にタタ キ痕。		灰褐色	備前系
126	C区西壁	陶器 壺	口径14.8		口縁端部肥厚。		褐灰色 素地 にぶい赤 褐色	備前系
127	M-10 包含層	陶器 播鉢	口径27.3		内外面とも無釉焼締。		灰色 素地 灰色	備前無釉焼 締陶器
128	H-9 包含層	須恵器 甕	—	内面ナデ。外面 格子目タタキ。		焼成は良好。 精良	内面 褐灰色 外面 にぶい褐 色	
129	R-9 包含層	白磁 小皿	口径9.0 器高1.65 底径4.9 高台高0.3		寿文皿。	緻密	灰白色	瀬戸美濃系
130	T-11.12 包含層	磁器 皿	底径8.0 高台高0.4		見込蛇ノ目釉剥ぎ。畳付は無釉。	緻密	灰白色	肥前系
131	G-8 包含層	陶器 皿	底径4.6 高台高0.5		内面に銅緑釉をかける。見込蛇ノ目 釉剥ぎ。	緻密	灰白色	肥前系
132	G-4 包含層	陶器 皿	底径5.0 高台高0.2		見込に砂目痕がある。高台以外の内 外面に灰釉をかける。畳付に回転糸 切りの跡。	緻密	灰白色	肥前系

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
133	T-11 包含層	磁器 碗	口径10.2 器高5.75 底径4.4 高台高0.5		見込は捻子文、外面は丸文。高台に褐色の焼継師の印。撥高台。	緻密	灰白色	肥前系
134	R-12 包含層	磁器 碗	口径10.8 器高6.3 底径4.9 高台高0.9		染付端反碗。外面は流水文、見込は山水文。	緻密	灰白色	肥前系
135	T-12溝	磁器 碗	口径11.0 器高4.8 底径4.5 高台高0.8		見込は蛇ノ目釉剥ぎし、透明なアルミナ土を塗る。環状の窯道具痕。	緻密	灰白色	肥前系
136	T-11 包含層	陶胎染付 碗	口径11.6		体部の一ヶ所を押圧。外面楼閣山水文。		灰白色	肥前系
137	G-6 包含層	磁器 碗	口径10.7		端反碗。外面はよろけ縞模様。	緻密	灰白色	肥前系
138	C区西壁	陶器 碗	口径11.0		灰釉陶器碗。緑色と金色の笹文を上絵付け。	緻密	灰白色	京信楽系
139	T-11, 12 包含層	磁器 鉢	口径11.3		染付の鉢。見込は蛇ノ目釉剥ぎし、淡黄色を呈するアルミナ土を塗る。外面は丸文。	緻密	灰白色	肥前系
140	F-9 包含層	磁器 皿	口径13.6		染付の皿。外面は唐草文。	緻密	灰白色	肥前系
141	S-9 包含層	陶器 碗	口径11.5		灰釉陶器碗。赤で海老、緑でしめ縄を上絵付け。胎土は陶器質。	緻密	灰白色	京信楽系
142	S-10, T-11 包含層	陶器 碗	底径4.8 高台高0.8		呉器手碗。畳付に砂が僅かに付着。	緻密	浅黄橙色	肥前系
143	Q-9 包含層	青磁 碗	底径5.0 高台高1.0		高台無釉で、畳付に砂が付着。見込に溶着痕。	緻密	灰白色	肥前系
144	H-9 包含層	陶器 碗	底径5.5 高台高0.4		見込にハリピン痕。内面は灰釉。外面飛鉋装飾を施し、鉄釉をかける。	緻密	灰白色	京信楽系
145	F-10 包含層	磁器 碗	底径6.2 高台高1.0		広東碗。	緻密	灰白色	肥前系
146	F-9 包含層	陶器 碗	底径5.2 高台高0.95		太白手広東碗。見込は五弁花文。		にぶい黄橙色	瀬戸美濃系
147	G-10 包含層	磁器 碗	—		染付広東碗。外面は網目文。	緻密	灰白色	肥前系
148	T-11 包含層	磁器 蓋	底径9.6 高台高1.15		染付中碗の蓋。撥高台の碗に伴う。	緻密	灰白色	肥前系
149	P-11 包含層	陶器 土瓶	口径10.2		焼締陶器。肩部上位に陰刻文を押印。注ぎ口の貼り付け部は幅5mmぐらいのヘラで押さえる。穴は8個で不整。	焼成はあまい。 緻密	明赤褐色	外面に煤付着。内面におこげ付着。
150	P-11 包含層	陶器 土瓶	底径10.8		焼締陶器。肩部上位に陰刻文を押印。注ぎ口の貼り付け部は幅5mmぐらいのヘラで押さえる。穴は8個で不整。	焼成は硬い。 緻密	暗赤褐色	外面に煤付着。
151	R-11 包含層	陶器 甕	口径32.8		内外面に鉄釉を施釉し、口縁端部上面は無釉。		にぶい赤橙色	大谷焼
152	S-10 包含層	陶器 甕	口径21.2		内外面は鉄釉を施釉。		浅黄橙色	瀬戸美濃系
153	S-11 包含層	包含層 片口鉢	口径26.0		内外面に鉄釉を施釉。口縁内端部に積み重ね痕。		にぶい橙色	肥前系
154	S-12 包含層	鉢	口径24.0		内外面とも鉄釉と白泥のハケ目装飾。口縁上端部無釉。内面に環状の積み重ね痕。		明赤褐色	肥前系

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
155	S-9 包含層	水瓶? 水鉢?	口径31.6		外面に流水文を陰刻。灰釉地に緑釉を流しかける。		灰白色	瀬戸美濃系
156	Q.P-8.9 包含層	陶器 播鉢	口径22.4		口縁部内側の段差は弱く、顎は張り出している。摺り目上端が下位である。顎部下に積み重ね痕。口縁部外面に2条の凹線。		灰赤色	備前系
157	T-12溝	陶器 播鉢	口径20.1		口縁部内面に段差がない。顎は張り出し、摺り目は緻密である。口縁帯と内面に塗り土を施す。		明赤褐色	堺明石系
158	P-10 包含層	陶器 播鉢	口径19.8		口縁部内面の段差は退化し、外面の顎が強く張り出す。顎に積み重ね痕。摺り目は緻密。口縁帯に塗り土を施す。		にぶい黄橙色	備前系
159	2次 5トレンチ 2層直上	陶器 播鉢	底径18.6		内面に櫛描条線。底部外面に積み重ね痕。		にぶい黄橙色	堺明石系
160	E-1 包含層	陶器 瓶類	底径15.6		内面に米粒大の工具痕が無数。		暗赤褐色	備前系
161	R-9 機械掘削	陶器 火鉢	口径19.0		外面に褐色の鉄釉を施釉。	緻密	明赤褐色	大谷焼 口縁部に連続する敲打痕が顕著。
162	G-10 包含層	陶器 鉢	口径18.2		断面・表面とも褐色に焼き締めている。外面に火襷。		灰褐色	備前系
163	D-2.3 包含層	陶器 火鉢	—		口縁部内外面に緑釉を施釉。	緻密	灰白色	瀬戸美濃系 敲打痕が非常に顕著で、口縁部が磨耗している。
164	R-9 機械掘削	青磁 香炉	口径12.0		内面の露胎部が橙色を呈する。	緻密	灰白色	肥前系
165	D-3.4 包含層	陶器 香炉	口径5.8		陶胎染付。内面は無釉で見込に砂目。	緻密	にぶい褐色	肥前系
166	機械掘削	磁器 油壺			染付。内面は無釉。	緻密	灰白色	肥前系 内面に黒色物質が付着。
167	機械掘削	陶器 灯明皿	口径11.0		灰釉陶器。仕切りの端部は無釉。	緻密	灰白色	京信楽系
168	S-11 包含層	陶器 灯明皿	底径4.6		内面は塗り土を施す。外底面は回転糸切り後同心円削り。	緻密	赤褐色	備前系
169	E-8 包含層	陶器 極小壺	底径5.7			緻密	灰白色	
170	F-4.5 包含層	陶器 土瓶の蓋	口径3.4 器高1.4 底径2.8		外面に鉄釉をかける。内面は黒色を呈する。外底面は右回転切り離し。	緻密	暗褐色	
171	Q.P-9 包含層	陶器 加工円盤	長さ3.8 厚さ0.8		灯明具の上皿からの転用。	緻密	にぶい橙色	大谷焼
172	E-8 包含層	陶器 加工円盤	長さ3.1 厚さ1.1		播鉢からの転用。	石英、砂粒	内面 明赤褐色 外面 にぶい赤褐色	堺明石系

第7表 花園遺跡出土遺物観察表（石器）

番号	遺構名 出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	素材	石材	備 考
9	SJ1001	石鏃	2.3	1.60	0.45	1.2	剥片	サヌカイト	平基無茎式、先端部一部欠損
10	SJ1001	石鏃	2.0	1.55	0.40	0.9	剥片	サヌカイト	平基無茎式
25	確認トレンチ1包	石鏃	2.6	2.20	0.35	2.8	剥片	サヌカイト	平基無茎式、先端部欠損

第8表 花園遺跡出土遺物観察表（瓦）

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	色調	材質	特 徴 ・ 備 考
173	T-12溝	軒平瓦	厚さ2.0	にぶい橙色	土師質	凸面格子目タタキ
174	Q-12包含層	平瓦	厚さ1.1	にぶい黄褐色	土師質	凸面格子目タタキ
175	P-10包含層	軒丸瓦	瓦当面径13.8 瓦当厚1.7 外縁幅2.8 外縁高0.6	灰色	瓦質	左巻き三つ巴連珠12
176	Q-10包含層	軒丸瓦	外縁幅2.3 外縁高0.6	暗灰色	瓦質	右巻き三つ巴連珠13前後
177	F-4.5包含層	軒平瓦	外縁幅1.1 外縁高0.5	灰色	瓦質	均整唐草文
178	G-10包含層	軒平瓦	瓦当厚2.0 外縁幅1.1 外縁高0.9	灰色	瓦質	均整唐草文

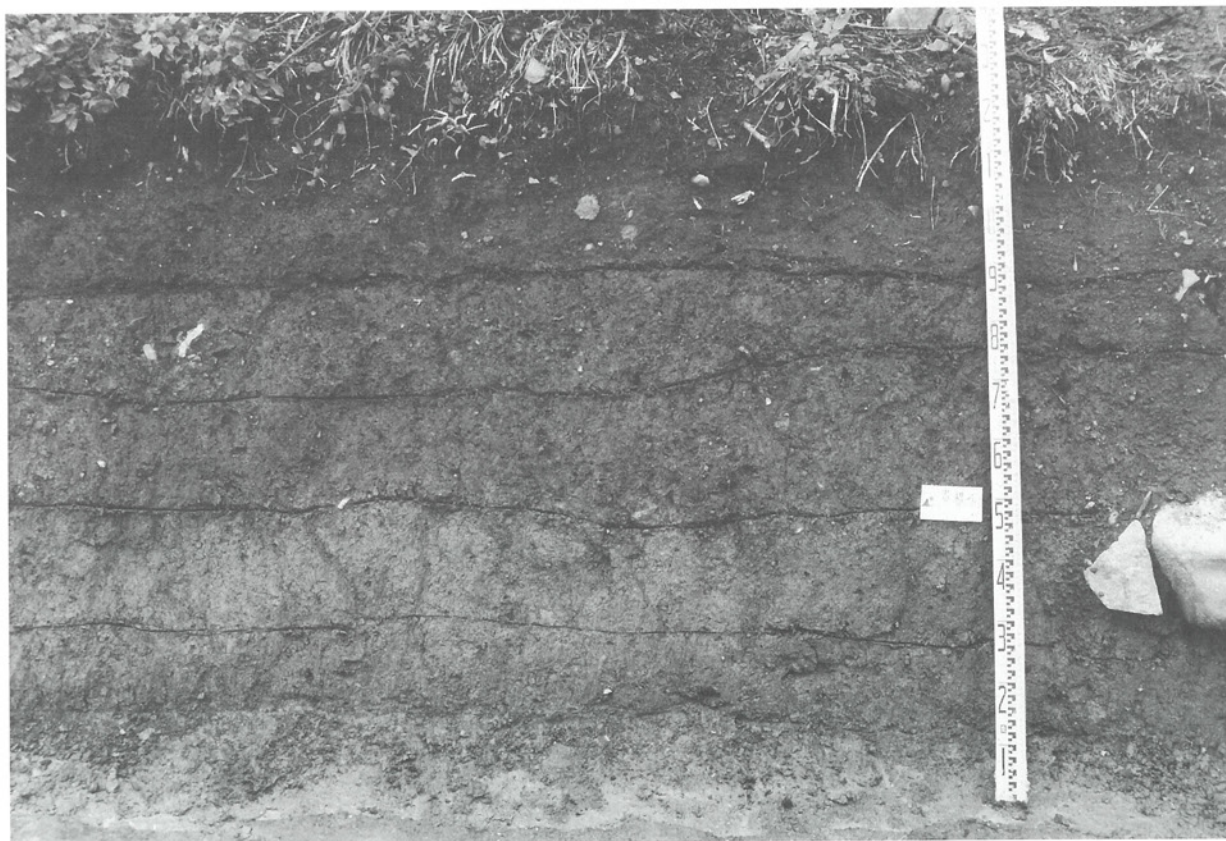
第9表 花園遺跡出土遺物観察表（金属製品）

番号	遺構名 出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
179	L-9 包含層	釘	—	0.55	0.40	5.25	
180	J-6 包含層	釘	3.45	0.60 0.45	0.40	2.72	
181	J-5 包含層	釘	3.90	0.80 0.30	0.30	1.67	
182	M-7 包含層	釘	2.30	0.70 0.40	0.40	1.27	
183	I-7 包含層	釘	2.25	0.40	0.40	2.24	
184	M-8 包含層	釘	1.50	0.60	0.40	2.02	
185	M-7 包含層	釘	2.65	0.40	0.45	3.96	
186	S-12 包含層	釘	5.00	0.75 0.40	0.40	11.79	
187	R-10 包含層	釘	4.00	1.00 0.50	0.50	12.20	
188	I-7	釘	3.50	0.80	0.40	3.54	
189	I-6 包含層	釘	4.20	0.55	0.50	3.12	
190	T-10 包含層	釘	6.10	0.55	0.60	5.23	
191	T-10 包含層	釘	5.20	0.80	0.50	11.30	

番号	遺構名 出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
192	I-7 包含層	釘	3.00	0.60	0.40	4.05	
193	K-9 包含層	釘	8.35	0.70	0.50	26.51	
194	I-6 包含層	釘	—	—	0.35	4.00	
195	M-6 包含層	釘	1.90	0.40	0.35	1.06	
196	R-10 包含層	釘	6.40	0.30 0.40	0.30 0.25	15.64	
197	M-6 包含層	釘	4.70	0.60	0.50	8.59	
198	I-7 包含層	釘	2.10	0.60 0.30	0.40 0.30	1.32	
199	K-6 包含層	釘	2.90	0.90	0.40	2.44	
200	M-6 包含層	釘	1.80	0.50	0.40	1.72	
201	K-6 包含層	釘	2.30	0.40	0.35	1.57	
202	J-9 包含層	釘	2.35	0.50	0.40	3.09	
203	南側排水溝	銭貨	—	—	—	—	祥符元寶（北宋初鑄年1009年） 縁が加工されている。
204	N-12 包含層	銭貨	—	—	—	—	紹聖元寶（北宋初鑄年1094年）
205	S-12 包含層	銭貨	—	—	—	—	寛永通寶



花園遺跡調査区全景 西より

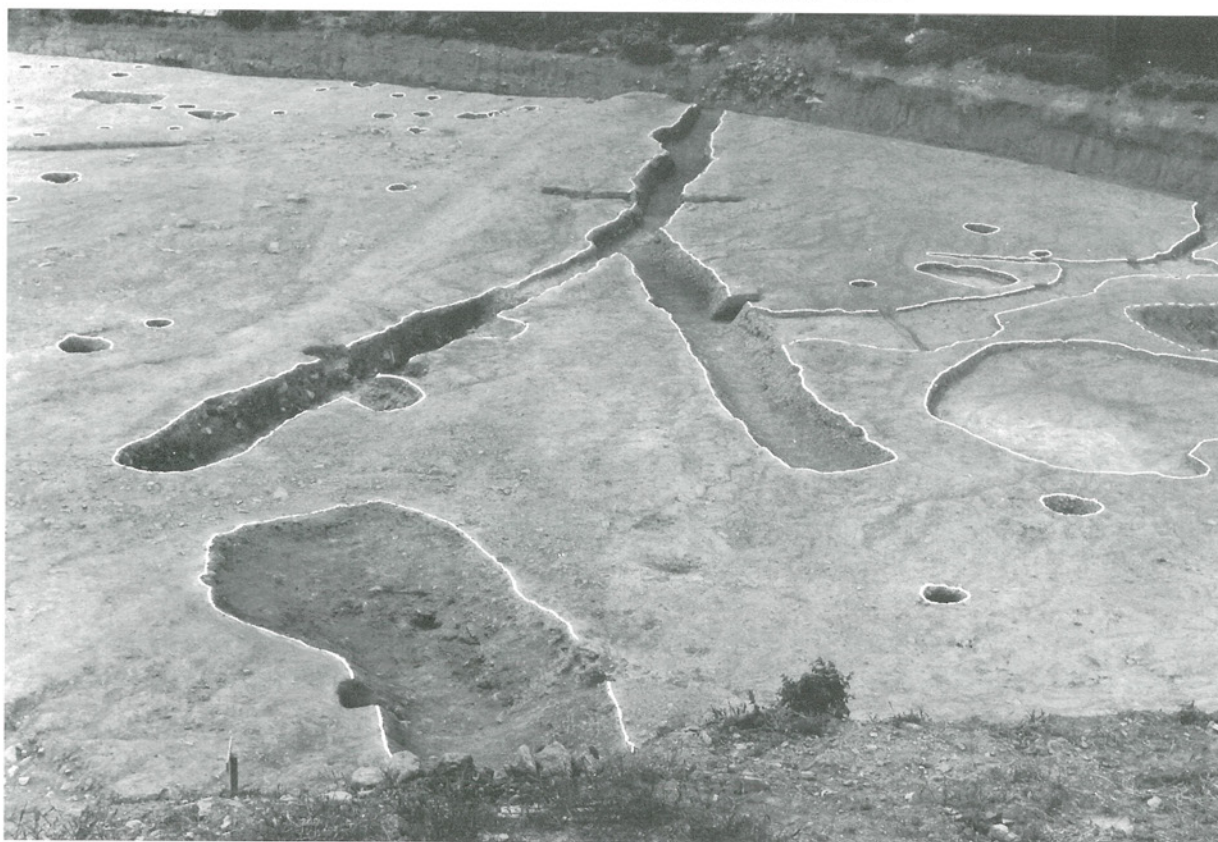


花園遺跡B区西壁土層

図版 2



SJ1001・1002・1003、SR1001遺構検出状況 東より



SJ1001・1002・1003、SR1001完掘状況 東より

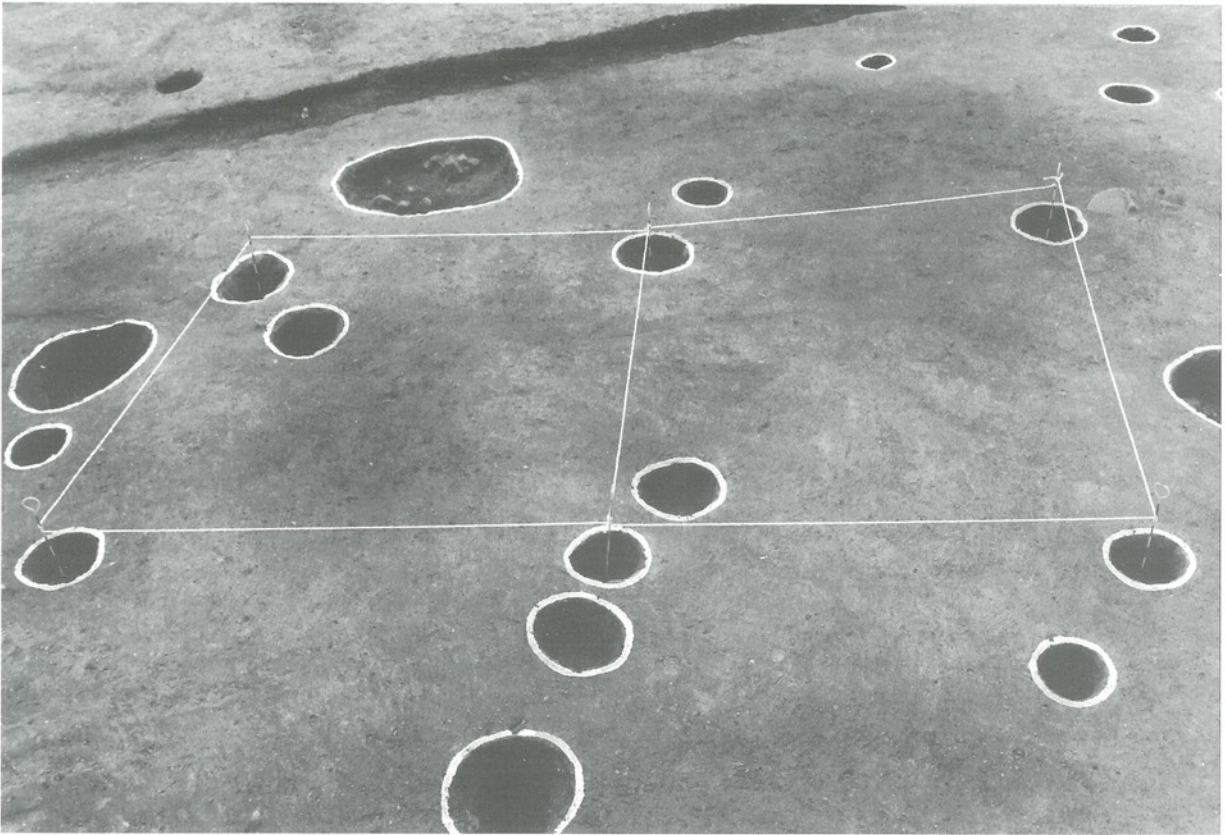


ST1001土層断面 北より

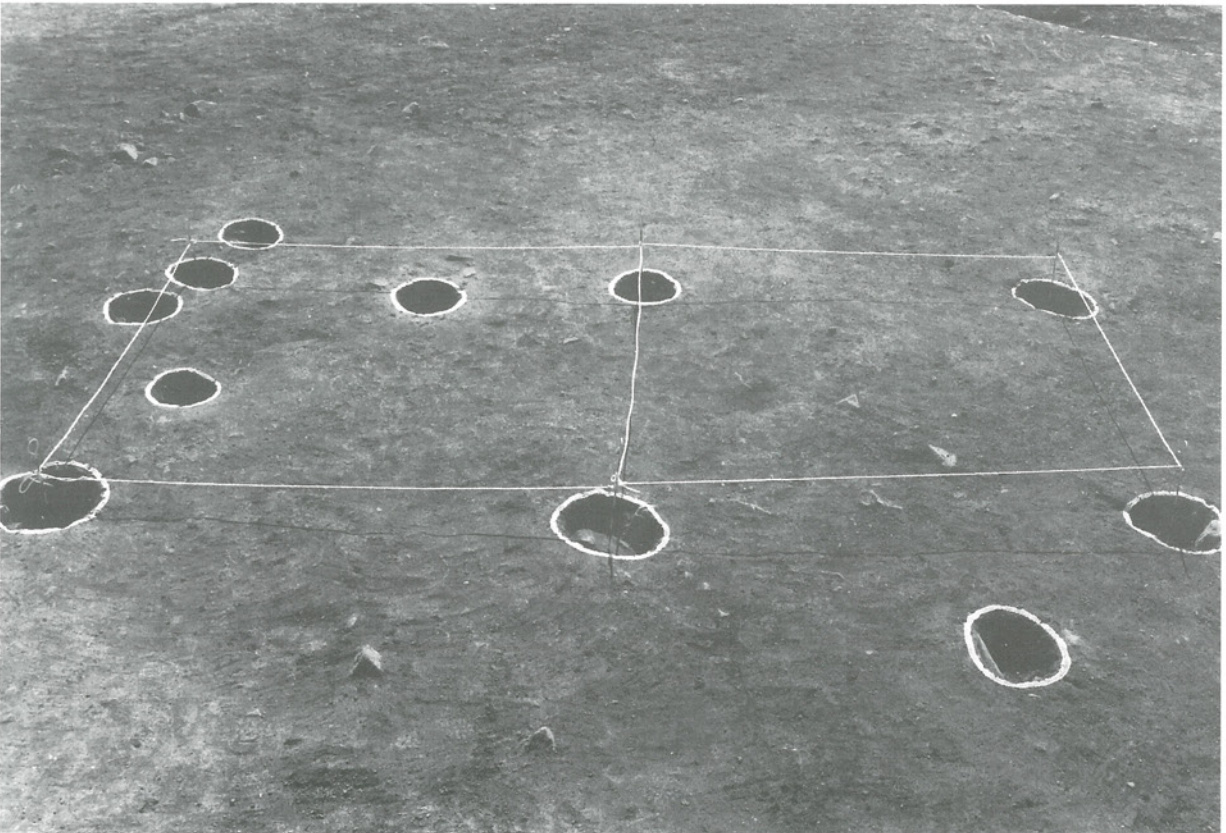


ST1001完掘状況 北より

図版 4



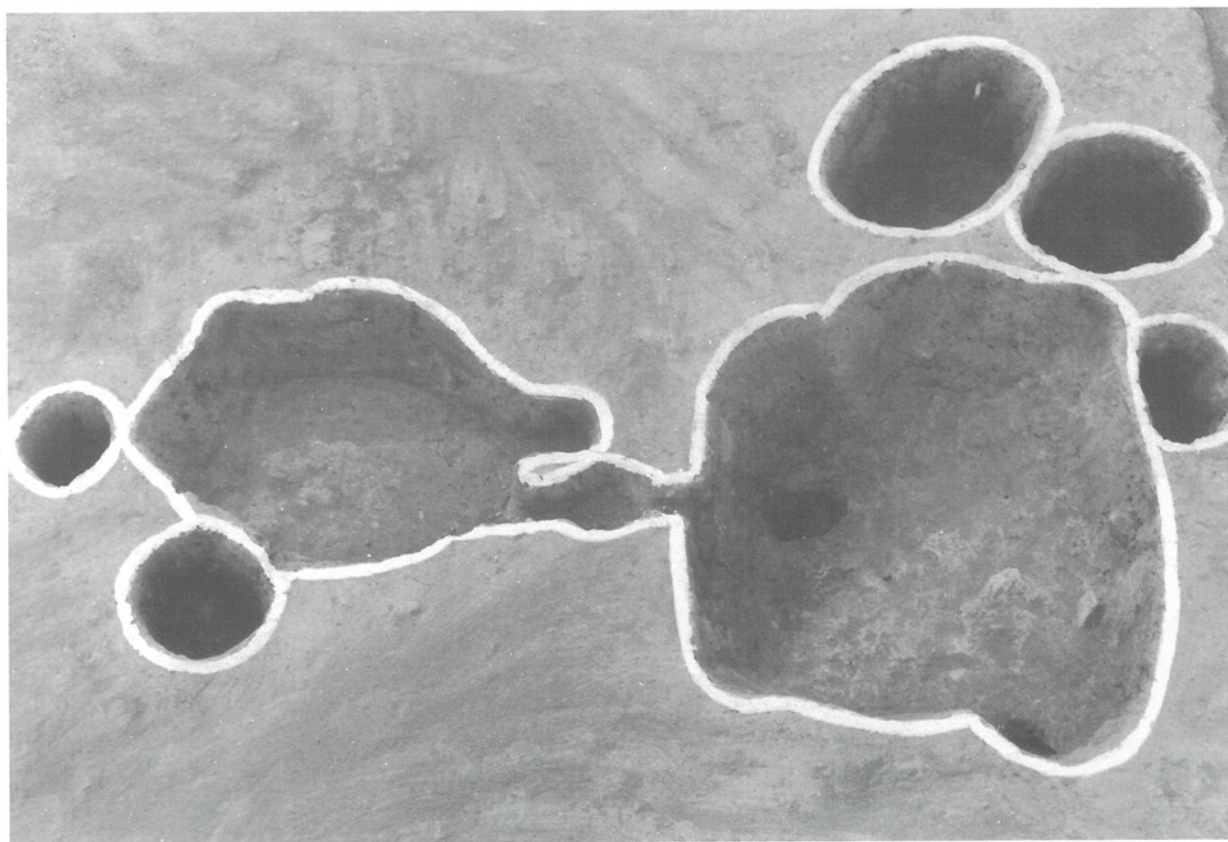
SA1001完掘状況 南より



SA1003完掘状況 西より

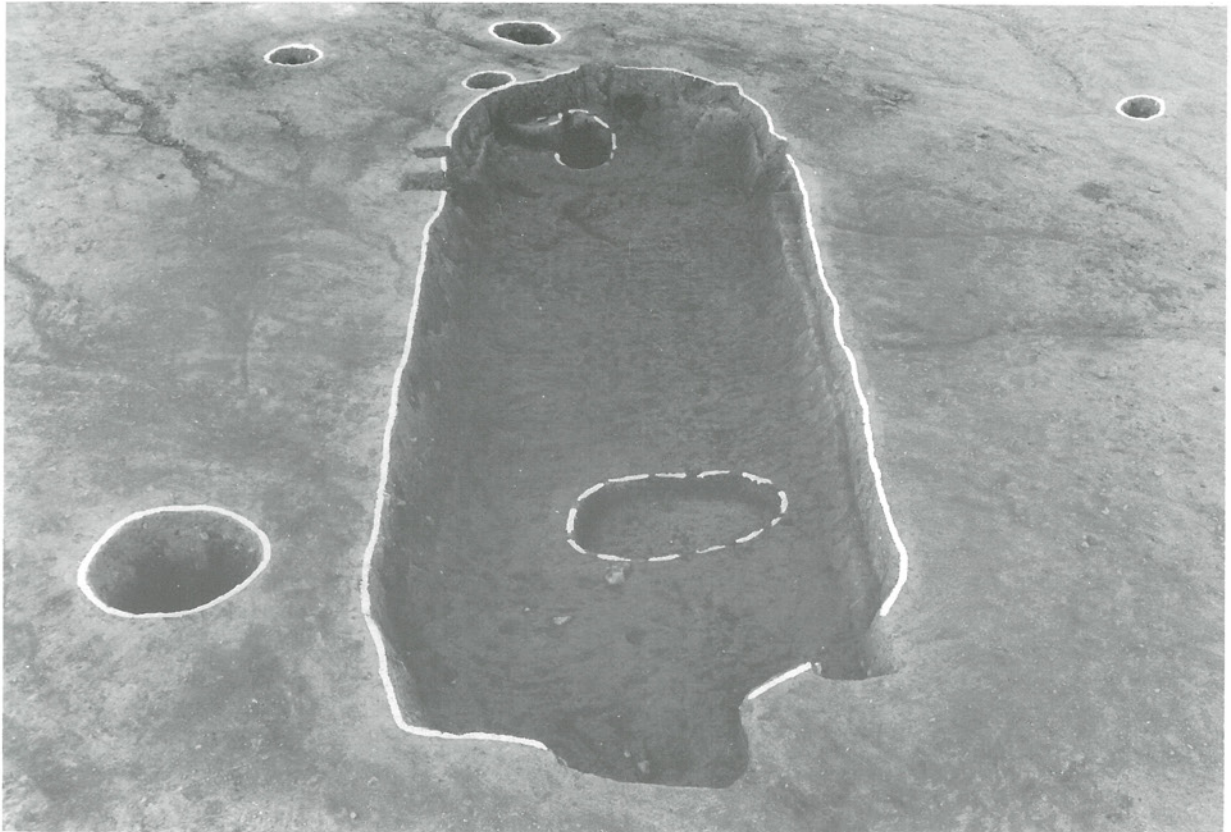


SH1001遺物出土状況 南より

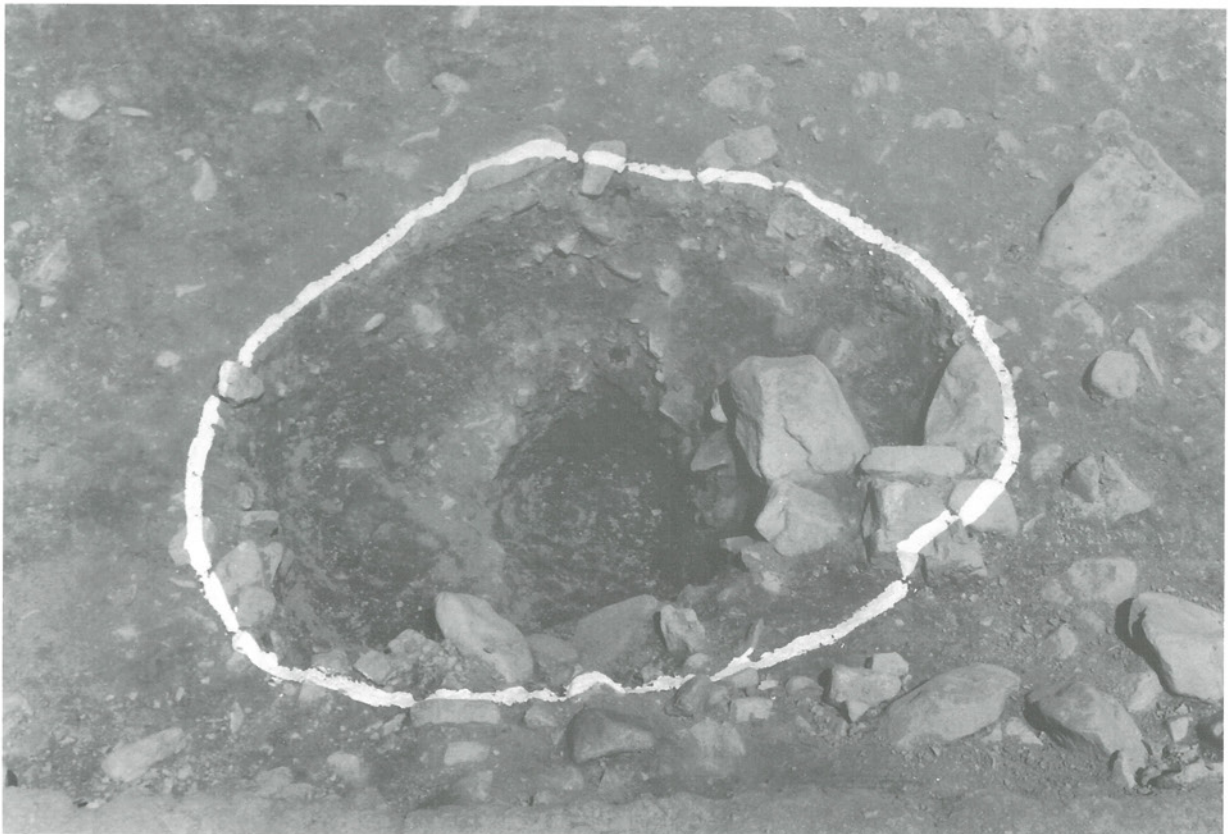


SH1001 (右)・SH1002 (左) 完掘状況 東より

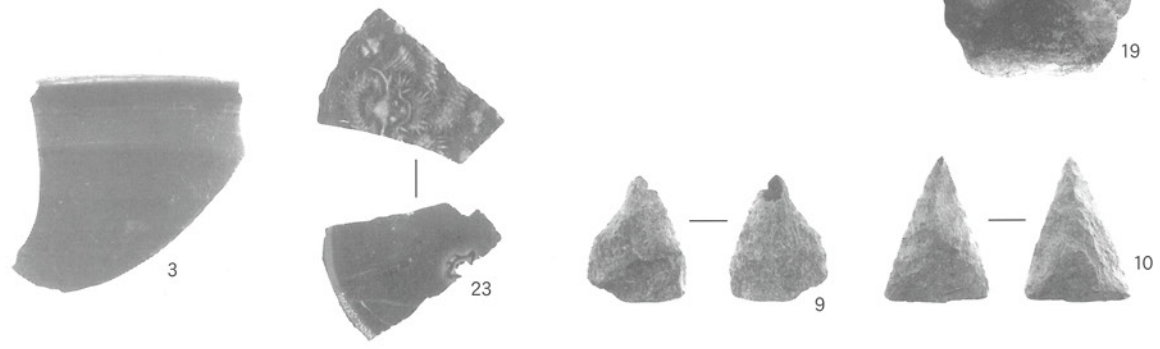
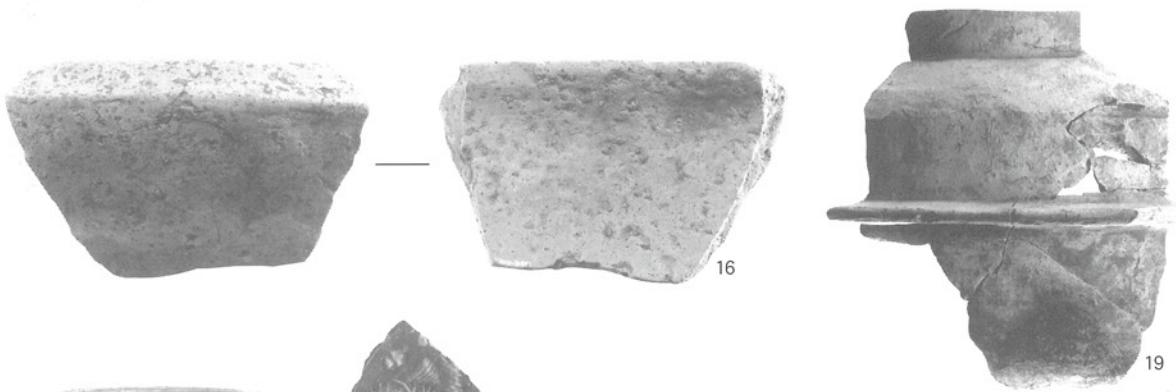
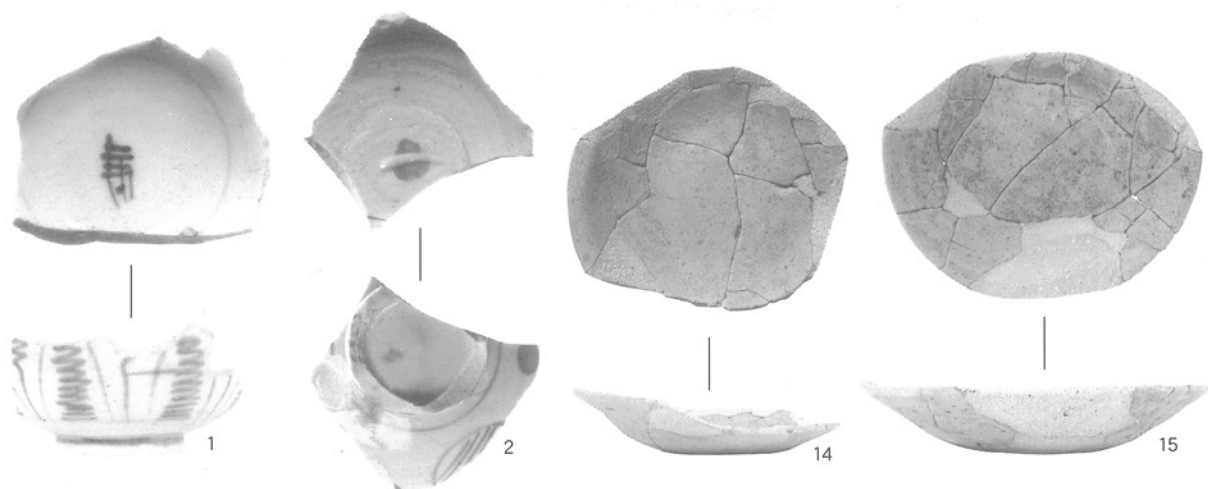
図版 6



SO1001完掘状況 南より

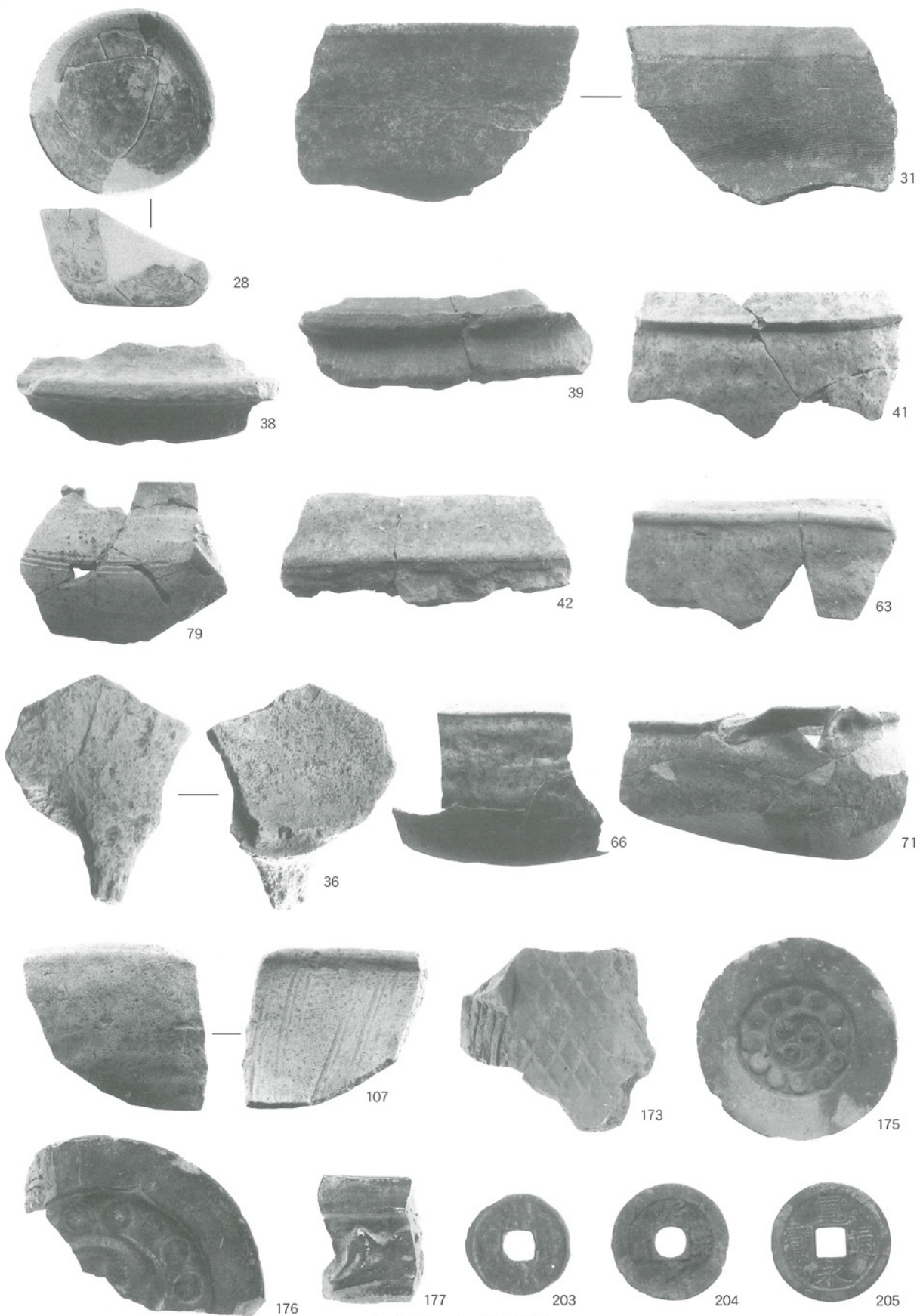


SK1001完掘状況 南より

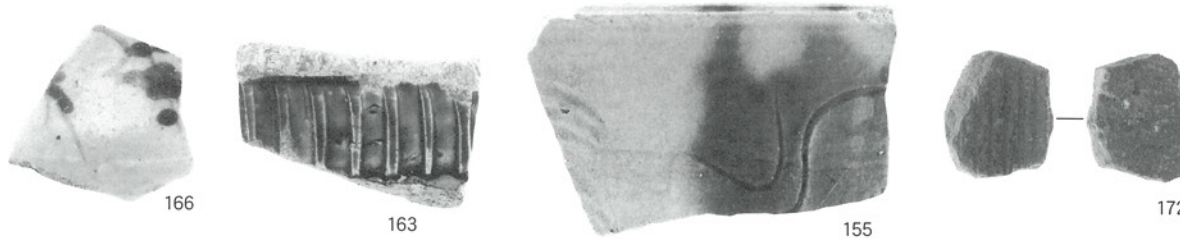
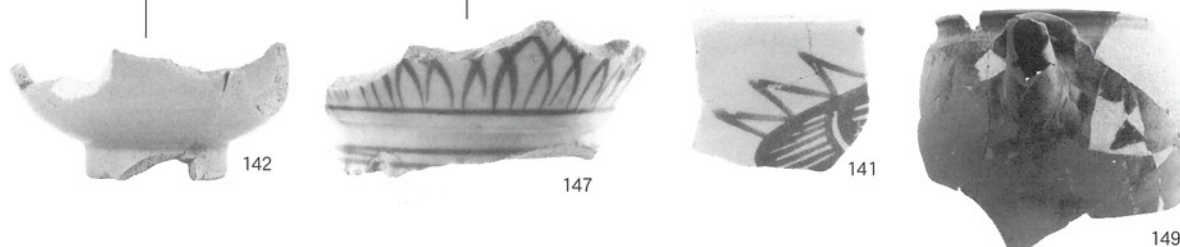
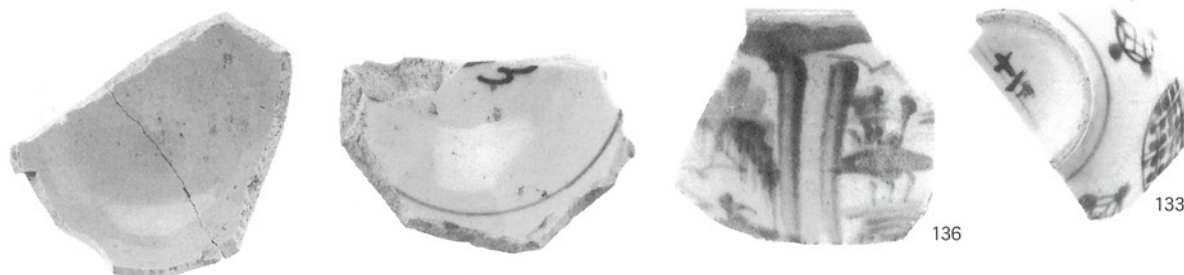
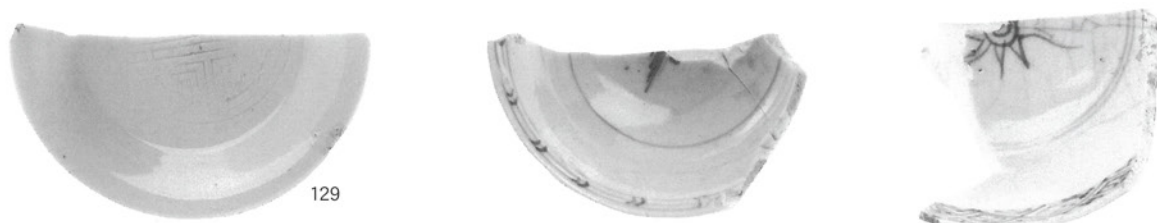


遺構内包含層 出土遺物(1)

图版 8



包含層 出土遺物(2)



包含層 出土遺物(3)

Ⅲ 試掘調査総括

1 太刀野山遺跡（Ⅰ）

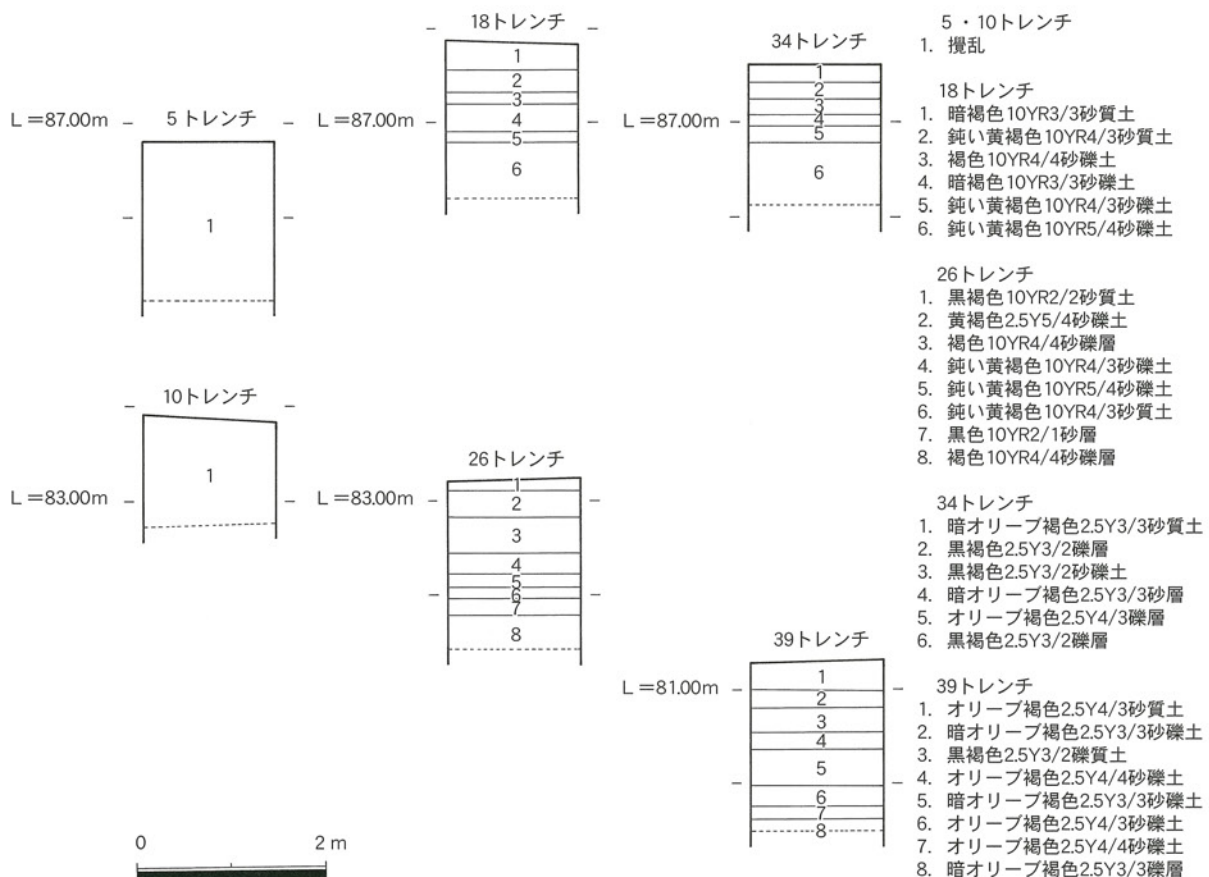
(1) 遺跡の位置（第2図）

太刀野山遺跡（Ⅰ）は、吉野川中流域北岸、花園遺跡の西側にある遺跡で、吉野川に向かって南流する孫十郎谷川によって形成された比較的小型の扇状地の扇頂部に位置し、標高は78m～93mを測る。現況はみかん畑である。分布調査では、土師器片・須恵器片・瓦質土器片・陶磁器片などの遺物が表採され、中世の遺構の存在が考えられた。

(2) トレンチの設定（第2図）

調査対象面積は、6,000m²である。調査区は果樹園（みかん畑）であり、試掘面積は調査対象面積の7.5%である450m²とし、2m×6mのトレンチを52ヶ所に設定した。（No.12は1m×10m、No.4・7・8・12・17～22・43は2m×3m、No.51は1.5m×20m、No.52は2m×10m）

(3) 基本層序（第1図）



第1図 基本土層柱状図



第2図 大刀野山遺跡 (I) 調査地位置図

調査区の北端には吉野川北岸用水が東西に走り、その工事に伴う排土でNo.1～13トレンチは攪乱を受けている。特にNo.13トレンチでは、地表下3.9mまで攪乱を受けている。No.14～52トレンチは、孫十郎谷川に伴う扇状地の押し出しの影響を受け、褐色の砂礫層と暗オリーブ褐色の礫層の互層となっている。浅い所では地表下約10cmから礫層が確認され、地表下約2mまで扇状地の影響がみとめられ、安定した土層は確認できなかった。

(4) 出土遺物 (第3図)

1は、土師質土器の杯である。体部は、底部より直線的に外上方に立ち上がる。体部と底部との境は、強いナデにより段を有する。内外面ともにナデ調整を施している。2・3は、土師質土器の釜である。

2は、口縁部直立し端部はやや尖り気味におさめる。口縁下部に断面三角形の短い鐳がつく。外面に炭化物が付着している。3は、内耳の釜である。体部は上位より内傾し、短い直立した口縁がつく。口縁端部は丸くおさめる。口縁部と体部との境に鐳をめぐらし、一部耳状に突出させ、内側に円孔を施す。

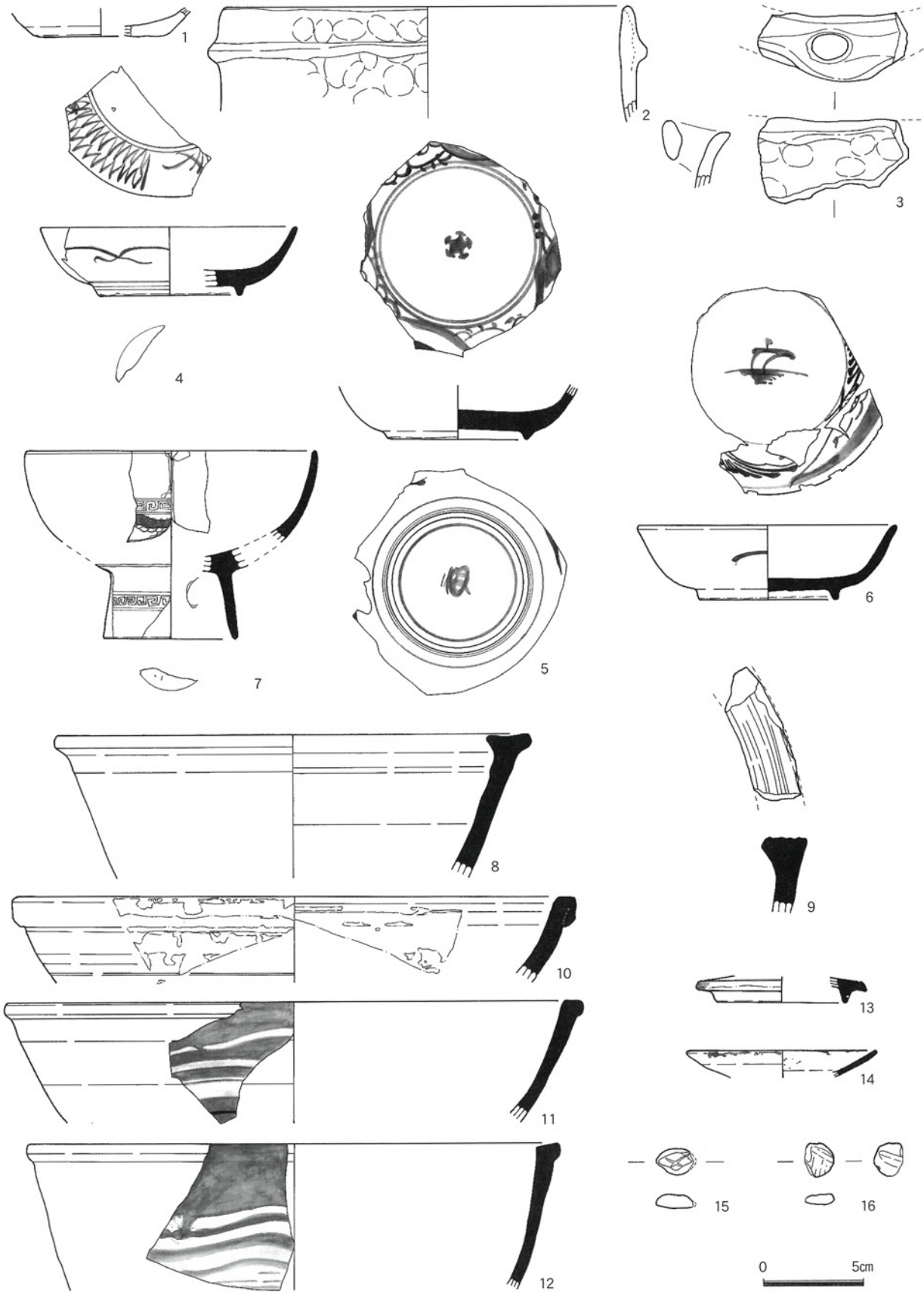
4は、肥前系の染付けの皿である。見込に溶着痕が有る。内面に区画文、外面に唐草文を描く。高台に圏線が有る。畳付部分に砂が付着する。

5は、肥前系の染付けの皿である。見込に五弁花文がコンニャク印判で押されている。内外面とも手書きの唐草文で、外面は圏線の中に大きくくずれた渦福の銘がある。また、高台に砂が付着している。6は、瀬戸美濃系の太白手の染付け陶器の皿である。内面の見込は帆掛け舟を、周りに扇面文を描く。外面は流水文で、また、高台は蛇の目凹形高台状で、畳付部分は無釉である。7は、肥前系の青磁染付け台付鉢である。内面は青磁、外面は染付けである。ガラス焼継ぎを行っており、高台内に赤色の焼継師の印が見られる。8は、無釉の焼締陶器の鉢である。内外面ともロクロを回しながら塗り土を施している。内面はロクロ目が顕著である。9は、土師質土器の甕または鉢である。口縁上端部に2条の沈線がある。胎土はにぶい黄橙色で結晶片岩を含み、硬質な土器である。

10は、肥前系の陶器の鉢である。内外面鉄釉で、内面に灰釉をかけていて、外側に折り返し口線がある。また、口縁上端部は無釉で環状の窯道具痕がある。胎土色は灰色で焼成が硬い。11は、肥前系の刷毛目片口である。内面は鉄釉、外面に白泥と鉄釉の刷毛目を施す。口縁上端部は無釉である。胎土色はにぶい橙で焼成が甘い。12は、肥前系の刷毛目の鉢である。内面は鉄釉、外面は白泥と鉄釉の刷毛目を施す。口縁上端部は無釉で、胎土色は明赤褐色で焼成が甘い。13は、土瓶の蓋である。外面は柿釉をかけ、口縁部に沈線を施している。また、口縁部には煤が付着している。14は、備前系の焼締陶器の灯明皿である。内外面ともロクロナデ調整、塗り土を施している。口縁部に灯芯油痕がある。胎土色は灰色で焼成は硬い。15・16は、泥面子の芥子面である。15は、十字文を施す。16は、欠損のため模様は不明である。他に銭種不明の銭貨が1枚出土している。

(5) まとめ

各トレンチの層序から調査区の西側部分については吉野川北岸用水工事の影響により、地表下約3mまで攪乱を受けていた。また調査区の北側部分では扇状地の押し出しの影響が地表下2mまで認められた。また、全てのトレンチより安定した層・遺物・遺構が検出されなかったことにより、この調査地点に遺構・遺物が残存する可能性は低いものと判断され、試掘調査のみで終了した。



第3图 出土遺物実測図

第1表 太刀野山遺跡（I）出土遺物観察表（土器）

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	42トレンチ 9層	土師質土器 杯	器高(1.5) 底径6.4	内外面ナデ。	体部は底部より外上方に直線的に立ち上がる。体部と底部との境は強いヨコナデにより段を有する。	焼成は良好。 1mm大の砂粒を少量含む。	橙色	
2	42トレンチ 9層	土師質土器 釜	口径16.7 器高(5.9) 鐳径19.8	内面ナデ。外面 ユビオサ工後ナ デ。	口縁部直立、口縁部下部に断面三角形の短い鐳がつく。	焼成は良好。 1mm～2.5mm大 の砂粒をやや 多く含む。	内面 にぶい黄 橙色 外面 橙色	外面に炭化 物附着。
3	42トレンチ 6層	土師質土器 内耳釜	—	内面板状工具に よるナデ。外面 ユビオサ工後ナ デ。	体部上位内傾し、短い直立した口縁 がつき口縁端部丸くおさめる。口縁 部と体部との境に鐳をめぐらし、一 部耳状に突出させ、内側に円孔を施 す。	焼成は良好。 2.5mm大の砂 粒を少量含む。	にぶい橙色	
4	41トレンチ	磁器 皿	口径13.2 器高3.6 底径7.5 高台高0.5		内面に区画文。見込に溶着痕あり。 外面は唐草文、高台に圏線有り。	緻密	灰白色	肥前系、畳 付部分に砂 が附着。
5	41トレンチ	磁器 皿	底径7.4 高台高0.45		見込に五弁花文のコンニャク印判。 外面は圏線の中に大きく崩れた渦福 の銘。内外面唐草文。	緻密	灰白色	肥前系、銘 有り、畳付 部分に砂が 附着。
6	トレンチ 9層	陶器 太白手の皿	口径13.4 器高3.9 底径7.4 高台高0.5		内面は扇面文を周りに、見込に帆掛 け舟を描く。外面は流水文。蛇ノ目 凹型高台状。		灰白色	瀬戸美濃系
7	41トレンチ	青磁染付 台付鉢	口径15 底径6.4		内面は青磁、外面は染付。ガラス焼 継ぎを施し、高台内に赤色の焼継師 の印。	緻密	灰白色	肥前系、ガ ラス焼継師 の印。
8	41トレンチ	陶器 鉢	口径24.4 器高(7.5)		口縁部は内外方に大きく突起、断面 が「T」字状となっている。焼締陶 器でロクロ目が顕著で、塗り土を施 す。		橙色	
9	No.42 トレンチ 砂質土層 2 m40 10層	土師質土器 鉢？ 甕？	口径35.2	内面ユビオサ工 後板状工具によ るナデ。外面ナ デ。	口縁部は内傾しながら内面に突出し、 外面に僅かに張り出す。口縁端部 に2条の沈線。	焼成は良好。 2.5mm大の砂 粒を少量含む。	にぶい黄橙色	
10	41トレンチ	陶器 鉢	口径28.8		内外面鉄釉で内面に灰釉をかける。 口縁上端部は無釉で環状の窯道具痕。 口縁部は外側に折り返している。	焼成は硬い。	灰色	肥前系
11	41トレンチ	陶器 片口鉢	口径29.6		内面は鉄釉、外面に白泥と鉄釉のハ ケ目を施す。口縁上端部は無釉。		にぶい橙色	肥前系
12	40トレンチ ①	陶器 鉢	口径27.4 器高(7.7)		外面に白泥と鉄釉のハケ目を施す。 口縁上端部は無釉。	焼成はあまい。	明赤褐色	
13	42トレンチ 砂質土層 2 m40 10層	陶器 土瓶の蓋	—		土瓶の蓋を灯明皿に転用している。 柿釉を外面にかける。外面の口縁部 に沈線。		にぶい橙色	柿釉、土瓶 の蓋を灯明 皿に転用、 灯芯油痕。
14	42トレンチ 6層	陶器 灯明皿	口径9.8		焼締陶器で、内外面に塗り土を施す。	焼成は硬い。	黄灰色	備前系、灯 芯油痕。
15	14トレンチ	泥面子の芥 子面	厚み0.7		表に十文字。		明赤褐色	
16	トレンチ 9層	泥面子の芥 子面	厚み0.6		模様は欠損のため不明。		橙色	



調査前風景



No.47トレンチ土層堆積状況

調査風景



太刀野山遺跡（Ⅰ）

2 太刀野山遺跡（Ⅱ）

(1) 遺跡の位置

太刀野山遺跡（Ⅱ）は、吉野川中流域北岸、太刀野山遺跡（Ⅰ）の西側に位置する。吉野川に向かって南流する堂の谷川によって形成された扇状地の扇頂部に位置し、標高は77m～89mを測る。現況は、畑と原野である。分布調査では、調査対象区周辺より弥生土器片、土師質土器片などが表採され遺跡の存在が予想された。

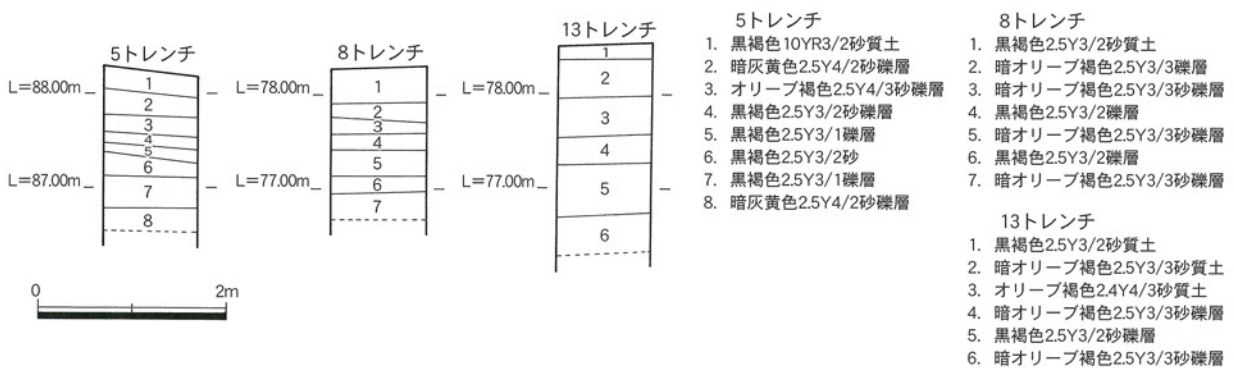
(2) トレンチの設定（第2図）

調査地は、調査前には畑および原野であり、二次にわたって試掘調査が行われた。調査対象面積は、合わせて4,560㎡である。一次調査は、1994年10月4日～10月7日に行われ、その調査対象面積は、2,160㎡で試掘調査面積は103㎡であった。1.5m×5mのトレンチを13ヶ所に設定した（No.5・10トレンチは2m×5m）。二次調査は、一次調査の未調査部分を対象として翌年1997年10月9日～10月11日に行われ、その調査対象面積は、2,400㎡で試掘調査面積は54㎡であった。2.0m×3.0mのトレンチを9ヶ所設定して調査された。

(3) 基本層序（第1図）

一次試掘調査では、No.1～10のトレンチは調査区南側に位置する堂の谷川の影響を受け、上層から下層にかけて砂層、砂礫層の互層を呈している。No.11～13のトレンチは上層の1・2層は川の影響を受け、3・4層は調査区北側の山土の押し出しの影響が認められ、地表下1.8mで地山が検出された。

二次調査では、設定した全てのトレンチで調査区の東側に位置する堂の谷川の堆積作用による影響を受け、黒褐色の砂層、オリーブ褐色などの砂礫層の互層状態を呈している。二次調査は、一次調査よりさらに山際に近いため、堆積状態もやや浅く、地表下1.3mで地山の灰黄褐色粘質土を検出した。



第1図 基本土層柱状図

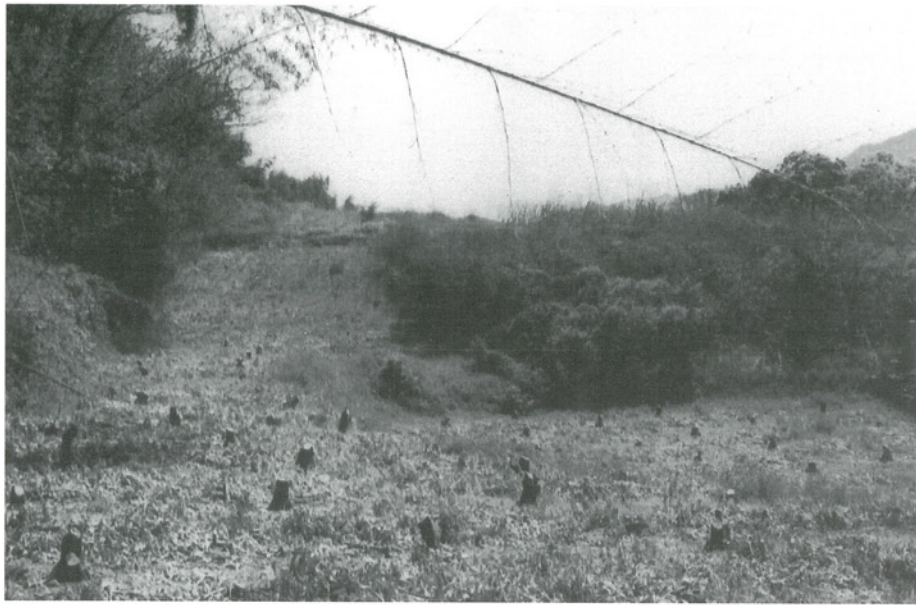
(4) まとめ

二次の試掘調査における各トレンチの堆積状態には多少の差はあるが、共通して堂の谷川の土の押し出しの影響を強く受けていることがうかがえ、遺構構築可能な安定した層は見られなかった。また、遺構および遺物は確認することができなかった。したがって、試掘対象地から遺構が検出される可能性は低いものと判断され、試掘調査のみで終了した。



第2図 太刀野山遺跡 (II) 調査地位位置図

図版 1



調査前風景



No. 1 トレンチ土層堆積状況

No.10 トレンチ土層堆積状況



太刀野山遺跡 (II)

3 宮ノ岡遺跡（I）

(1) 遺跡の位置

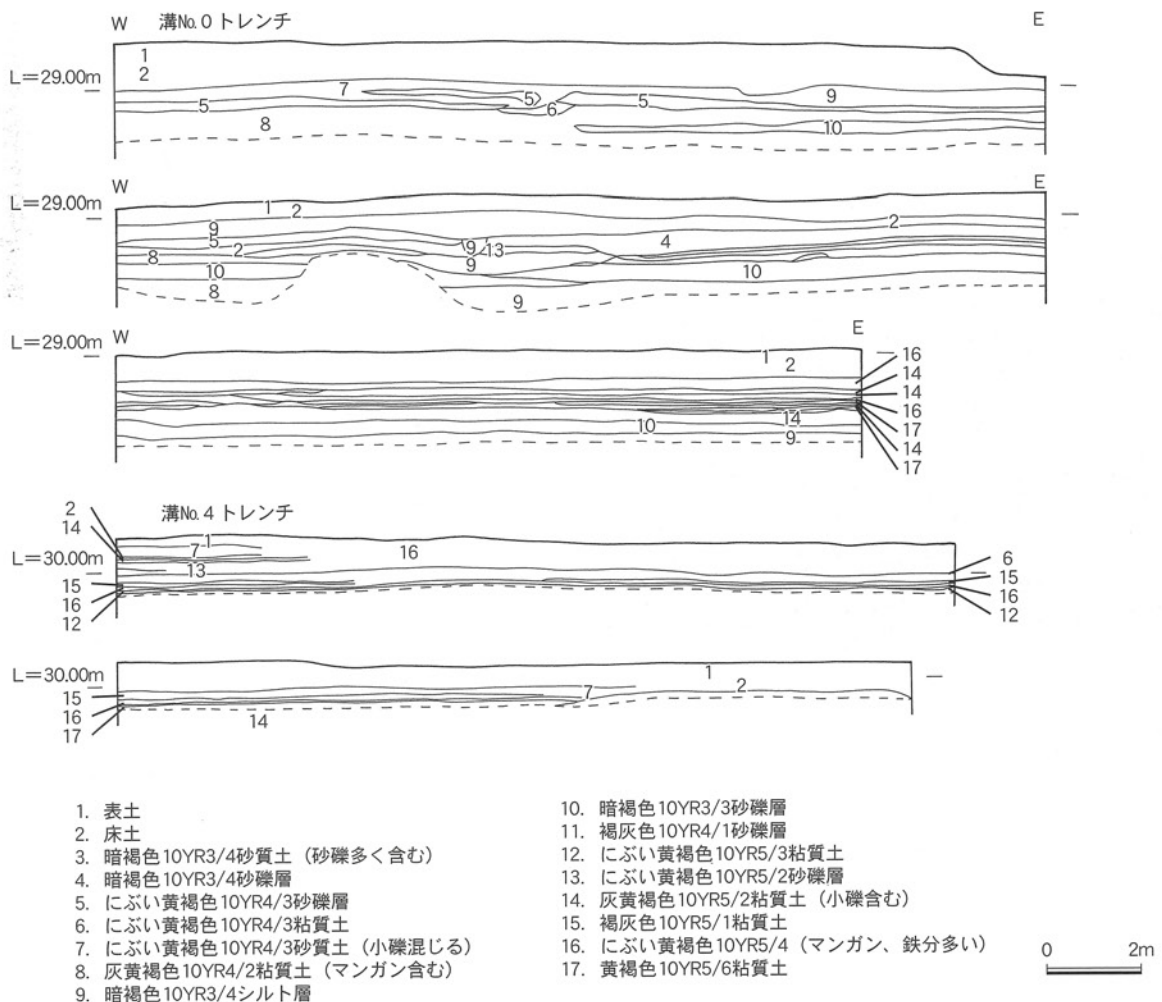
宮ノ岡遺跡（I）は、吉野川上流域北岸、三好郡三好町の東部、台遺跡の南に位置する。標高約30m、緩傾斜の河岸段丘上に位置する。近くに中世の遺構が検出された東原遺跡があるので遺構の存在が期待された。

(2) トレンチの設定（第2図）

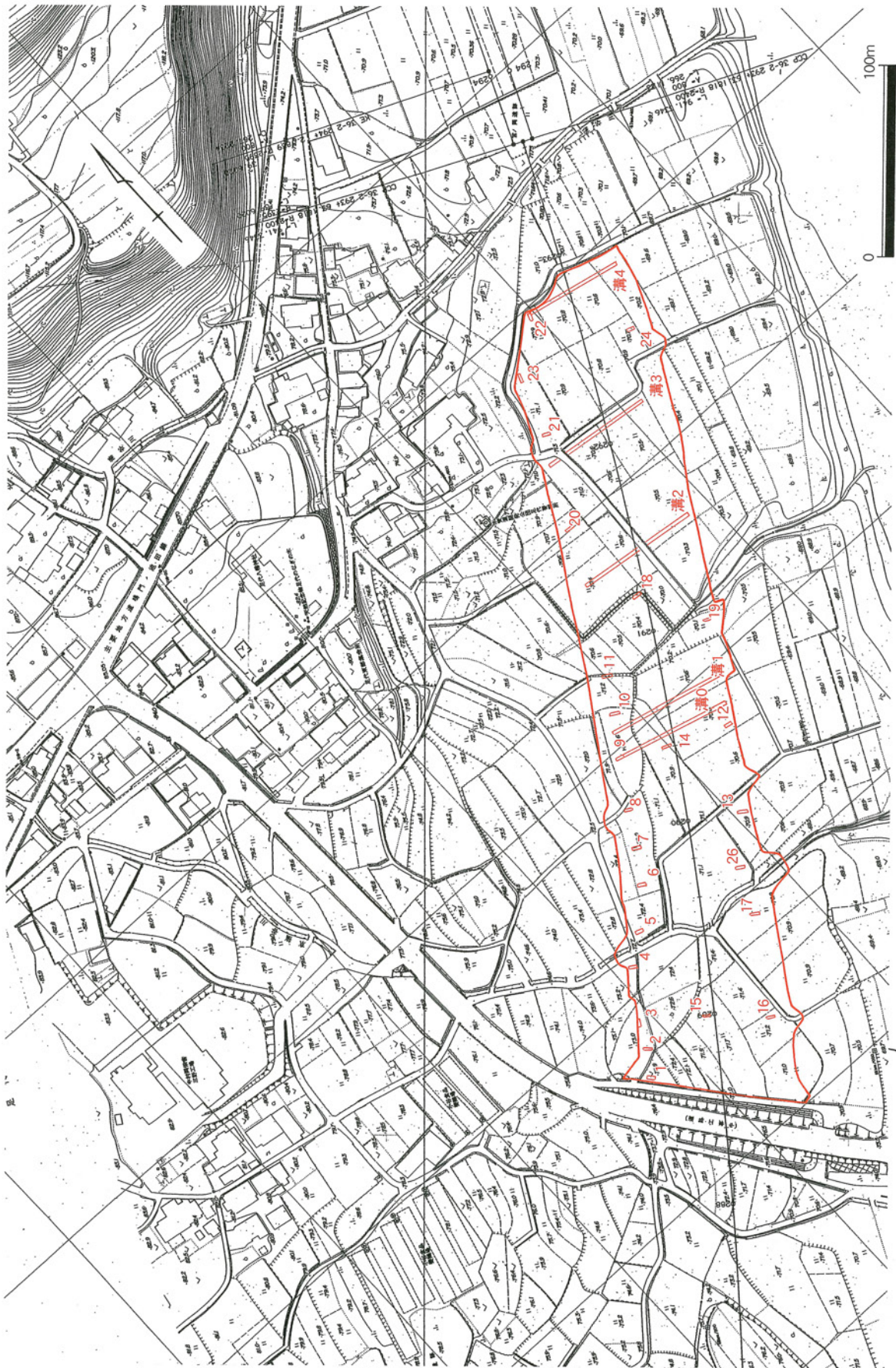
調査対象面積は、29,940㎡である。試掘面積は、調査対象面積の約3%である898㎡とし、2m×5mのトレンチ30ヶ所を設定した（溝No.0～4は、2m×65m）。

(3) 基本層序（第1図）

大きな洪水時には冠水するためか、堆積相互の対応関係は極めて複雑である。基本的には、耕作土床土、砂礫層および砂礫の混じり、黒褐色シルト層、砂礫層となっている。



第1図 基本土層図



第2図 宮ノ岡遺跡（I）調査地位置図

しかし、吉野川側の低い地域は砂礫層は少なく、黒褐色シルト層は深い部分にある。No.34トレンチ(溝)西側第9層で、弥生～古代と思われる土師質土器片を採集したものの、第11層より寛永通寶が出土し新しい遺物が下層より出土する層位の逆転現象が見られた。また、第3層以下の堆積層も途中で途切れたり消えたりしていた。溝No.0トレンチ西側第4層黒褐色シルト層より古墳時代と思われる須恵器片を採集したため、溝トレンチを設定したが、土層が安定しておらず、河川の氾濫などによる影響のため、複雑な堆積層を形成したものと考える。

(4) 出土遺物 (第3図)

1は、土師質土器の杯である。体部内面はナデ、外面は強いヨコナデにより底部との境に段を有する。底面は、回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。2は、須恵器の杯である。体部上位でややふくらみ、口縁部は僅かに外反する。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。内面および口縁部外面は黒色を呈する。3は、須恵器の台付杯である。体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。内外面ともロクロナデ調整を施し、外面は、体部の強いヨコナデにより底部との境に段を有する。4は、須恵器の杯身である。体部と底部の境は不明瞭。底面は静止糸切りである。5は、須恵器の椀である。体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部僅かに外反する。口縁端部は丸くおさめる。内外面ロクロナデ調整を施す。6・7は、白磁の碗である。6は、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は玉縁となる。横田・森田氏分類の大宰府型式分類Ⅳ類Ⅰaに属し、11世紀後半から12世紀のものである。胎土は灰白色である。7は、小片のため口径は不明であるが、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部を「く」の字状に外反する。同じく大宰府型式分類のⅥ類1bかⅧ類3に属する。11世紀後半から12世紀あるいは13世紀にかけてのものである。

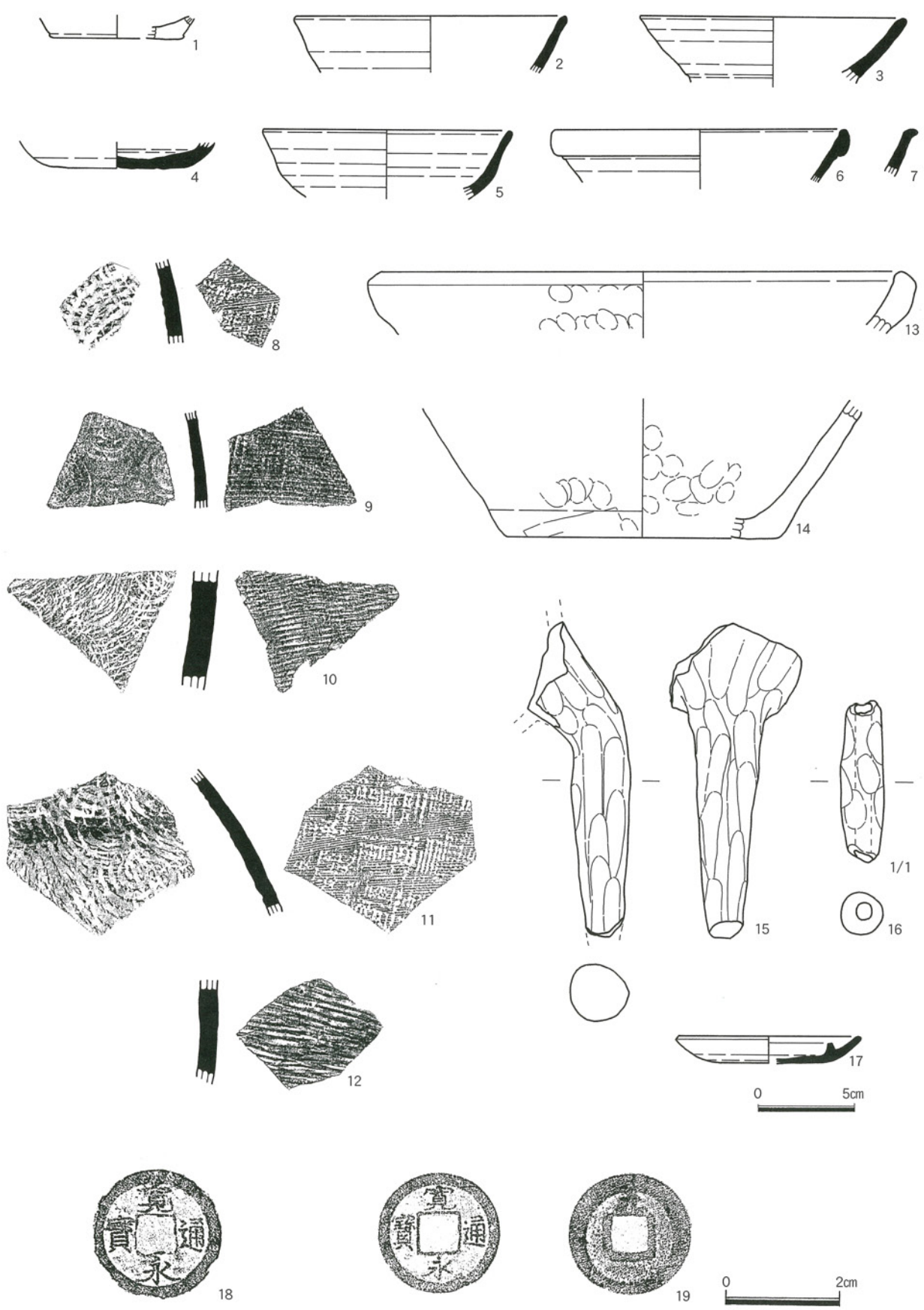
8～12は、須恵器の甕である。8・11は、内面は同心円文、外面はハケ後格子目タタキを施す。10は、内面は同心円文のタタキ目、外面はハケ後格子目タタキを施した後ナデ調整を施す。9は、内面は同心円文、外面はカキメ後格子目タタキ調整を施す。12は、内面ナデ、外面タタキ調整を施す。

13は、土師質土器の土鍋である。口縁上端部僅かに内傾し、肥厚、口縁端部方形におさめる。外面に煤が付着している。14は、土師質土器の捏鉢である。体部は底部より直線的に立ち上がる。調整は摩滅のため不明瞭であるが、内外面ともユビオサエ後ナデである。15は、土師質土器の鍋あるいは釜の脚部である。

16は、土師質土器の管状土錘である。17は、備前焼の灯明皿である。口縁端部より低い仕切りを有し、底部は回転糸切りである。18・19は、寛永通寶である。他に環状と棒状の金属製品が出土した。

(5) まとめ

今回の調査区は、中世の遺構が検出されている東原遺跡に近く、遺跡の存在が期待された。しかし、レベル的に約8mほど低く、洪水時冠水する地区であるためか、層位の逆転現象など、土層が安定しておらず、遺物は、かなり採集できるものの、遺物包含層および遺構面の確認はできなかった。したがって、今回の調査対象地区においては、試掘調査のみで終了した。



第3図 出土遺物実測図

第1表 宮ノ岡遺跡（I）出土遺物一覧表（土器）

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1		土師質土器 杯	底径6.9	内外面ナデ。底 部回転ヘラ切り。	体部は底部より直線的に立ち 上がる。体部外面の強いナデ により底部との境に段を有す る。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 を少量含む。	内面 橙色 外面 にぶい橙 色	
2	溝4トレンチ マンガン層	須恵器 杯	口径15.5	内外面ナデ。	体部上位でややふくらみ、口 縁部は僅かに外反する。内面 および口縁部外面は黒色を呈 する。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 を多く含む。	内面 灰黄色 外面 灰白色	
3	溝0トレンチ 5層	須恵器 台付杯	口径16.9	内外面口クロナ デ。	体部は直線的に外上方に立ち 上がり、口縁部はやや尖り気 味におさめる。高台がつく。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 を含む。	内面 灰白色 外面 黄灰色	
4	溝0トレンチ 5層	須恵器 杯身	底径7.0	内外面口クロナ デ。	体部は底部よりやや内彎しな がら立ち上がる。体部と底部 との境は不明瞭である。底面 は静止糸切り。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 を含む。	灰白色	
5	溝0トレンチ 5層	須恵器 碗	口径13.0	内外面口クロナ デ。	体部はやや内彎しながら立ち 上がり、口縁部僅かに外反す る。口縁端部は丸くおさめる。	焼成は良好。 3mm大の砂粒 を含む。	灰白色	
6	溝3トレンチ 3層	白磁 碗	口径15.2		体部は直線的に立ち上がり、 口縁部は玉縁となる。	緻密	灰白色	
7	9トレンチ4層	白磁 碗	—		体部は直線的に外上方に立ち 上がり、口縁部を「く」の字 状に外反する。	緻密	灰白色	
8	14トレンチ12層	須恵器	—	内面同心円文。 外面ハケ後格子 目タタキ。	体部はやや内彎気味に立ち上 がる。	焼成は良好。 精良。	灰白色	
9	溝0トレンチ 5層	須恵器 甕	—	内面同心円文後 ナデ。外面カキ メ後格子目タタ キ。	体部はやや内彎気味に立ち上 がる。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 を含む。	灰白色	
10	7トレンチ5層	須恵器 甕	—	内面同心円文。 外面ハケ後格子 目タタキ後ナデ。	体部はやや内彎気味に立ち上 がる。	焼成は良好。 精良。	灰色	
11	溝0トレンチ 5層	須恵器 甕	—	内面同心円文。 外面ハケ後格子 目タタキ。	体部はやや内彎気味に立ち上 がる。	焼成は良好。 精良。	灰白色	
12	22トレンチ11層	須恵器 甕	—	内面ナデ。外面 タタキ。	体部はやや内彎気味に立ち上 がる。	焼成は良好。 2mm大の砂粒 を含む。	灰白色	
13	6トレンチ4層	土師質土器 鍋	口径27.2	内面ユビオサエ 後ナデ。外面ナ デ。	口縁上端部僅かに内傾し、肥 厚、口縁端部方形におさめる。	焼成は良好。 4mm大の砂粒 を含む。	内面 橙色 外面 黒褐色	外面に煤付 着。
14	8トレンチ4層 5層	土師質土器 捏鉢	底径14.0	内外面ユビオサ エ後ナデ。	体部は底部より直線的に立ち 上がる。	焼成は良好。 1mm～2mm大の 砂粒を少量含 む。	浅黄橙色	
15	19トレンチ9層	土師質土器 鍋か釜の脚 部	—	ユビオサエ後ナ デ。	基部屈曲。身部円柱状、断面 円形。	焼成は良好。 1mm～3mm大の 砂粒を多く含 む。	橙色	
16	18トレンチ3層	土師質土器 管状土錘	最大長5.6 最大径1.5	ユビオサエ後ナ デ。	紡錘状の管状土錘。	焼成は良好。 1mm大の砂粒 を少量含む。	浅黄橙色	
17		陶器 灯明皿	口径9.4		口縁端部より低い仕切りを有 する。底部は回転糸切り。	緻密	赤褐色 素地 にぶい橙 色	備前灯明皿

第2表 宮ノ岡遺跡（I）出土遺物（金属製品）

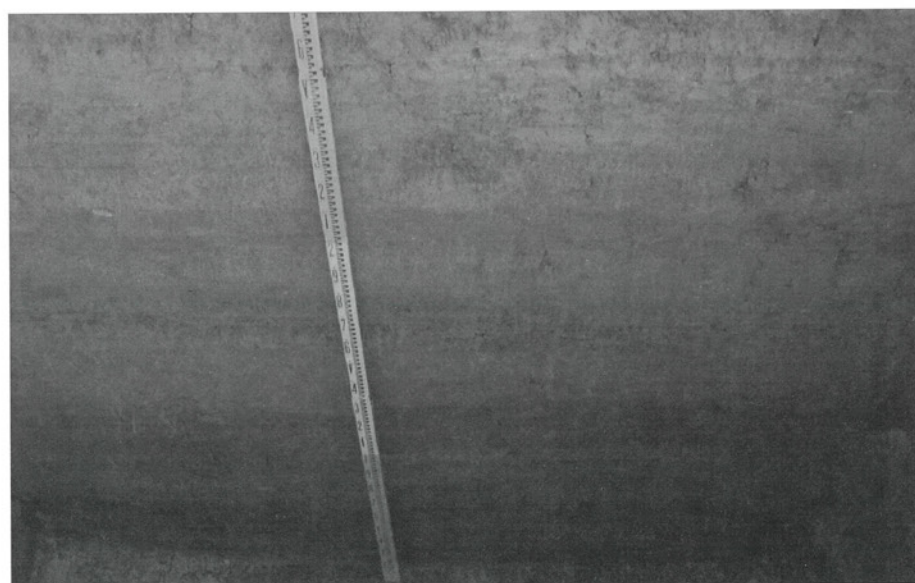
番号	調査区	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
18	22トレンチ14層 マンガン層の下2枚目	銭貨	-	-	-	-	寛永通寶
19	22トレンチ14層 マンガン層の下2枚目	銭貨	-	-	-	-	寛永通寶



調査前風景



No. 1 トレンチ
土層堆積状況



No. 12 トレンチ
土層堆積状況

宮ノ岡遺跡 (I)

4 宮ノ岡遺跡（Ⅱ）

(1) 遺跡の位置

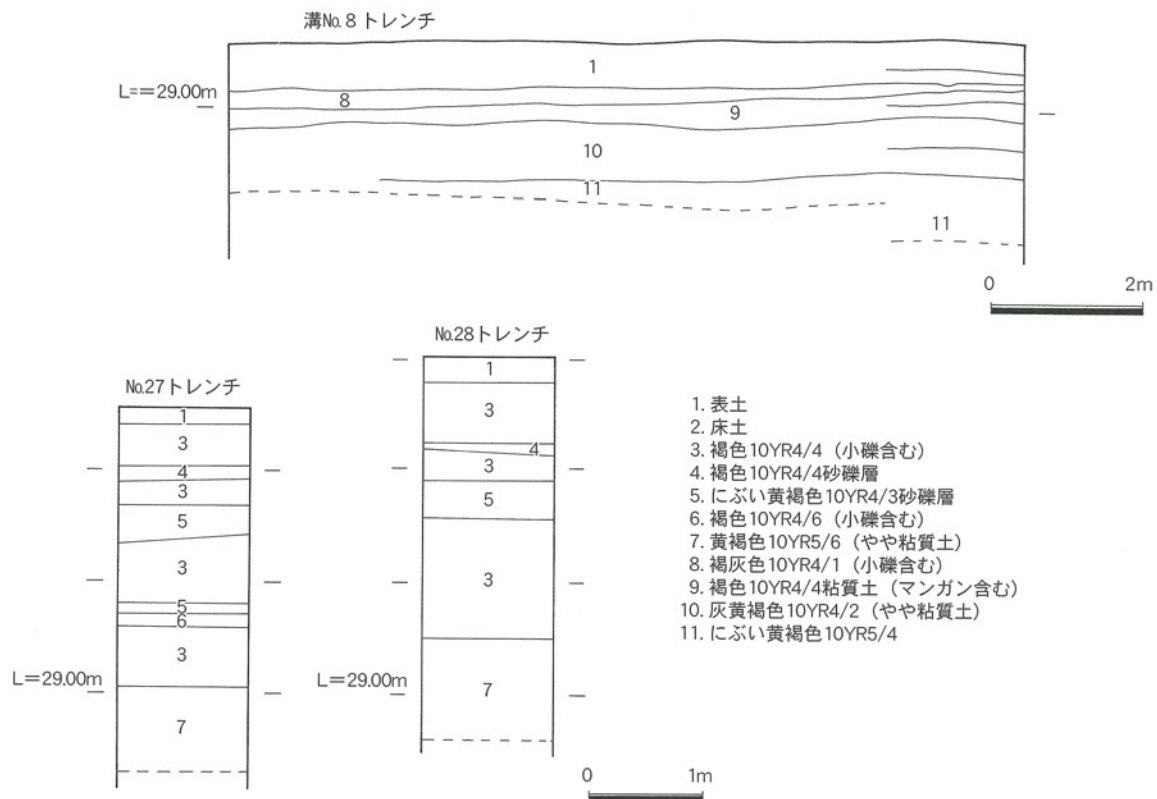
宮ノ岡遺跡（Ⅱ）は、宮ノ岡遺跡（Ⅰ）の北東に隣接しており、洪水の影響を受けるなど自然環境も似ている。また東原遺跡に隣接しているところから遺跡の存在が期待されていた。

(2) トレンチの設定（第2図）

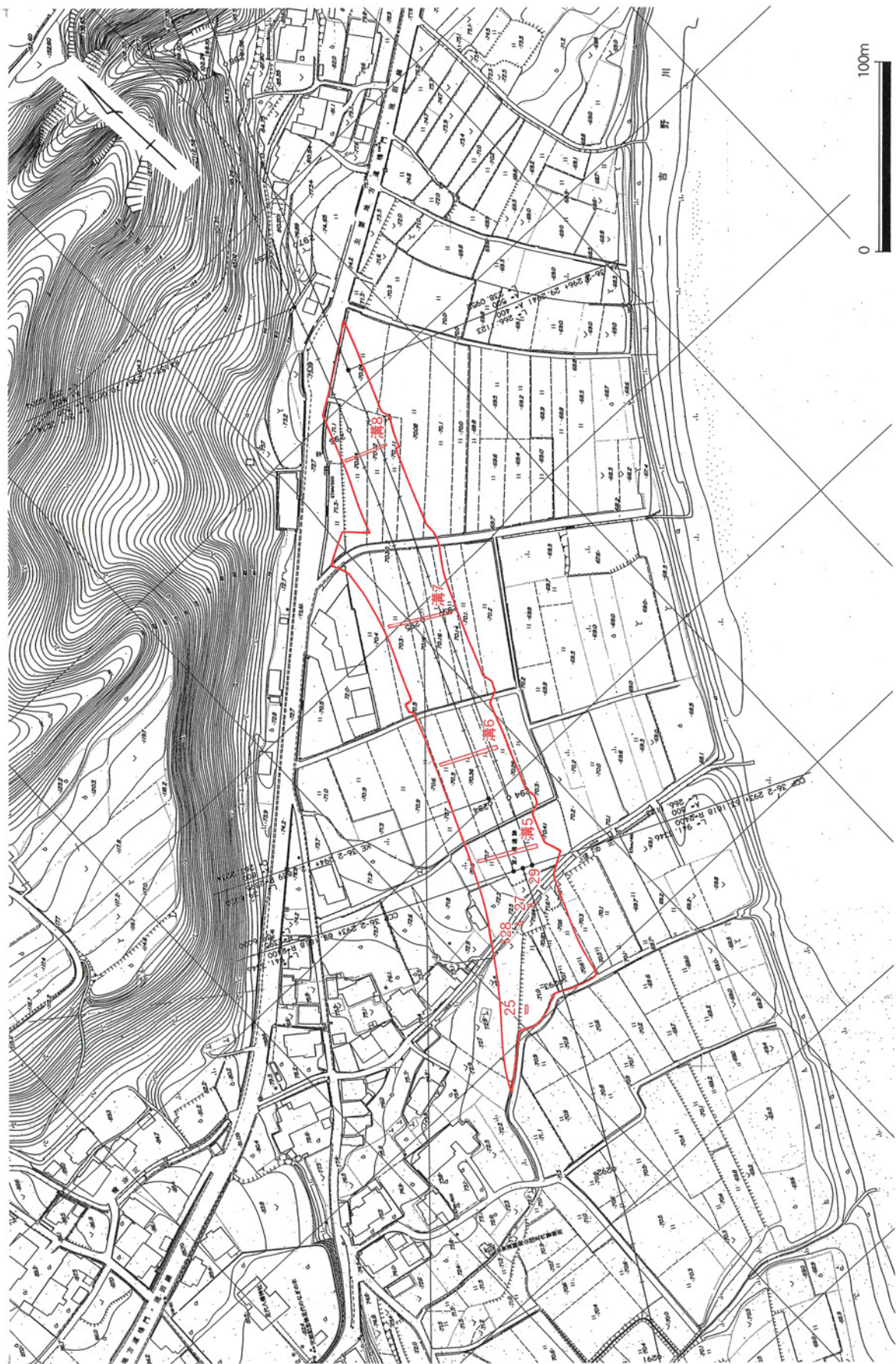
調査対象面積は、11,500m²である。試掘面積は、その3%である345m²で、2m×4mのトレンチ（No.25トレンチは2m×4m）を4ヶ所と溝2m×40m（溝No.8は、2m×35m）を4ヶ所設定した。トレンチ番号は、宮ノ岡（Ⅰ）遺跡の番号に続けた。

(3) 基本層序（第1図）

レベル的には、No.27～29トレンチ以外は宮ノ岡遺跡（Ⅰ）より少し低くなっている。No.25～28トレンチは、0.5cm～1cm程の礫を多く含む層が表土下2.5m程度堆積し、近世以前の遺物、遺構とも全く検出



第1図 基本土層図



第2図 宮ノ岡遺跡 (II) 調査地位置図

できなかつた。溝No.6～8トレンチ付近は、自然水路があつた場所で、水田を造成したのではないかと
思われ、床下もしまりがなく、表土下約2.0m以下はグライ化していた。溝No.5トレンチ北側第4層で、
中世と思われる土師質土器の皿を出土したが、第3層以下の堆積層の広がりも安定しておらず、途切れ
たり、消えたりしていたため、洪水の影響を受けたものと思われる。

(4) 出土遺物 (第3図)

1～3は、土師質土器の小皿である。1は、体部は底部より直線的に短く立ち上がり、口縁端部は丸
くおさめる。内面ナデ、外面強いヨコナデを施す。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整である。2は、体部
は底部より直線的に短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内面はユピオサエ後ナデ、外面はユピ
オサエ後板状工具によるナデ調整で、強いヨコナデで底部との境に段を有する。3は、体部は底部より
外上方へ内彎しながら立ち上がり、内外面ともナデ調整。底部と体部との境は強いヨコナデにより段を
有する。底部はヘラ切りである。内面は灰色、外面は浅黄橙色である。

4～12は、土師質土器の杯である。4は、口縁部は体部よりやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部
は丸くおさめる。5・8～12は、内面および見込部に強いヨコナデによる段が認められる。また、5・
8・9・10の底部は回転ヘラ切りで、11・12の底部はナデ調整である。6は、体部は、底部より直線的
に外上方に立ち上がる。体部と底部との境は不明瞭である。内外面とも丁寧なナデ調整を施す。7は、
体部は体部下位で少しふくらみ、外上方へやや反り気味に立ち上がる。内外面とも丁寧なナデ調整で、
外面は強いヨコナデにより底部がやや突出する。外面に黒斑がある。13・14は、土師質土器の釜である。
13は、口縁部は直立し、口縁端部は方形にまとめる。口縁下方に断面方形のしっかりとした鐳がつく。
内面および鐳部分はハケ、口縁部外面はハケ後ナデ調整を施す。鐳の下部分に煤が付着する。14は、口
径は不明であるが口縁部はやや外方向へ開き口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部下方に断面三角形
の鐳がつく。外面に煤が付着する。15は、土師質土器の釜の脚である。ケズリ後丁寧なナデ調整で、外
面に黒斑が見られる。16は、西村系の須恵器碗である。貼付高台で、畳付部分が外方向に張り出して
いる。内面はハケ、外面はナデ調整である。

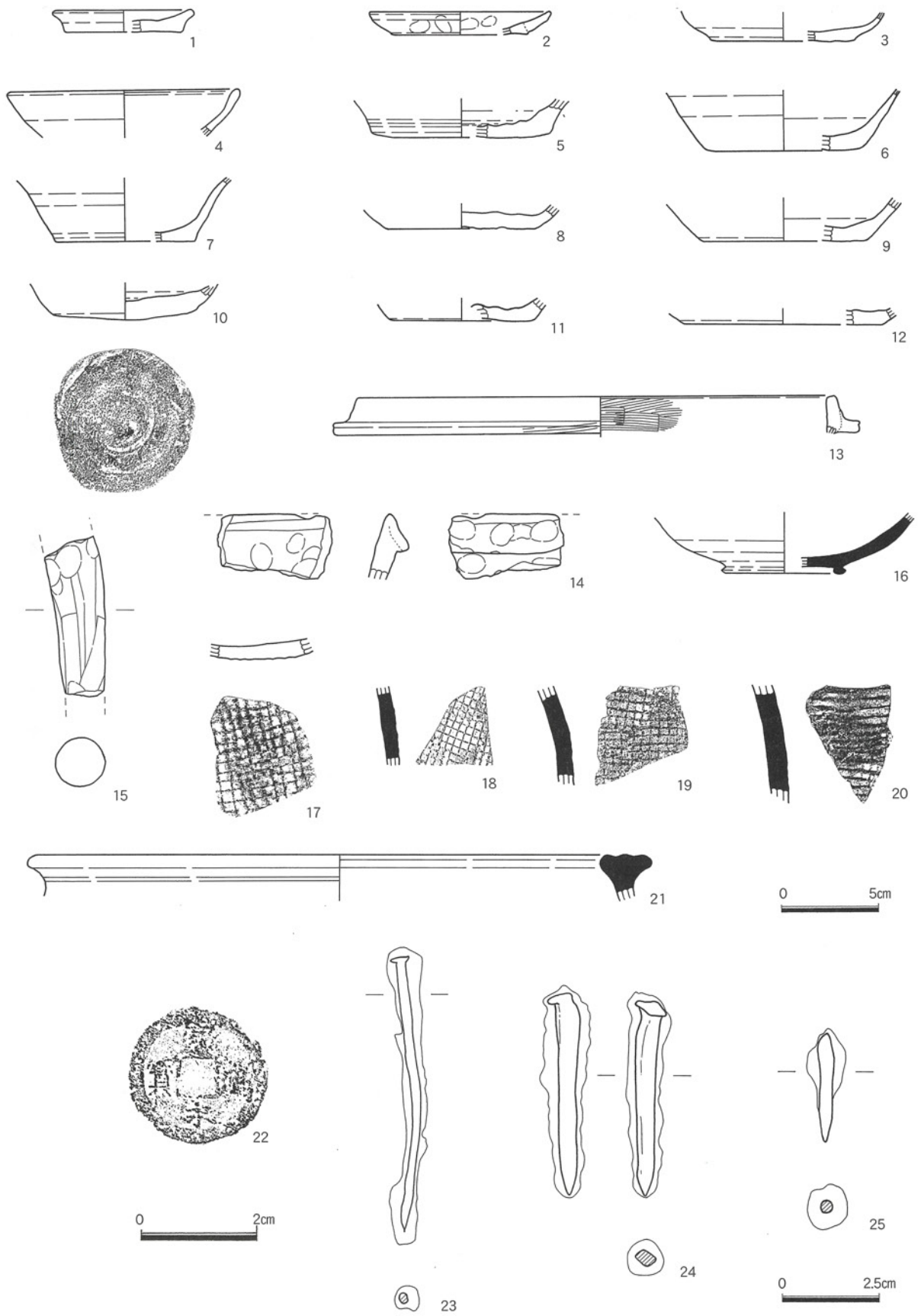
17は、土師質土器の鍋の底部である。内面はナデ、外面は格子目タタキを施す。18～20は、須恵器の
甕である。18・19は、内面ナデ、外面格子目タタキを施している。20は、内面は丁寧なナデ、外面はタ
タキ調整である。

21は、丹波焼の甕である。口縁端部は内外方に拡張され、その口縁上端部に2条の凹線状の沈線が入
る。胎土は灰白色で、白、黒色粒を多量に含む。

22は、銭貨で寛永通寶である。23～25は、金属製品で釘である。

(5) まとめ

今回の調査では、ほとんどの地点が吉野川および自然水路の氾濫に伴う堆積物に覆われる部分が多く、
安定した遺物包含層および遺構面の検出はできなかつた。唯一確認された中世遺物の包含層も面として
の広がりが認められず、また、それに伴う遺構面も確認されなかつた。東原遺跡に隣接していることも
あり遺構の存在が期待されたが、レベル的に低いこともあり、弥生～中世の土器片、須恵器片など少量
の遺物を出土しているものの、遺跡の存在する可能性は低いと判断し、試掘調査のみで終了した。



第3图 出土遗物实测图

第1表 宮ノ岡遺跡(Ⅱ) 出土遺物観察表(土器)

番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	溝5トレンチ 石列中	土師質土器 小皿	口径7.0 器高1.15 底径6.1	内外面ナデ。底 部回転ヘラ切り 後ナデ。	体部は底部より直線的に短く 立ち上がり口縁端部は丸くお さめる。	焼成は良好。	橙色	
2	溝5トレンチ 7層	土師質土器 小皿	口径5.3 器高1.2 底径7.0	内面ユビオサエ 後ナデ。外面ユ ビオサエ後板状 工具によるナデ、 接合痕。	体部は底部より直線的に短く 立ち上がり、口縁端部は丸く おさめる。強いヨコナデによ り底部との境に段を有する。	焼成は良好。	にぶい橙色	
3	溝5トレンチ P-1西側	土師質土器 小皿	底径7.5	内外面ナデ。底 部ヘラ切り。	体部は底部より外上方へ内彎 しながら立ち上がる。体部と 底部との境は強いヨコナデに より段を有する。	焼成は良好。	内面 灰色 外面 浅黄橙色	
4	27トレンチ 2層	土師質土器 杯	口径11.7	内外面ナデ。	口縁部は体部よりやや内傾し ながら立ち上がり、口縁端部 は丸くおさめる。	焼成は良好。	内面 明黄褐色 外面 橙色	
5	溝5トレンチ5 P-2東側	土師質土器 杯	底径9.2	内外面ヨコナデ。 底部回転ヘラ切 り後ナデ。	体部は底部より直線的に立ち 上がりその境は不明瞭である。 内面および見込部に強いヨコ ナデによる段が有る。	焼成は良好。	内面 にぶい橙 色 外面 褐灰色	
6	溝5トレンチ SP1001	土師質土器 杯	底径6.9	内外面ナデ。	体部は底部より直線的に外上 方に立ち上がりその境は不明 瞭である。	焼成は良好。	内面 にぶい橙 色 外面 明黄褐色	
7	溝5トレンチ SP1001西側	土師質土器 杯	底径7.0	内外面ナデ。	体部は体部下位で少しふくら み、外上方へやや反り気味に 立ち上がる。底部外面は強い ヨコナデによりやや突出する。	焼成は良好。	内面 橙色 外面 にぶい橙 色	外面に黒斑。
8	溝5トレンチ P-1	土師質土器 杯	底径7.6	内外面ヨコナデ。 底部ヘラ切り。	体部は底部より直線的に外上 方に立ち上がる。内面および 見込部に強いヨコナデによる 段が有る。	焼成は良好。	にぶい橙色	
9	溝5トレンチ 6層	土師質土器 杯	底径8.8	内外面ヨコナデ。 底部回転ヘラ切 り。	体部は底部より直線的に外上 方に立ち上がる。内面に強い ヨコナデによる段が有る。	焼成は良好。	橙色	
10	溝5トレンチ	土師質土器 杯	底径7.5	内面ユビナデ。 外面ナデ。底部 回転ヘラ切り。	体部は底部より直線的に立ち 上がりその境は不明瞭である。 内面見込部に指頭によるナデ が有る。	焼成は良好。	内面 灰白色 外面 浅黄橙色	
11	溝5トレンチ SP1002東側	土師質土器 杯	底径7.2	内外面ヨコナデ。	体部は底部より直線的に外上 方に立ち上がる。内面見込部 に強いヨコナデによる段が有 る。	焼成は良好。	にぶい橙色	
12	溝8トレンチ 7層	土師質土器 杯	底径10.2	内面板状工具に よるナデ。外面 ナデ。	体部は底部より直線的に立ち 上がりその境はやや不明瞭で ある。内面見込部は強いヨコ ナデによる段が有る。	焼成は良好。	橙色	
13	溝5トレンチ P-2東側	土師質土器 釜	口径23.2	内外面ヨコナデ、 接合痕。	口縁部は直立し、口縁端部は 方形におさめる。口縁部下方 に断面方形のしっかりとした 鐙がつく。	焼成は良好。	にぶい橙色	内外面に黒 斑、外面に 煤附着。
14	溝5トレンチ SP1002東側	土師質土器 釜	—	内外面ユビオサ エ後板状工具に よるナデ。	口縁部はやや外方向へ開き、 口縁端部は尖り気味におさめ る。口縁部下方に断面三角形 の鐙がつく。	焼成は良好。	内面 浅黄橙色 外面 にぶい黄 橙色	外面に煤付 着。
15	溝5トレンチ SP1002東側	土師質土器 釜脚	長さ8.4 幅2.6 厚さ2.5	外面ケズリ、ユ ビオサエ後ナデ。	円柱状を呈する。	焼成は良好。	にぶい黄橙色	黒斑あり。

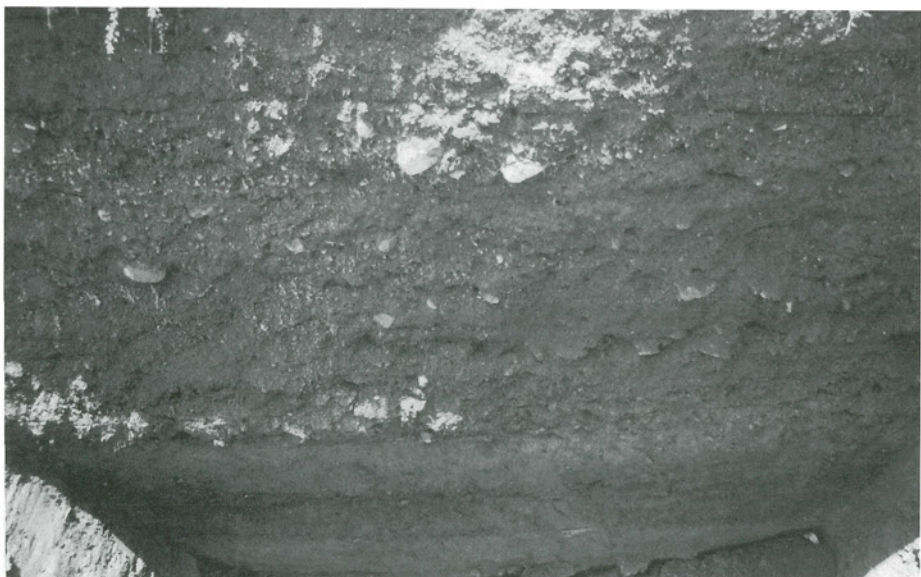
番号	遺構名 出土地点	器種	法量(cm)	成形・調整	形態の特徴	胎土・焼成	色調	備考
16	溝8トレンチ 8層	須恵器 椀	高台径6.35 高台高0.35	内面ハケ。外面 ナデ。	体部は底部よりやや内彎しな がら立ち上がる。貼付高台で、 畳付部分が外方向に張り出し ている。	焼成は良好。	灰白色	西村系
17	溝5トレンチ SP1002東側	土師質土器 鍋	—	内面ナデ。外面 格子目タタキ。	底部やや丸みを帯びる。	焼成は良好。	橙色	
18	溝5トレンチ P-2東側	須恵器 甕	—	内面ナデ。外面 格子目タタキ。	体部やや内彎しながら立ち上 がる。	焼成は良好。	灰色	
19	溝5トレンチ 石列中	須恵器 甕	—	内面ナデ。外面 格子目タタキ。	体部やや内彎しながら立ち上 がる。	焼成は良好。	灰色	
20	溝5トレンチ P-2東側	須恵器 甕	—	内面板ナデ。外面 タタキ(3本/ cm)。	体部やや内彎しながら立ち上 がる。		灰白色	
21	溝5トレンチ 4層	陶器 甕	口径31.0		口縁端部は内外方に拡張され る。口縁上端部に2条の凹線 状の沈線が入る。		灰白色	丹波焼

第2表 宮ノ岡遺跡(Ⅱ) 出土遺物観察表(金属製品)

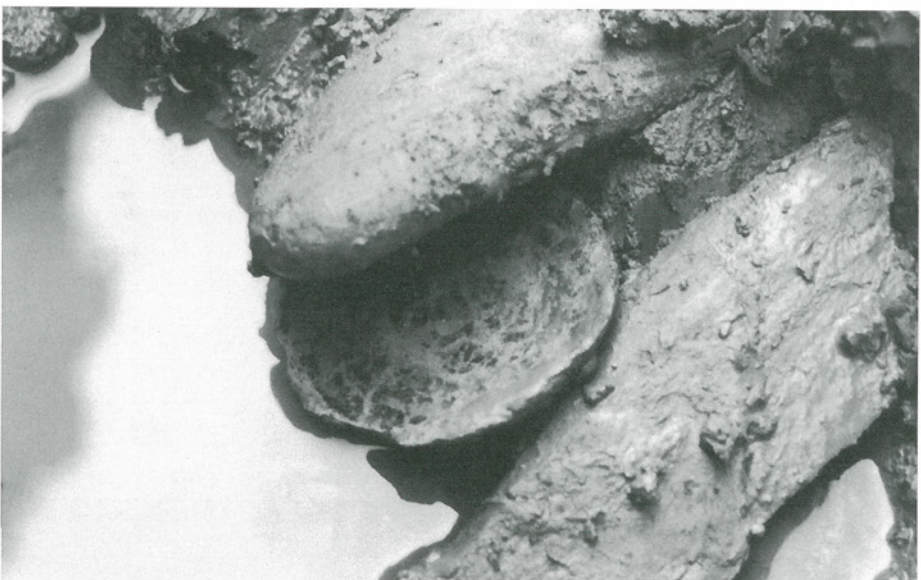
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
22	溝5トレンチP-2	銭貨	—	—	—	—	寛永通寶
23	25トレンチ1, 2層	釘	7.15	0.50	0.25	8.05	
24	溝5トレンチP-1	釘	5.25	0.50	0.50	10.48	
25	27トレンチ、2層	釘	2.28	0.32	0.30	4.08	



調査前風景



No. 29トレンチ
土層堆積状況



溝 No. 5 トレンチ
遺物出土状況

宮ノ岡遺跡 (II)

5 台 遺 跡

(1) 遺跡の位置

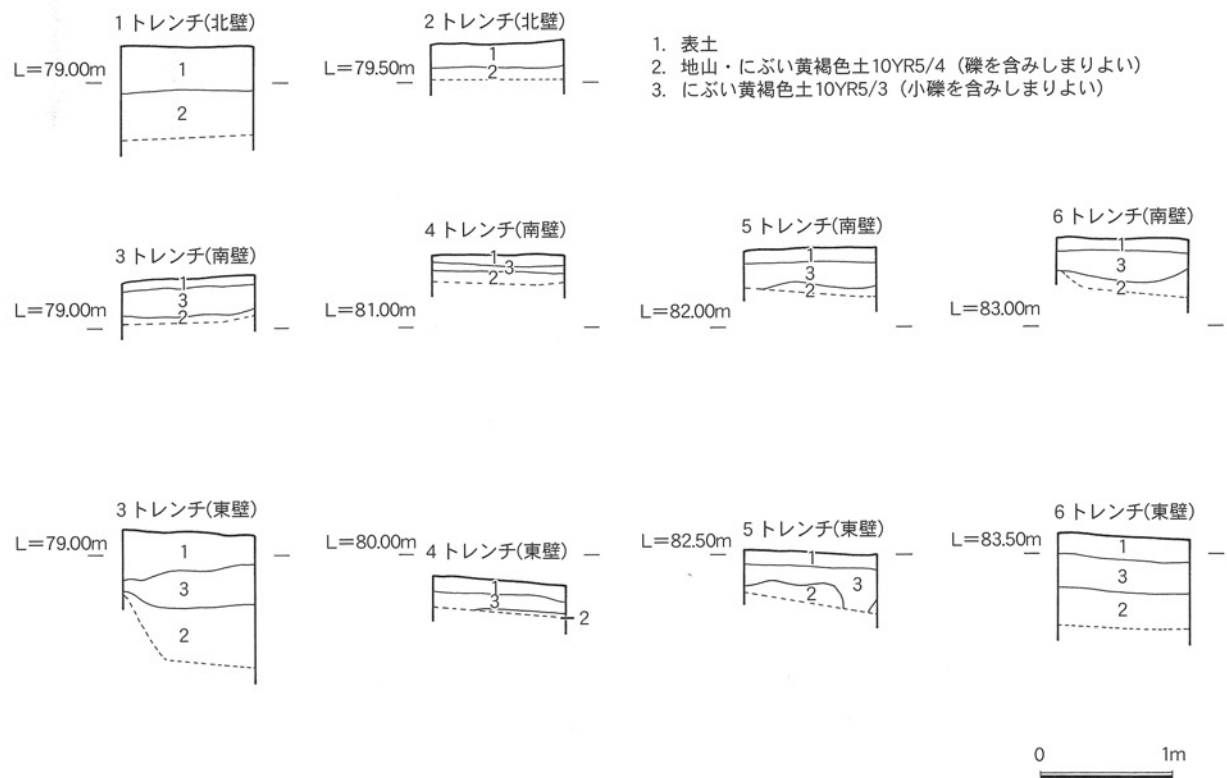
台遺跡は、三好郡三好町の東部、吉野川北岸上流域、標高約80m前後の中位段丘上の南へ緩傾斜した高台に位置する。調査地は、戦国期1582年まで三好氏の居城となっていた足代城に近く、分布調査でも須恵器片や土師器片が採集され中世の遺跡が期待されていた。

(2) トレンチの設定 (第2図)

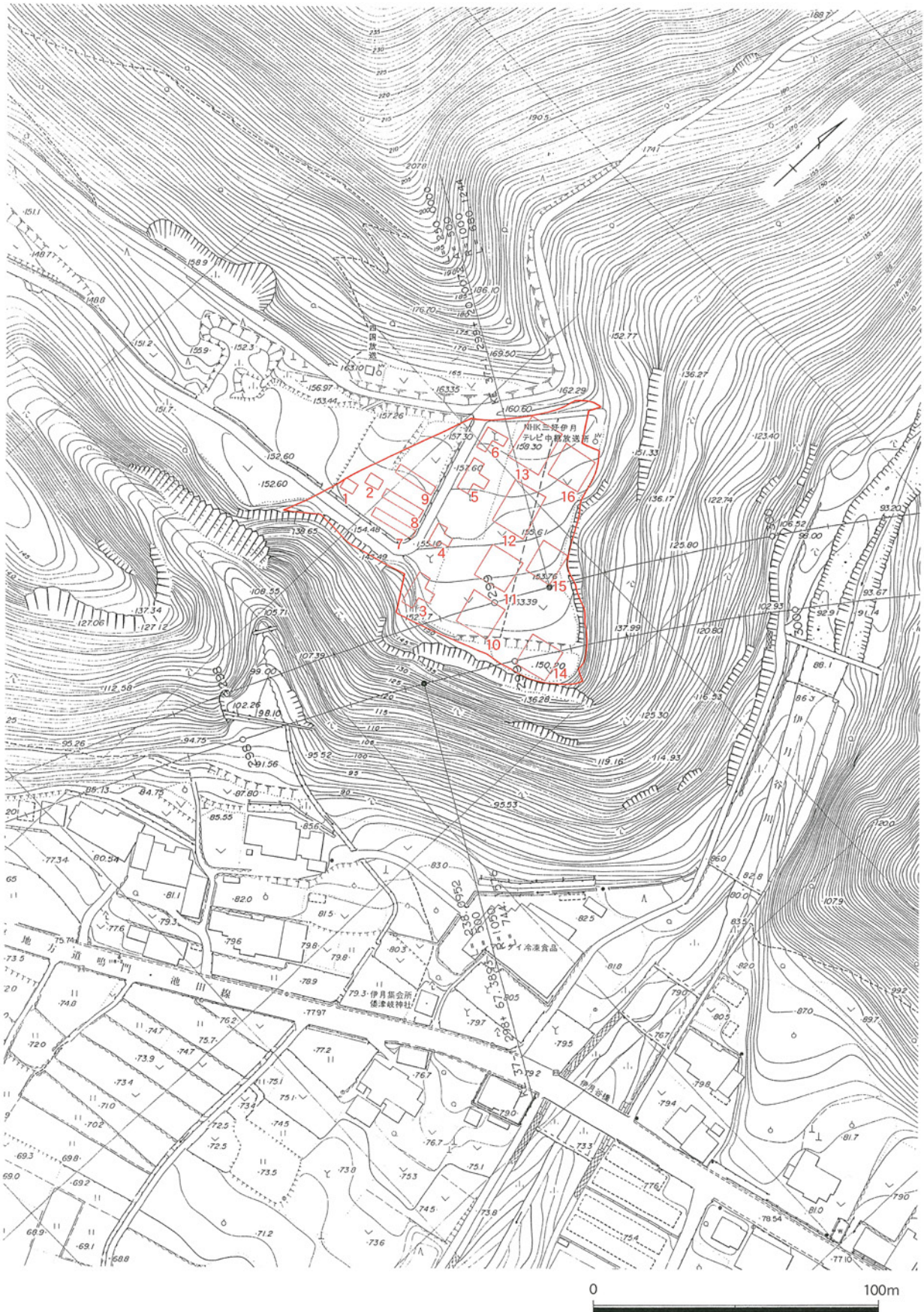
調査地は、調査前は畑として利用されていた。調査対象面積は、6,015m²である。試掘面積は調査対象面積の20%である1,203m²とした。1m×8mのトレンチを6ヶ所に設定 (No.1・2は2m×4m) して調査を行った。

(3) 基本層序 (第1図)

第1層は表土である。第2層はにぶい黄褐色土で礫を含み、しまりがよい地山である。第3層はにぶい黄褐色土で小さな礫を含みしまりがよい。No.1・2トレンチ、No.3・4・5・6トレンチは表土直下は地山となっており、No.7・8・9・10・11・12・13・14・15・16トレンチは表土がなく地山が露出していたため精査を行った。



第1図 基本土層柱状図

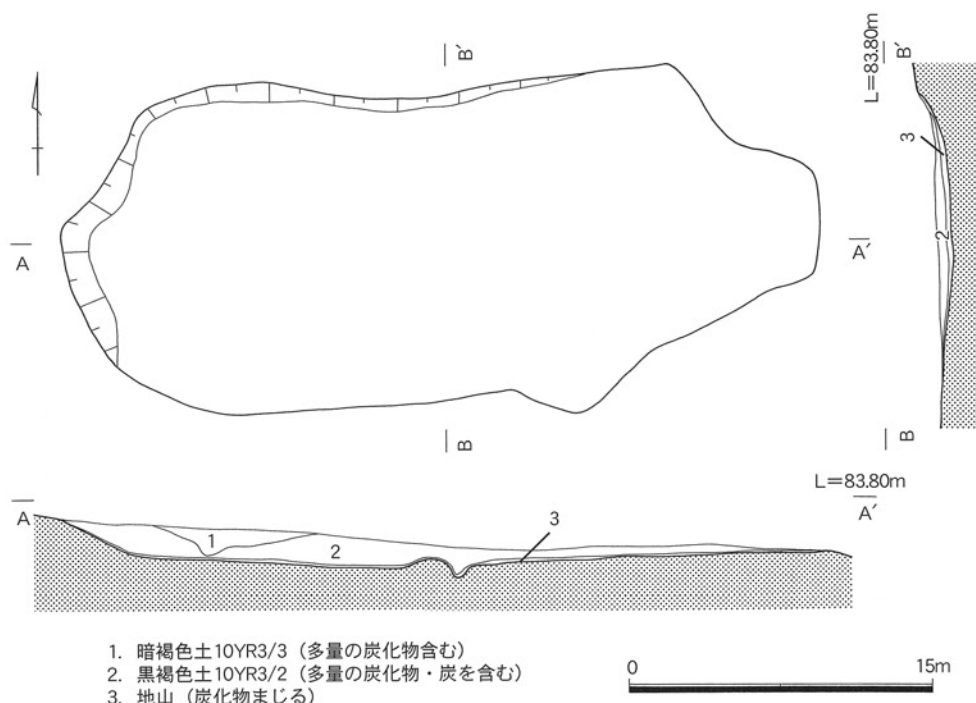


第2図 台遺跡調査地位置図

(4) 出土した遺構と遺物

炭焼き窯跡 (SQ1001) (第3図)

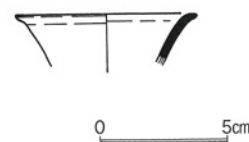
今回の調査地点No.13トレンチから明治期以降と思われる炭焼き窯跡 (SQ1001) を検出した。東西に長軸約3.8m、南北に短軸1.6m、深さ約0.16mを測る。しかし、表土が削平・搬出されていたため特に深さは正確に計測できなかった。覆土は3層で、1層は暗褐色土で多量の炭化物を含む。2層は、黒褐色土で多量の炭化物と炭を含む。3層は、地山で炭化物が混じる。遺物は、炭の破片など多量の炭化物のみであった。



第3図 SQ1001実測図

出土遺物 (第4図)

肥前系の磁器小杯である。口径6.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部外反、口縁端部尖り気味におさめる。胎土は緻密で素地および表面は灰白色である。



第4図 SQ1001出土遺物実測図

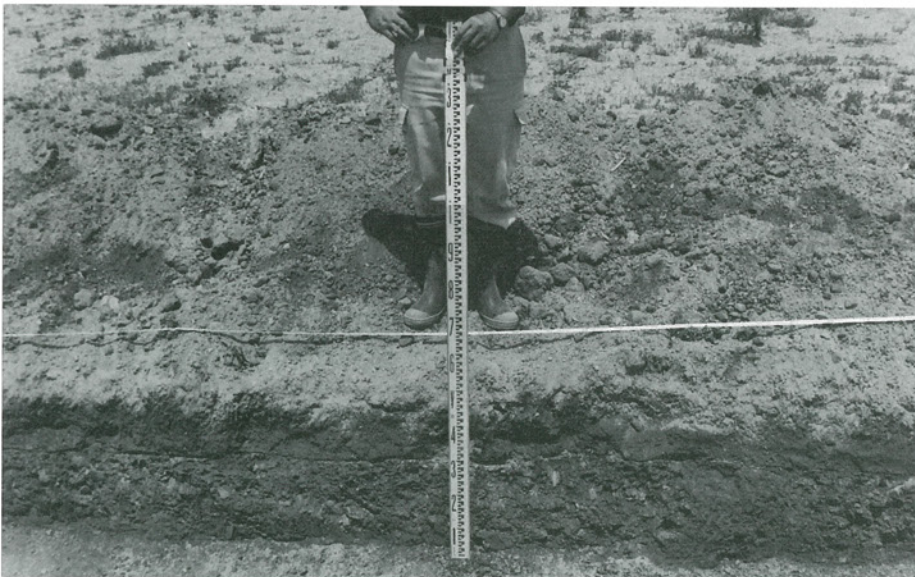
(5) まとめ

今回の調査地点では、戦国期1582年まで三好氏の居城であった足代城に近く、分布調査でも須恵器片や土師器片が採集され、中世の遺跡の存在が期待されていたが、調査地の表土の3/4は削平、搬出されていたため、近世以前の遺物包含層、遺構面とも確認できなかった。また、遺物も少量の近世陶磁器片が採集されたのみで、これらも二次的な混入と考えられる。したがって、遺跡の存在する可能性は希薄であると判断し試掘調査で終了した。

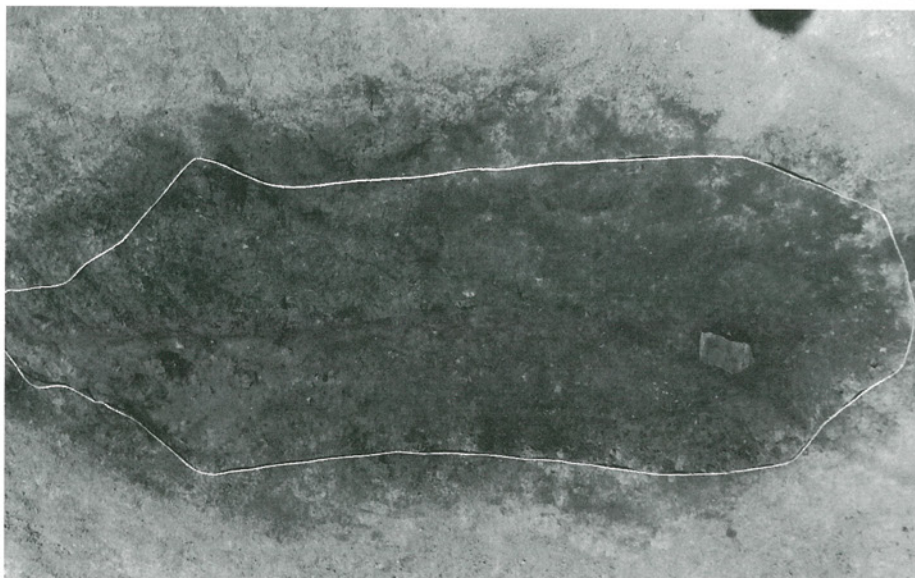
図版 1



調査前風景
西より



No. 1 トレンチ
土層堆積状況



SQ1001
完掘状況

台 遺 跡

報 告 書 抄 録

ふりがな	はなぞのいせき しくつちょうさそうかつ							
書名	花園遺跡 試掘調査総括							
副書名	四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	22							
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第 42 集							
編著者名	烏野美子 貞野保仁							
編集機関	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター							
所在地	〒779-0108 板野郡板野町犬伏字平山86番2 TEL 088-672-4545							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はな ぞの 園	とくしまけん みよしぐん 徳島県三好郡 みよのちようおおあざ た 三野町大字太 ちのあざはなぞのくぼほか 刀野字花園窪他	36481		34度	133度	1995. 6. 5~1995. 6. 7	4,345m ²	四国縦貫 自動車道 建設に伴 う発掘
				2分	57分	1995. 9. 12~1995. 9. 29	25,255m ²	
				44秒	30秒	1996. 4. 3~1996. 9. 30	3,100m ²	
た ちのやま い ち 太刀野山(I)	とくしまけん みよしぐん 徳島県三好郡 みよのちようあざまごじゅう 三野町字孫十 ろうだにほか 郎谷他	36481		34度	133度	1994. 5. 9~1996. 5. 23	6,000m ²	四国縦貫 自動車道 建設に伴 う発掘
た ちのやま に 太刀野山(II)	とくしまけん みよしぐん 徳島県三好郡 みよのちようた ちの 三野町太刀野 あざにしくぼほか 字西久保他	36481		34度	133度	1994. 10. 4~1994. 10. 7 1995. 10. 9~1995. 10. 11	2,160m ² 2,400m ²	
み やの お か い ち 宮ノ岡(I)	とくしまけん みよしぐん 徳島県三好郡 みよしちようおおあざあしろ 三好町大字足代 あざみやのおか 字宮ノ岡319-1他	36482		34度	133度	1996. 4. 15~1996. 5. 8	29,940m ²	
み やの お か に 宮ノ岡(II)	とくしまけん みよしぐん 徳島県三好郡 みよしちようおおあざあしろ 三好町大字足代 あざみやのおか 字宮ノ岡319-1他	36482		34度	133度	1996. 5. 9~1996. 5. 16	11,500m ²	
だ い 台	とくしまけん みよしぐん 徳島県三好郡 みよしちようおおあざあ 三好町大字足 しろほか 代他	36482		34度	133度	1996. 5. 17~1996. 5. 31	6,015m ²	
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
花 園	集落跡	室町時代	掘立柱建物跡3棟、炉跡2 基、暗渠3条、土坑1基、 柱穴280基、炭窯跡1基、 火葬墓1基		土師質土器 須恵質土器 近世陶磁器 宋銭、石鏃			
太刀野山(I)					土師質土器、陶器、磁器		試掘調査	
太刀野山(II)							試掘調査	
宮ノ岡(I)					須恵器、寛永通寶		試掘調査	
宮ノ岡(II)					土師質土器片		試掘調査	
台			炭窯跡1基		磁器		試掘調査	

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第42集

四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 22

発行日 平成14年3月31日

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2
TEL (088)672-4545

発行 徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

印刷 株式会社教育出版センター
〒771-0138 徳島市川内町平石流通団地27番地